

AWS RE:INVENT

RE:CAP



AWS Black Belt Online Seminar re:Invent 2023アップデート速報

Masato Kobayashi, Hiroshi Okamoto and Japan Tech Team
Amazon Web Services Japan G.K.



内容についての注意点

- 本資料では本資料作成時点のサービス内容および価格についてご説明しています。最新の情報はAWS公式ウェブサイト(<http://aws.amazon.com>)にてご確認ください。
- 資料作成には十分注意しておりますが、資料内の価格とAWS公式ウェブサイト記載の価格に相違があった場合、AWS公式ウェブサイトの価格を優先とさせていただきます。
- 価格は税抜表記となっております。日本居住者のお客様には別途消費税をご請求させていただきます。
- AWS does not offer binding price quotes. AWS pricing is publicly available and is subject to change in accordance with the AWS Customer Agreement available at <http://aws.amazon.com/agreement/>. Any pricing information included in this document is provided only as an estimate of usage charges for AWS services based on certain information that you have provided. Monthly charges will be based on your actual use of AWS services, and may vary from the estimates provided.

自己紹介

小林 正人

アマゾンウェブサービスジャパン合同会社
ソリューションアーキテクト

様々なお客様が「AWSを活用しハッピーになる」
を実現するための支援を行うチームを統括。最近
は要素技術に注力するチームも担当してます

好きなサービス：ストレージサービス全般

好きないきもの：カピバラ



アジェンダ

- イベント概要
- サービスアップデートのまとめ（155+件あります）
- お知らせ

イベント概要



AWS re:Invent 2023 イベント概要

- AWSによるクラウドコンピューティングに関する世界最大規模の「学習型」カンファレンス
 - 2023年11月27日(月) ~ 12月1日(金)
- 多数のコンテンツ
 - 5テーマの基調講演、17のイノベーショントーク、2000+のブレイクアウトセッション
- 多くのお客様がご参加
 - 現地参加：50,000+
 - 日本からのお客様：1,700+



サービスアップデート



Keynoteで発表されたアップデート

Monday Night Live by Peter DeSantis

Keynote by Adam Selipsky



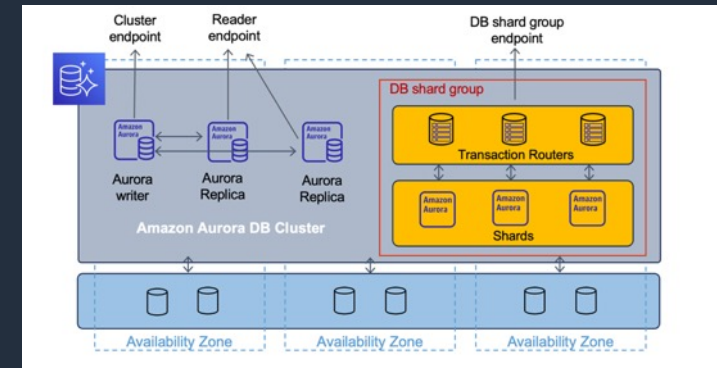
Keynote by Peter DeSantis & Adam Selipsky

1. Amazon Aurora Limitless Databaseを発表
2. Amazon ElastiCache Serverlessを発表
3. Amazon Redshift Serverless with AI-driven scaling and optimizationを発表
4. Amazon S3 Express One Zoneを発表
5. AWS Graviton 4とEC2 R8gインスタンスを発表
6. AWS Trainium 2とEC2 Trn2インスタンスを発表
7. Amazon Bedrockでモデルのファインチューニングが可能に
8. Knowledge Base for Amazon Bedrockが一般利用開始に
9. Amazon BedrockのContinued pre-trainingを発表
10. Agents for Amazon Bedrockが一般利用開始に
11. Guardrails for Amazon Bedrockを発表
12. Amazon Qを発表
13. Amazon Redshiftに対するzero-ETL機能の展開を発表
14. DynamoDBからOpenSearch Serviceとのzero-ETL対応を発表
15. Amazon DataZone AI recommendationsを発表



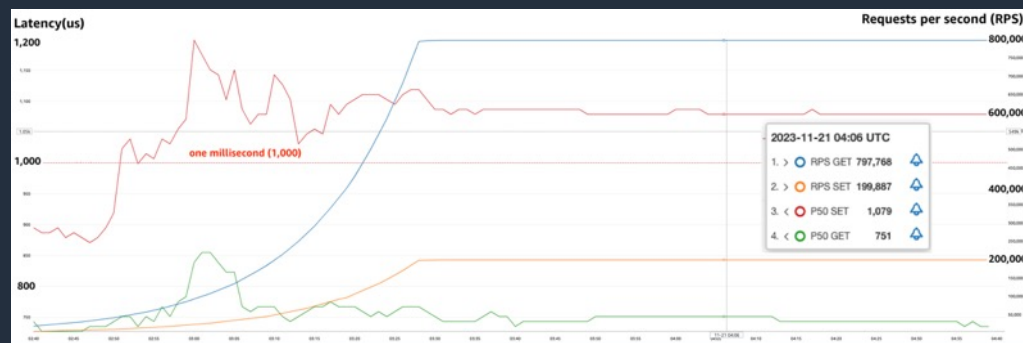
Amazon Aurora Limitless Databaseを発表

- 秒間数百万の書き込み、ペタバイト規模のデータ量にまでスケールするデータベース
 - データモデルに基づいて自動的にデータやクエリを複数のクラスタに分散。シャーディングの仕組みを独自に開発・メンテする必要が無い
 - Aurora Serverlessのクラスタは必要に応じて水平・垂直に自動スケーリングする
- PostgreSQL互換版で限定プレビュー申込みを受付中。MySQL版はComing Soon
- 東京ほか4リージョンにて



Amazon ElastiCache Serverlessを発表

- インフラの構築や設定なしに可用性の高いキャッシュを作成できる
 - パフォーマンス劣化やダウンタイムなしに、水平・垂直に即座にスケール
 - 複数AZに自動的にレプリケーションを行い、全てのワークロードで99.99%の可用性を提供
 - データ量とコンピュートリソース使用量に基づいた料金体系
- MemcachedとRedisの双方に対応。全てのAWS商用リージョンで一般利用を開始



Amazon Redshift Serverless with AI-driven scaling and optimizationを発表

- Amazon Redshift Serverlessでワークロード特性をAIが学習し、それに合わせてプロアクティブにリソース量を調整・最適化する
 - 変動するワークロードにおいてコストパフォーマンスを最大10倍改善
 - 費用と性能のバランスを用途に応じて調整することが可能
- 東京ほか5リージョンで評価・検証用途のプレビューを開始。本番環境での利用は非推奨となる




Amazon S3 Express One Zoneを発表

- 最もデータアクセスが高速で、高いパフォーマンスを発揮する新しいストレージクラス
 - 専用HW/SWを利用し、Standardの10倍高速に
 - 新しいタイプのバケットを作成する必要あり
- 性能に対するレイテンシの影響が大きいアプリケーションでデータアクセスを高速化。処理全体の所要時間短縮に効果的
 - Amazon EMR, Amazon Redshift, Amazon SageMaker, Amazon Bedrock, Amazon Athenaからも利用できる
 - 東京ほか3リージョンで一般利用開始

A screenshot of the AWS console showing a list of Directory buckets. The console interface includes a search bar, a dropdown menu for the region (US East (N. Virginia) us-east-1), and a table of buckets. The table has columns for Name, AWS Availability Zone, and Creation date.

Name	AWS Availability Zone	Creation date
jbarr-user1-a25-e-s3	use1-az5	October 30, 2023, 12:53:08 (UTC-07:00)
jbarr2-user1-a25-e-s3	use1-az5	October 30, 2023, 12:52:23 (UTC-07:00)
jeff-ds-user1-a25-e-s3	use1-az5	November 2, 2023, 10:57:49 (UTC-07:00)
jeffbarr-user1-a25-e-s3	use1-az5	October 30, 2023, 12:56:37 (UTC-07:00)

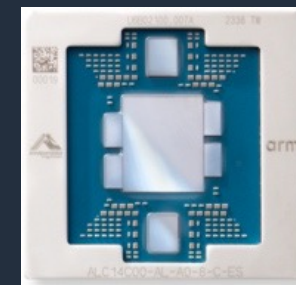
おまけ: Amazon S3のストレージクラス一覧

 <p>New</p> <p>S3 Express One Zone</p> <p>シングルAZ</p> <p>再生成可能、レイテンシー重視、高頻度なアクセス</p> <ul style="list-style-type: none"> • 一桁ミリ秒単位のアクセス • directory bucket としての利用 • より低レイテンシを実現するために同じAZに配置することができる 	 <p>S3 Intelligent-Tiering</p> <p>アクセスパターンが変化する</p> <ul style="list-style-type: none"> • ミリ秒単位のアクセス • 取得課金なし • Archive Instant Access tier 	 <p>S3 Standard</p> <p>高頻度なアクセスデータ</p> <ul style="list-style-type: none"> • ミリ秒単位のアクセス • 取得課金なし 	 <p>S3 Standard-IA</p> <p>低頻度なアクセスデータ</p> <ul style="list-style-type: none"> • ミリ秒単位のアクセス • GB単位の取得課金 	 <p>S3 Glacier Instant Retrieval</p> <p>アクセスがまれなデータ</p> <ul style="list-style-type: none"> • ミリ秒単位のアクセス • GB単位の取得課金 	 <p>S3 Glacier Flexible Retrieval (formerly S3 Glacier)</p> <p>アーカイブデータ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 分単位から時間単位の取得時間 • バレク取得は無料 	 <p>S3 Glacier Deep Archive</p> <p>長期アーカイブデータ</p> <ul style="list-style-type: none"> • 時間単位の取得時間
AWS リージョン ≥ 3 AZ						
性能要件の最も高いアプリケーションで活用						



AWS Graviton 4とEC2 R8gインスタンスを発表

- AWSが設計したARMベースのプロセッサ、AWS Graviton 4プロセッサを発表
 - Graviton 3と比較して30%高速、50%多いコア数、75%広いメモリ帯域幅を提供
- Amazon EC2 R8gインスタンスで利用可能に
 - 高性能なDB、インメモリキャッシュ、ビッグデータ分析に適する
 - R7gと比較して3倍のvCPU/メモリを搭載
- プレビュー申込みを受付中



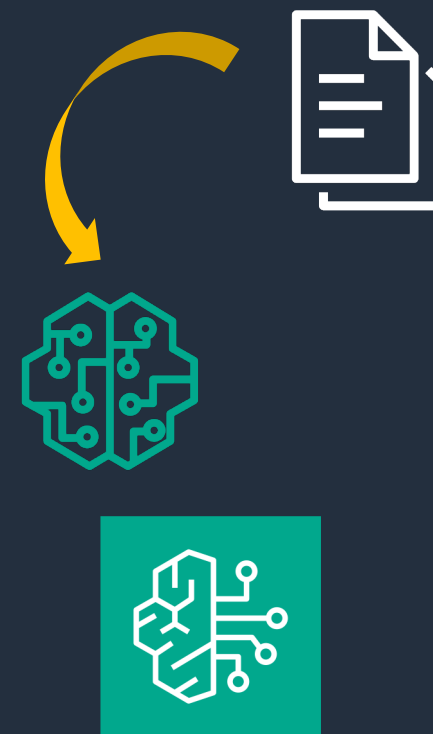
AWS Trainium 2とEC2 Trn2インスタンスを発表

- AWS Trainium 2チップを発表
 - AWS Trainiumと比較してトレーニング処理が最大4倍高速、メモリ容量が3倍、エネルギー消費効率が2倍に
 - Amazon EC2 Trn2インスタンスに搭載。1インスタンスあたり16器のTrainium 2を搭載する
- AWS EFAによるEC2 Ultra Clusterで、最大100,000のTrainium 2で処理を実行可能
 - 最大65EFLOPSを発揮し、3,000億パラメータのLLMのトレーニングを数ヶ月から数週間の単位に短縮する
- 詳細は今後発表予定



Amazon Bedrockでモデルのファインチューニングが可能に

- ラベル付きの小規模なデータセットで、モデルを特定のタスクに特化させる手法がファインチューニング
- Amazon Bedrockで選択できる以下のモデルで、ファインチューニングを実行可能に
 - Cohere Command Lite, Meta Llama 2, Amazon Titan Text Lite/Express
- バージニアとオレゴンにて一般利用開始



Amazon Bedrock

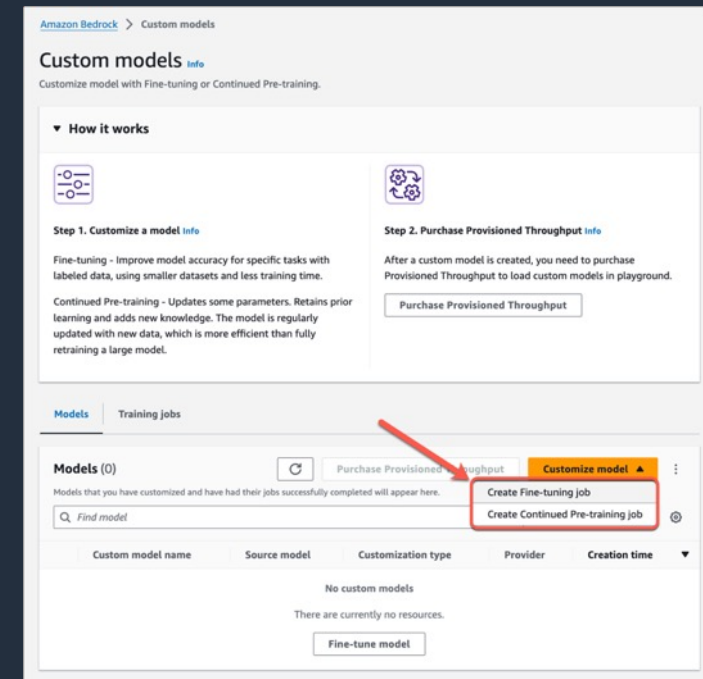
Knowledge Base for Amazon Bedrockが一般利用開始に

- 基盤モデルとデータソースを組み合わせた拡張検索生成(RAG)をフルマネージドに実現可能に
 - RAGはデータソースに格納された正しい情報を基盤モデルに処理させることで、関連性が高く正確な応答を返すようにする手法
- Amazon S3内に格納されたデータの場所を指定するだけで、ベクトルDBにデータを取り込むワークフローを実行
- バージニアとオレゴンで一般利用開始に



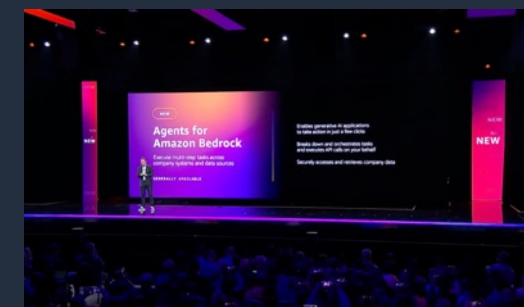
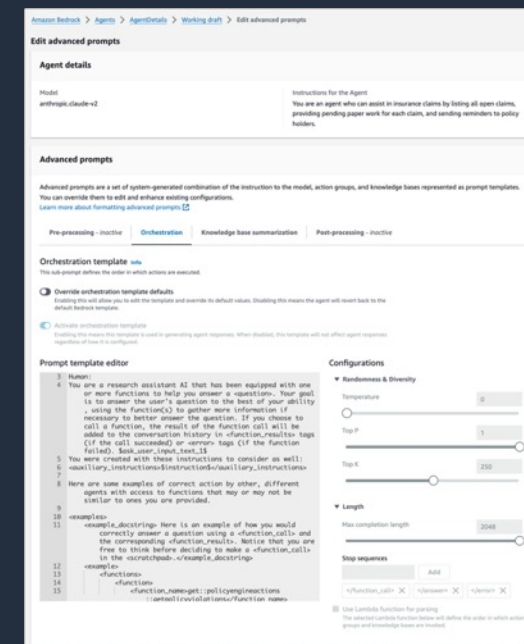
Amazon BedrockのContinued pre-trainingを発表

- Amazon Titan Text Express/Liteについて、安全で管理された環境を利用して独自のラベルなしデータによるカスタマイズが可能に
 - ドメイン知識を必要とするアプリケーションを構築するには、一般的な公開データでトレーニングされた基盤モデルでは不十分な場合がある
 - 用途に応じた知識を基盤モデルに与えるために、ユーザが提供する独自データを加えて継続的に事前トレーニングを行うことが可能
- バージニアとオレゴンでプレビューを開始



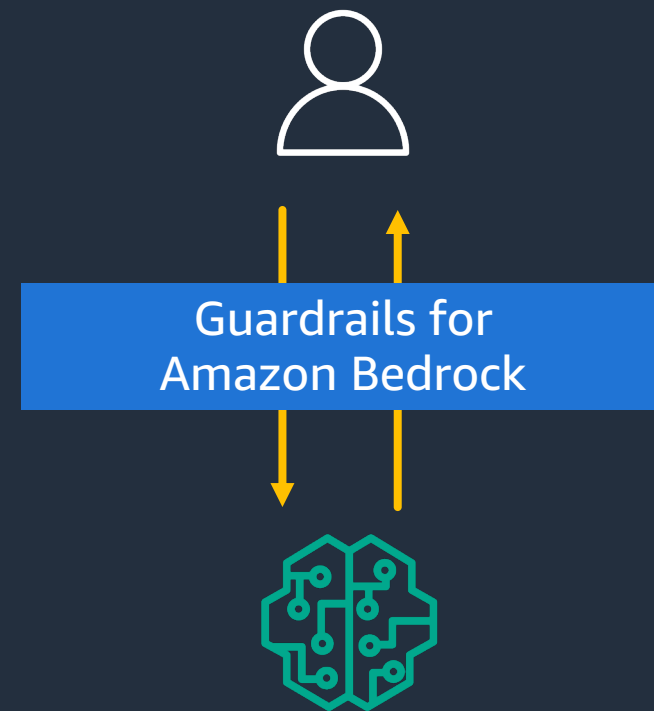
Agents for Amazon Bedrockが一般利用開始に

- 基盤モデルだけで完結しないタスクを実行することを容易にするフルマネージドサービス
 - 自然言語で指示を記述し、組織内の別システムへのアクセス方法を提供し、Lambda関数を定義することでエージェントを作成
 - エージェントはリクエストを分析。基盤モデルの推論能力を活用し、リクエスト完了までのステップを決定・実行する
 - データは全て暗号化され、安全
- バージニアとオレゴンで一般利用開始に



Guardrails for Amazon Bedrockを発表

- ユーザのクエリや基盤モデルの応答を評価し、不適切なコンテンツを評価・フィルタする機能
 - 多くの基盤モデルは保護機能を有しているが、独自の基準やルールを適用したい場合に便利な機能
 - ユースケースに応じた「責任あるAI利用」を実現するために利用できる
- 現時点ではテキストベースのモデルで、英語に対応。Agents for Amazon Bedrockとカスタマイズ済みモデルにも対応
- バージニア、オレゴンでプレビューを開始



Amazon Qを発表

- エンタープライズグレードのセキュリティとプライバシーが最初から組み込まれた、新しいタイプの生成AIアシスタント
 - 組織内の情報に基づいて、日々の仕事の処理や意思決定の高速化、問題解決、イノベーションの実現に必要な情報とアドバイスを提供
 - Amazon Qは、その内部のモデルのトレーニングためにお客様の情報を一切使用しない
- Amazon Qは、どこにでもいる



開発者やIT技術者を支えるエキスパート、Amazon Q

- 開発者やIT技術者の仕事を支えるアシスタント
 - 「WebアプリをAWSで作る方法は？」と言った質問に回答
 - マネジメントコンソールでエラーが出力されたときに、「Troubleshoot with Amazon Q」ボタンを押すと、調査・解析・解決策を提案する
 - Amazon CodeWhispererと連携してIDEからも利用可能。「このコードは何をやっていて、どう動くのか説明してほしい」と言った問いかけに回答する
 - Amazon CodeCatalystと連携し、Amazon Qにタスクをアサイン。課題の解決を任せられることも
 - Amazon Q Code TransformでJava 8からJava 17にコードを変換。.NET Frameworkからクロスプラットフォームの.NETへの変換も近日対応

ビジネスのエキスパート、Amazon Q

- Amazon Qをビジネスデータやシステムと接続することで、ビジネス上のタスクの解決にも活用可能
 - 「最新のロゴ利用ガイドラインは？」といった質問に回答可能。JiraやSalesforce、ServiceNow、Zendeskへのチケット起票を依頼することも
 - Amazon Q in Quicksight: 自然言語でダッシュボードをカスタマイズしたり、データに基づいて因果関係を説明するストーリーを生成できる
 - Amazon Q in Connect: 通話内容に基づいて、オペレータが必要とする情報を提供。参照すべき文書へのリンクの提示も
 - Amazon Q in Supply Chain: サプライチェーンの現状に関する情報に基づいて、「何が」「なぜ」「もしも」といった質問に的確に回答する

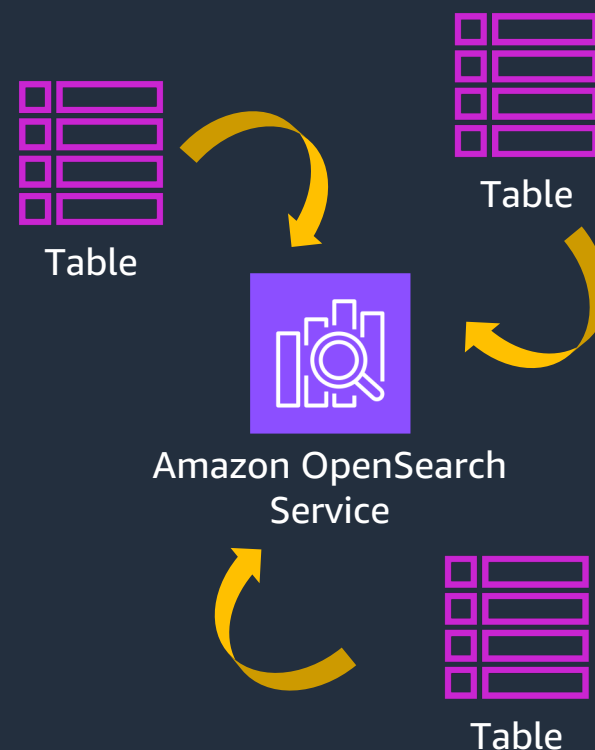
Amazon Redshiftに対するzero-ETL機能の展開を発表

- Amazon Aurora PostgreSQLがRedshiftに対するzero-ETLに対応
 - オハイオリージョンでプレビューを開始
- Amazon RDS for MySQLがRedshiftに対するzero-ETLに対応
 - 東京リージョンほか4つのリージョンでプレビューを開始
- Amazon DynamoDBがRedshiftに対するzero-ETLに対応
 - オハイオリージョンでプレビューを開始



DynamoDBからOpenSearch Serviceとのzero-ETL対応を発表

- Amazon DynamoDBからAmazon OpenSearch Serviceに対するzero-ETLインテグレーションが発表された
- トランザクショナルなデータをDynamoDBで処理し、OpenSearchで全文検索やベクトル検索などを実行する役割分担をニアリアルタイムで
 - 対象のDynamoDBテーブルを指定するだけで利用開始。DynamoDBへの書き込み後、数秒でレプリケーション
- 東京ほか12リージョンで一般利用開始



Amazon DataZone AI recommendationsを発表

- ビジネスデータカタログを提供することで、データ利活用を加速するAmazon DataZoneで、生成AIによる機能強化を発表
 - データプロデューサー: ワンクリックでデータの説明・背景情報を生成。重要なデータ列を明示し、分析時に推奨される事項を追加できる
 - データ利用者: AIによるレコメンデーションにより、データを容易に発見。データに関する説明や使用例が提示され、データ活用にスムーズに取り組める
- バージニアとオレゴンのリージョンでプレビューを開始



Keynoteで発表されたアップデート

Keynote by Swami Sivasubramanian



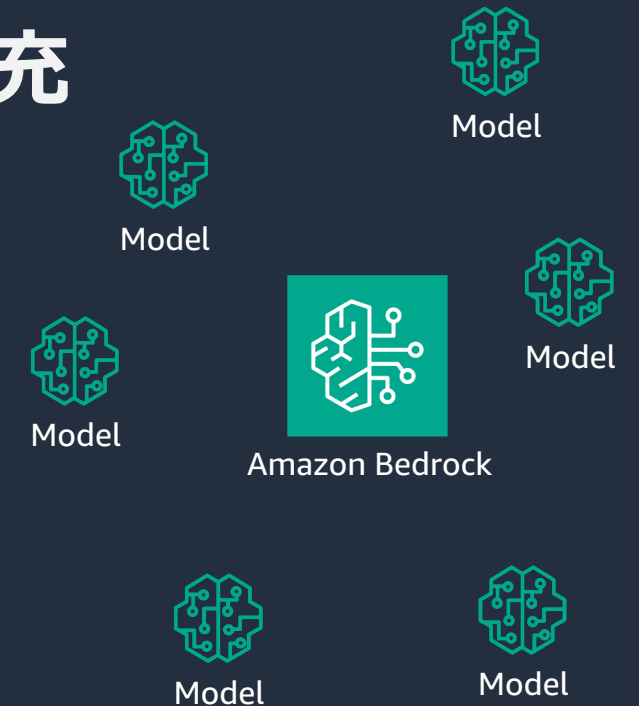
Keynote by Swami Sivasubramanian

1. Amazon Bedrockで基盤モデルの選択肢を拡充
2. Amazon Bedrockで複数の基盤モデルが一般利用開始に
3. Amazon SageMaker HyperPodを発表
4. Amazon SageMakerで3つの機能強化
5. Vector engine for OpenSearch Serverlessが一般利用開始に
6. 3つのDBサービスでベクトル検索機能を拡充
7. Amazon Neptune Analyticsを発表
8. Amazon OpenSearch ServiceとAmazon S3のzero-ETL統合
9. AWS Clean Rooms MLのプレビューを開始
10. Amazon Q generative SQL in Amazon Redshiftを発表
11. Amazon Q Data integration in AWS Glueをアナウンス
12. Model Evaluation on Amazon Bedrockを発表



Amazon Bedrockで基盤モデルの選択肢を拡充

- 多岐にわたる用途のためモデルの選択肢を拡充
 - Anthropic Claude 2.1 (一般利用開始)
 - Meta Llama 2 70B (一般利用開始)
 - Amazon Titan Image Generator (プレビュー)
 - デフォルトで不可視の「すかし」を挿入。安全・安心・透明性のあるAIテクノロジーの開発と利用を推進する
 - Amazon Titan Multimodal Embeddings (一般利用開始)
 - 画像とテキストの組み合わせを入力しベクトル表現に。複数の情報に基づくベクトル検索を容易に
 - バージニア、オレゴンにて



Amazon Bedrockで複数の基盤モデルが一般利用開始に

- Stable Diffusion XL 1.0が一般利用開始に
 - Stability AI社のStable Diffusion XL 1.0(SDXL1.0)が一般利用開始に
 - バージニアとオレゴンのリージョンにて
- Amazon Titan Textが一般利用開始に
 - Amazon Titan Text Express: 8,000トークンに対応。英語に最適化されているが100+言語対応がプレビュー中
 - Amazon Titan Text Lite: 4,000トークン対応。Titan Textで最も高速で、英語のタスクに適する
 - 東京ほか4つのリージョンにて

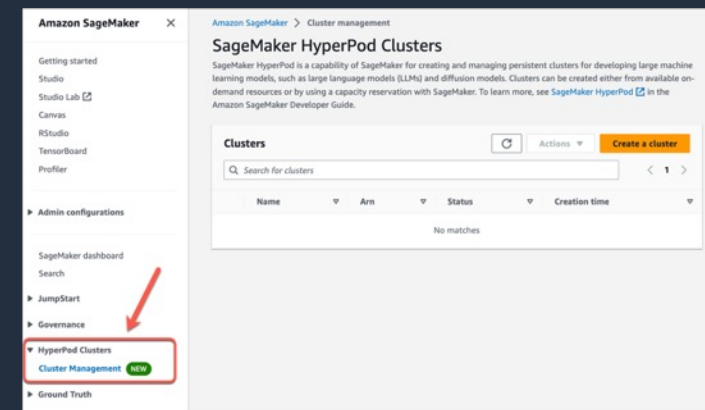


Amazon Bedrock



Amazon SageMaker HyperPodを発表

- 大規模な分散トレーニング用のインフラを素早くセットアップし、基盤モデルのトレーニングを最大40%短縮
 - 分散トレーニング用のライブラリを提供。ワークロードを自動分割し分散するとともに、チェックポイントを定期的に保存し、障害時の処理継続性を向上する
- 基盤の設計・構築・トラブルシュー트에割く労力を減らし、モデルへの取り組みに注力
- 東京ほか8リージョンで一般利用開始



Amazon SageMakerで3つの機能強化

- Amazon SageMaker Inference
 - インスタンスに複数のモデルを同居させ稼働率を向上。最大50%の費用削減
 - 負荷に応じたリクエストルーティングで平均20%レイテンシを短縮
- Amazon SageMaker Clarify
 - 基盤モデルの比較機能を提供開始。複数の選択肢から最適なものを選び易く
- Amazon SageMaker Canvas
 - 自然言語による指示でコード開発なしにデータ準備(preparation)が可能に
 - SageMaker Canvasで利用する基盤モデルのカスタマイズにも対応
- 東京を含む各リージョンで一般利用開始



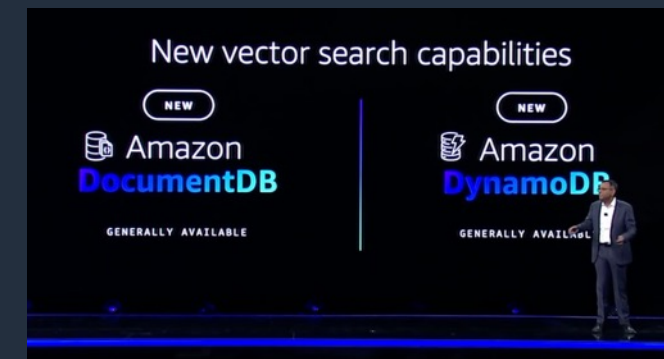
Vector engine for OpenSearch Serverlessが一般利用開始に

- Amazon OpenSearch ServerlessでVector engineが一般利用開始に
 - 複雑なベクトルデータからなる数十億のデータを、ミリ秒単位の所要時間で保存・更新・検索できる
 - 生成AIの分野では入力データをベクトル表現(embeddings)に変換して扱うことがあり、類似性検索を高速に行えるメリットがある
- OpenSearchクライアントやLangChainなどのオープンソースツールと互換性がある
- 東京ほか7リージョンで一般利用開始



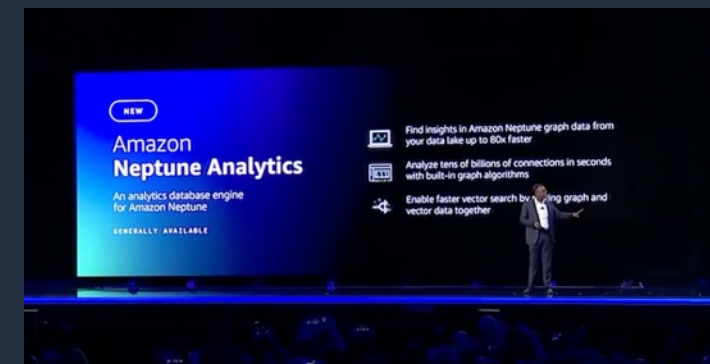
3つのDBサービスでベクトル検索機能を拡充

- Amazon MemoryDB for Redis
 - 数百万のベクトルデータの保存に対応。1桁ミリ秒の読み書きレイテンシと、秒間数万クエリの処理量を99%以上の時間について提供
 - 東京ほか5リージョンでプレビューを開始
- Amazon DocumentDB(with MongoDB compatibility)
 - DynamoDB 5.0のクラスタで、全リージョンで一般利用開始
- Amazon DynamoDB
 - OpenSearch Serviceへのzero-ETLを介して実現



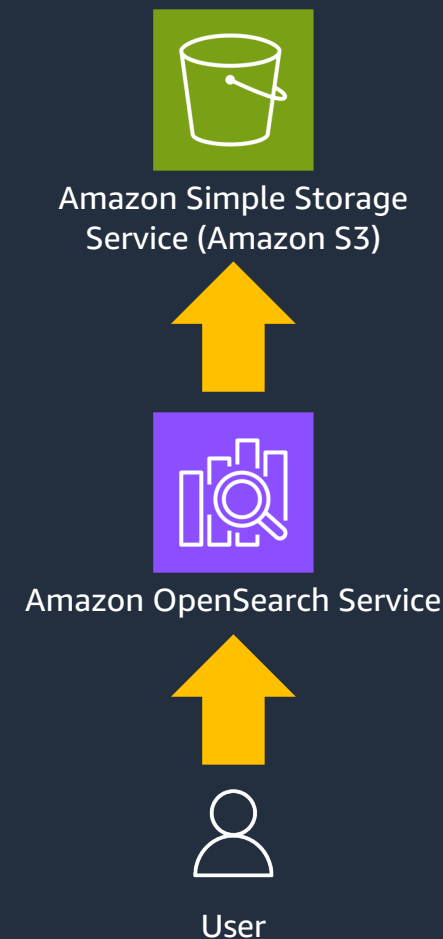
Amazon Neptune Analyticsを発表

- グラフデータのための新しい分析エンジン、Amazon Neptune Analyticsを発表
 - NeptuneのグラフDBや、S3に格納されたグラフデータを取り込んで分析。従来比最大80倍高速に分析を実行
 - 生成AIアプリケーションへの応用も
- グラフデータのロード、クエリ、分析のためのAPIを提供。データパイプラインを構築することなく利用できる
- 東京ほか5リージョンで一般利用開始



Amazon OpenSearch ServiceとAmazon S3のzero-ETL統合

- Amazon OpenSearch Serviceから、Amazon S3に保存されたデータにzero-ETLでアクセス
 - S3に保存したデータをOpenSearch Serviceにロードすることなく、直接分析できる
 - データローディングの手間なし。データを重複して保存するコストも削減できる
- Amazon OpenSearch Service 2.11でプレビューが可能。東京ほか5つのリージョンにて



AWS Clean Rooms MLのプレビューを開始

- 生データを開示せずデータのコラボレーションを可能にするAWS Clean RoomsでMLによる予測的洞察の生成が可能に
 - 最初に登場するモデルは、類似するセグメントを生成することに特化
 - 今後数ヶ月でヘルスケアに関するモデルを提供予定
- 扱うデータはAWSのモデルトレーニングには一切使用しない
- 東京を含む、AWS Clean Roomsが利用可能な全てのリージョンでプレビューを開始

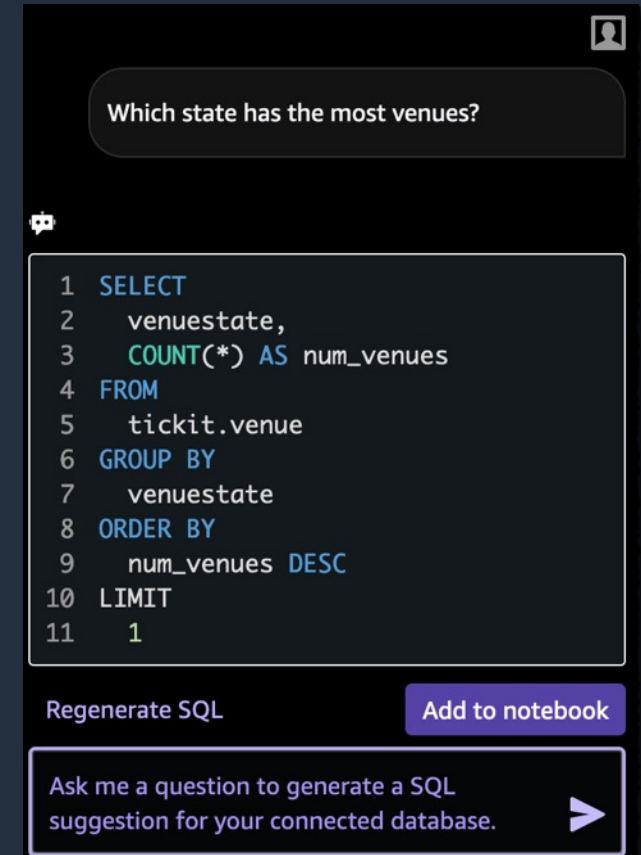


AWS Clean Rooms



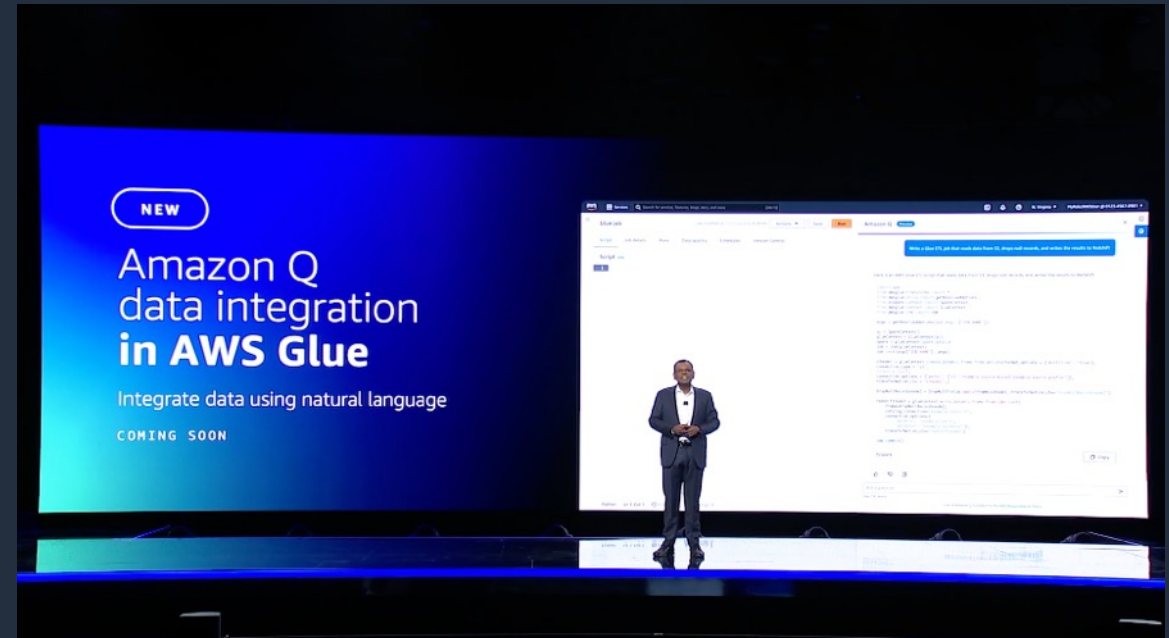
Amazon Q generative SQL in Amazon Redshiftを発表

- Amazon Redshift Query Editor v2にAmazon Qを導入。ユーザの意図を自然言語で入力すると推奨SQLクエリを出力する
 - テーブル名やカラム名などRedshift内のデータ構造を理解した上でクエリを生成
 - 「地域別の総収益を調べる」といった意思を示すと、それを実現するクエリが推奨される
 - ユーザのデータをAWSが利用することはない
- 追加料金なし。バージニアとオレゴンにてプレビューを開始



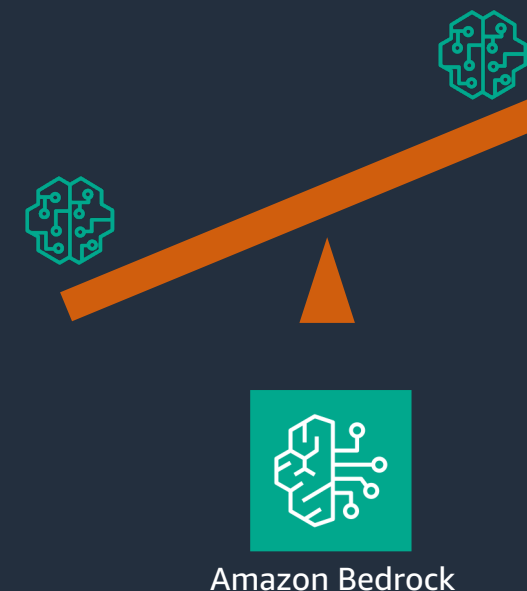
Amazon Q Data integration in AWS Glueをアナウンス

- AWS GlueにもAmazon Qを。自然言語による開発者サポート機能を提供し、データ処理や統合を容易に
- 機能の使い方ガイドや、チャットインターフェースによるトラブルシューティング支援を提供予定
- 後日詳細を発表予定



Model Evaluation on Amazon Bedrockを発表

- 多様な基盤モデルの比較・評価をサポートする
 - 「質問に答える」「要約」などのタスクを設定し、組み込みデータセットまたはカスタムデータセットで指定したモデルの比較を実施、レポートを出力
 - 親しみやすさ、スタイル、ブランディングなど人間の判断が必要な場合は、ワークフローにそれを組み込むことができる
- 異なる基盤モデルの比較や、新旧バージョンの比較を自動化し、最適な選択を支援する
- バージニア、オレゴンでプレビューを開始



Amazon Bedrock



Keynoteで発表されたアップデート Keynote by Werner Vogels



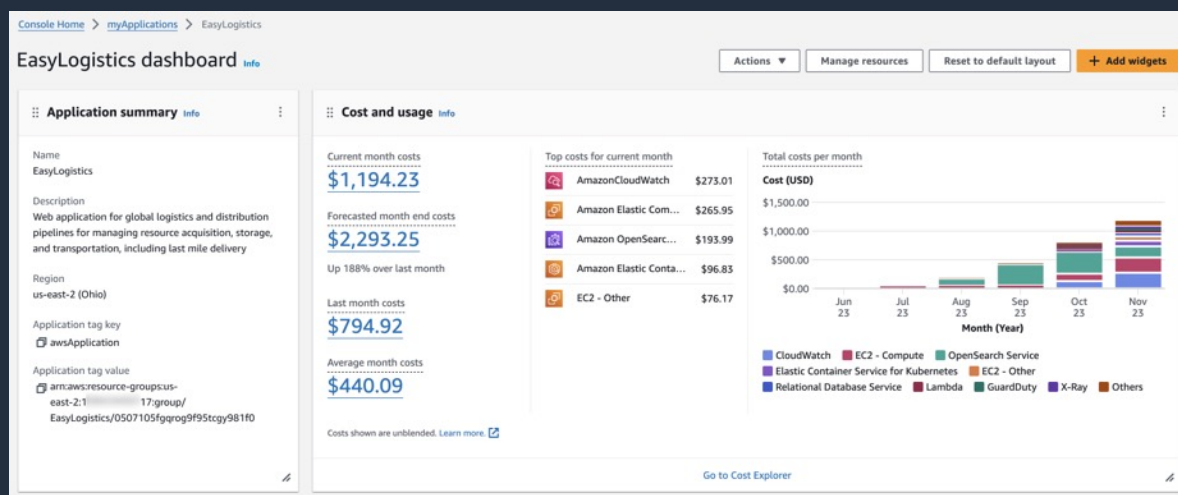
Keynote by Werner Vogels

1. myApplication in the AWS Management Consoleを発表
2. Amazon CloudWatch Application Signalsを発表
3. Amazon SageMaker Studio Code Editorを発表
4. AWS Application Composer in VS Code
5. Amazon Inspector CI/CD Container Scanning



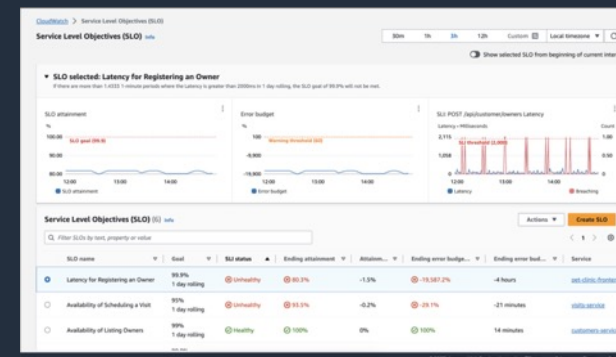
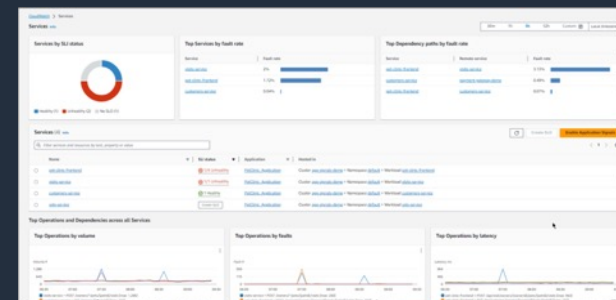
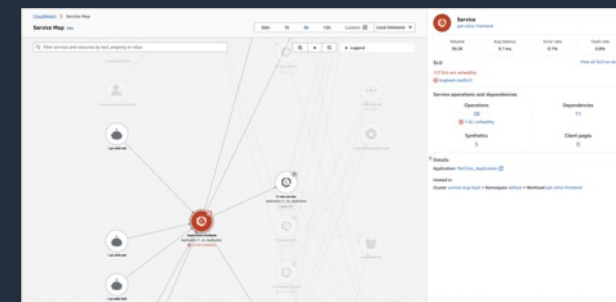
myApplication in the AWS Management Consoleを発表

- AWS Management Consoleで管理対象アプリケーションのコスト、稼働状況、セキュリティ、パフォーマンスを一元的に確認可能に
 - AWS Cost Explorer、AWS Security Hub、Amazon CloudWatch Application Signalsなどと連携し、情報の可視化と改善機会の発見につながる
- 東京、大阪ほか17リージョンで一般利用開始



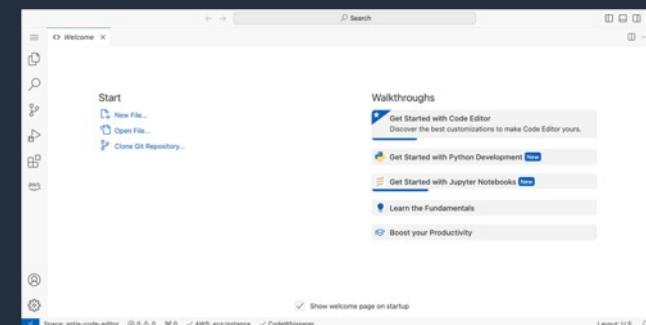
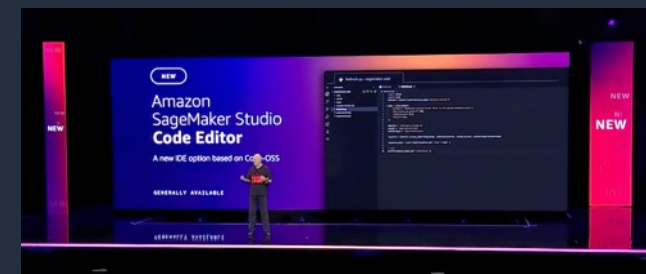
Amazon CloudWatch Application Signalsを発表

- AWS上のアプリケーションを自動的に計測し、運用・改善を容易にする新機能。コーディングなしでアプリケーションの総合的分析が可能に
 - Amazon自身がアプリケーション運用を行ってきた経験をふまえたベストプラクティスに基づき開発
 - SLO(Service Level Objectives)を定義し、それが達成できているかを継続的にモニタリング
 - メトリクス、トレースログ、アプリケーションログ、合成モニタリングなどのデータを自動的に関連付けて処理
- 東京ほか5リージョンでプレビューを開始



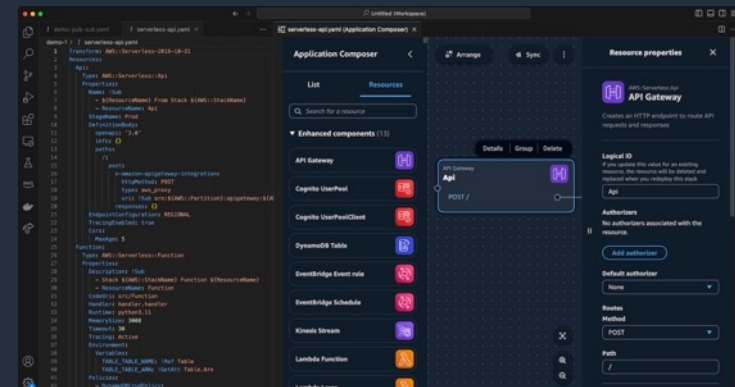
Amazon SageMaker Studio Code Editorを発表

- Amazon SageMaker StudioでCode Editorが利用可能に。AI/MLアプリケーションの開発をワンストップで実施可能になりチームの生産性を向上
 - Code-OSS(Visual Studio CodeのOSS)がベース。豊富な機能拡張や、開発者が使い慣れたショートカットをそのまま利用できる
 - AWS Toolkit for Visual Studio Codeが設定済み。CodeWhispererによるコーディング支援。CodeGuruによるスキャンにも対応
- 東京ほかSageMaker Studioが利用可能なリージョンにて一般利用開始



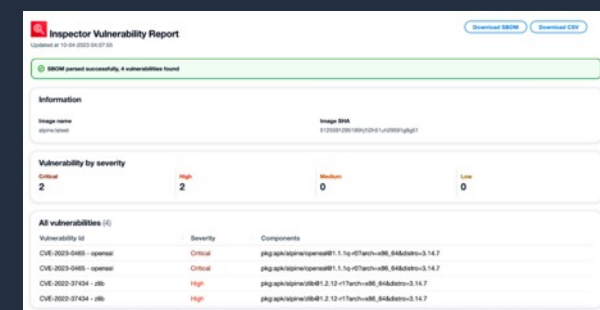
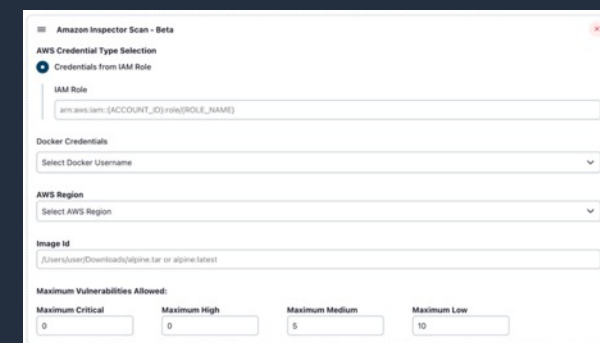
AWS Application Composer in VS Code

- Visual Studio CodeからAWS Application Composerを呼び出し可能に。GUIによりシステム設計の継続的な改善が迅速かつ容易に
 - ビジュアルキャンパスを利用して、AWSのサービスを配置・接続。CloudFormationまたはAWS SAMのテンプレートを出力する
 - 生成AIによるレコメンデーションが利用でき、設計・改善をサポート
- AWS Toolkit for Visual Studio Codeの一部として一般利用開始に



Amazon Inspector CI/CD Container Scanning

- Amazon Inspectorが開発者向けツールと統合。コンテナイメージのセキュリティアセスメントを実行可能に
 - JenkinsやTeamCityなどに対応。各ツールのマーケットプレイスで提供されるプラグインを導入して利用
 - AWS Management ConsoleでInspectorを有効化する必要はなく、開発者向けツールとシームレスに動作
- 開発工程の早い段階で、セキュリティ担保の仕組みを組み込むことで安全性を向上
- 東京、大阪を含め各リージョンで一般利用開始



AWS Partner & Marketplace



AWS Partner & Marketplace

1. 2023 Geo and Global AWS Partners of the Year
2. AWS Partner-Led Supportの拡張ポートフォリオを発表
3. SaaS Quick Launch for AWS Marketplaceを発表
4. 5つの新しいSpecialization認定プログラムを発表
5. AWSパートナープログラムのアップデート (1)
6. AWSパートナープログラムのアップデート (2)



2023 Geo and Global AWS Partners of the Year

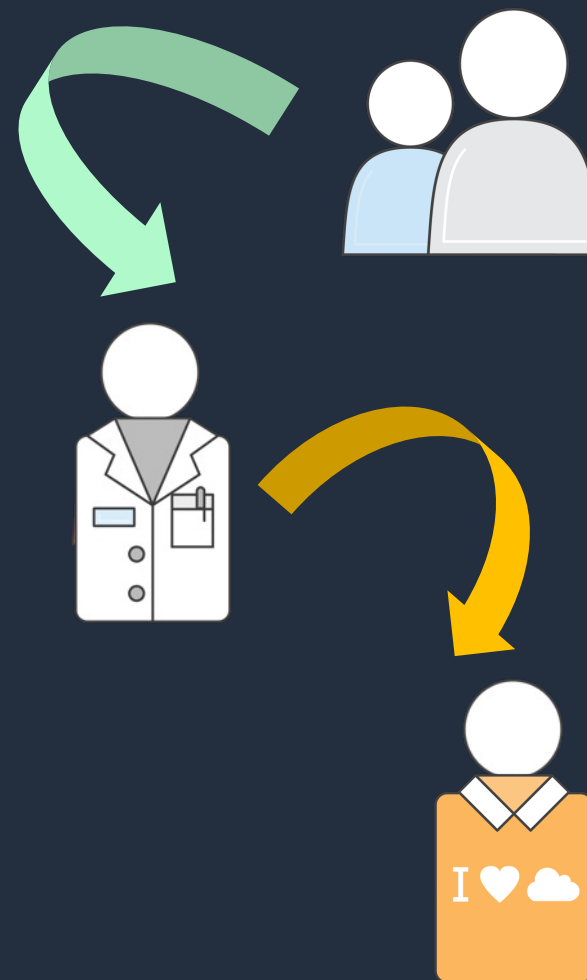
- SI Partners of the Year
 - APJ部門 : **Classmethod**
- Training Partners of the Year
 - **Global部門 : Trainocate**
- State or Local Government Partners of the Year
 - APJ部門 : **Fujitsu and Fujitsu Japan**
- Collaboration Partners of the Year
 - APJ部門 : **GeekFeed**



<https://aws.amazon.com/jp/blogs/apn/announcing-the-2023-geo-and-global-aws-partners-of-the-year/>

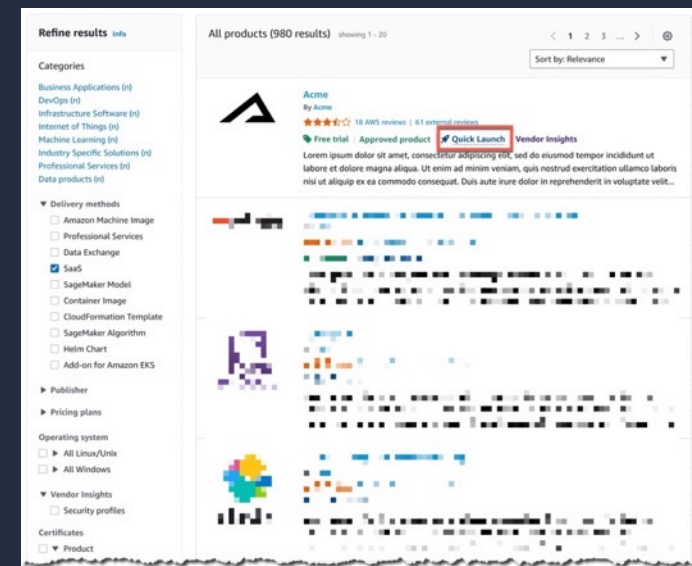
AWS Partner-Led Supportの拡張ポートフォリオを発表

- AWSに関する深い知識を持ち、Partner-Led Supportを提供するAWSパートナー向けの新プログラム
- 参加パートナーはAWS Supportが使用する診断ツールに安全にアクセスすることができ、お客様の問題解決を加速することができる
 - AWSからは継続的なトレーニング、AWS Technical Account Managerとの協力、AWSのエキスパートへの相談、重大な問題への初回15分応答などの支援を提供



SaaS Quick Launch for AWS Marketplaceを発表

- AWS MarketplaceでSaaS製品を展開するときの選択肢を追加
 - 事前に設定されたCloudFormationテンプレートを使用して、SaaS製品利用のための環境整備を合理化
 - SaaS製品をAWSから活用する上で必要最小限のリソースを素早く起動することが可能
 - SaaS提供者とAWSの双方が協力して定義・検証したもので、それに含まれる構成はAWSセキュリティのベストプラクティスに準拠している
- 一部のSaaS製品がすでに対応済み



5つの新しいSpecialization認定プログラムを発表



Resilience Competency



Cyber Insurance Competency



Advertising and Marketing
Technology Competency



AWS Built-In Competency



EKS Service Ready

※適切なAWSパートナーの検索は[パートナーソリューションファインダー](#)を使うと便利



AWSパートナープログラムのアップデート (1)

- AWS Marketplace APIs for Seller
 - AWS Marketplaceで製品を販売する際に利用できる新しいAPIを提供。製品リストや再販承認などのステータスをAPIで作成・更新・確認できる
 - 内部の製品管理ツールやリリース管理ツールに組み込むことでAWS Marketplace情報の管理を自動化、ミスを削減する
- AWS Solution Building Enablement
 - AWSパートナーに対して、ソリューションを構築し検証するための手順と、それに必要なアセットを提供
 - これをベースとすることで、AWSで稼働するソリューションの構築をスムーズに開始することができる

AWSパートナープログラムのアップデート (2)

- AWS Partner CRM ConnectorがAWS Marketplaceをサポート
 - AWS CRM ConnectorがAWS Partner Central ACE Pipeline ManagerとAWS Marketplace双方を扱えるようになった
 - AWS Marketplace機能では、Marketplaceにおけるプライベートオファーと再販承認の状態を公開・管理できる

AI / ML

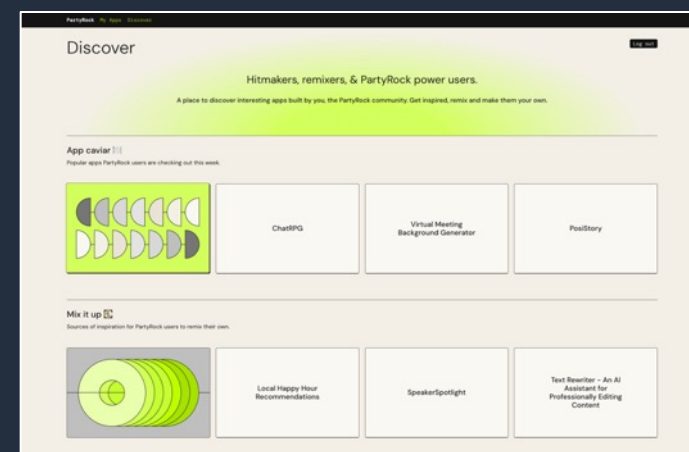


AI / ML

1. PartyRockのDiscoverページを発表
2. Bedrockがバッチ推論をサポート
3. Amazon SageMakerのLMI DLC 0.25.0をリリース
4. SageMakerのモデルデプロイを省力化するツール改善
5. SageMaker PipelinesのPython SDKが開発体験を改善
6. Amazon SageMakerの機能アップデート
7. Amazon SageMakerがUI改善によるユーザ体験を向上
8. Amazon SageMakerのユーザ体験に3つのアップデートAmazon Transcribeが基盤モデルにより100以上の言語に対応
11. Amazon Transcribe Call Analyticsの生成AIによる要約機能
12. Amazon PersonalizeのNext-Best-Actionレシピを発表
13. Amazon PersonalizeのContent Generatorを発表
14. Amazon Lexの対話型Q&A対応機能を発表
15. Amazon Lexで生成AIを活用した3つのアップデート
16. Amazon CodeWhispererのアップデート
17. AWS AI Service Cardが対応サービスを追加
18. AWS HealthScribeが一般利用開始に

PartyRockのDiscoverページを発表

- 生成AIアプリを楽しく直感的に構築し、共有できるツールPartyRockで、Discoverページが追加された
 - コミュニティが作成した人気のアプリをAWSが厳選したものが掲載される
 - 生成AIの概念を理解するために有益だったり、インスピレーションを生む斬新なものをピックアップ
- PartyRockはAmazon Bedrockの「遊び場」でもある。PartyRockでアイデアを膨らませて、本格的なアプリをBedrockで開発するのもよい



Bedrockがバッチ推論をサポート

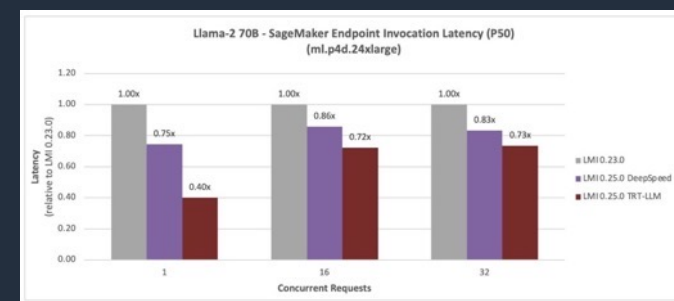
- Bedrockが複数のプロンプトをバッチで受け付けて推論できるようになった
 - モデルの評価やオフラインでの一括処理を効率化
 - CreateModelInvocationJob APIからインプットデータと出力先のS3ロケーションを指定して利用
- 料金はオンデマンドモードと同一
- Bedrockをサポートするすべてのリージョンで一般利用開始



Amazon Bedrock

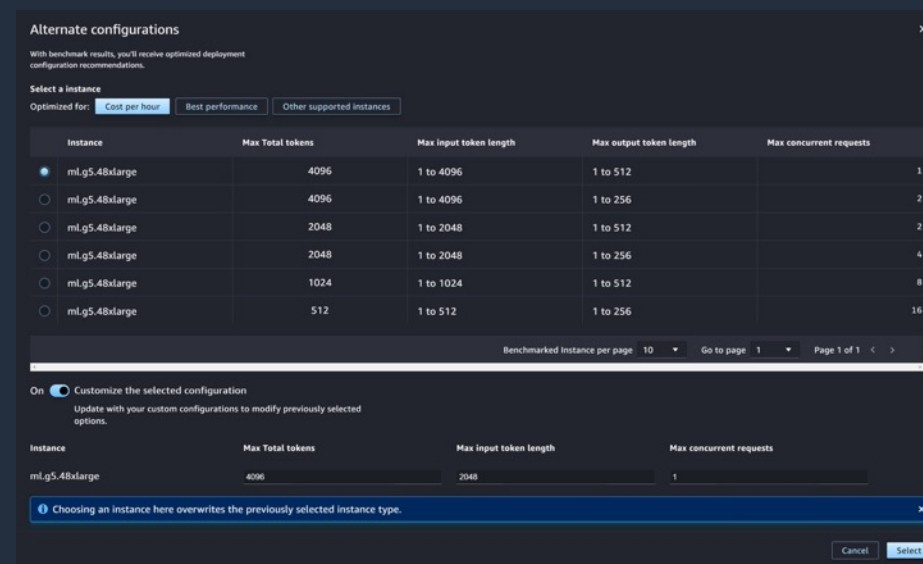
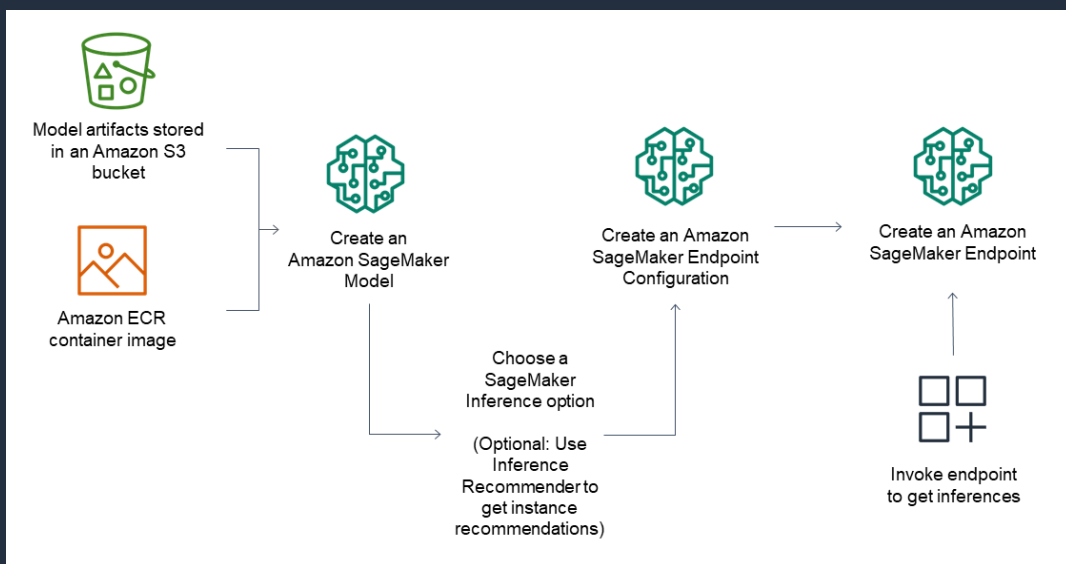
Amazon SageMakerのLMI DLC 0.25.0をリリース

- NVIDIAのTensorRT-LLMライブラリをサポートする、Large Model Inference(LMI) Deep Learning Container(DLC)バージョン0.25.0をリリース
 - 大規模言語モデル最適化のツールを簡単に利用できる
 - 旧バージョンと比較してLlama2-70BやFalcon-40B、CodeLlama-34Bのレイテンシが平均33%短縮し、スループットが平均60%向上
- リソースの利用効率を高め、低遅延の推論とスループットを実現することにつながる
- SageMakerが利用可能な全てのリージョンにて



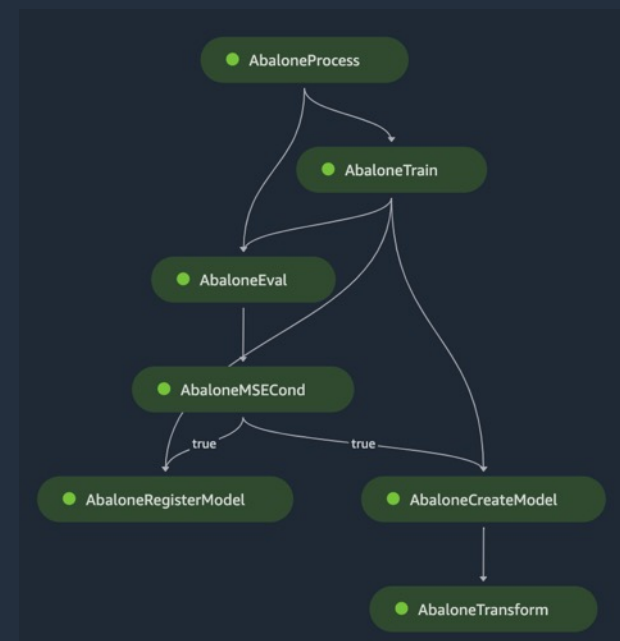
SageMakerのモデルデプロイを省力化するツール改善

- Python SDKが更新され、モデルのパッケージ化とデプロイを簡略化
- SageMaker Studio UIからのデプロイが数クリックで実現可能に
 - よく利用されるJumpStart学習済みモデルに関してはインスタンスタイプごとのベンチマーク結果を表示してデプロイ先の選択を支援



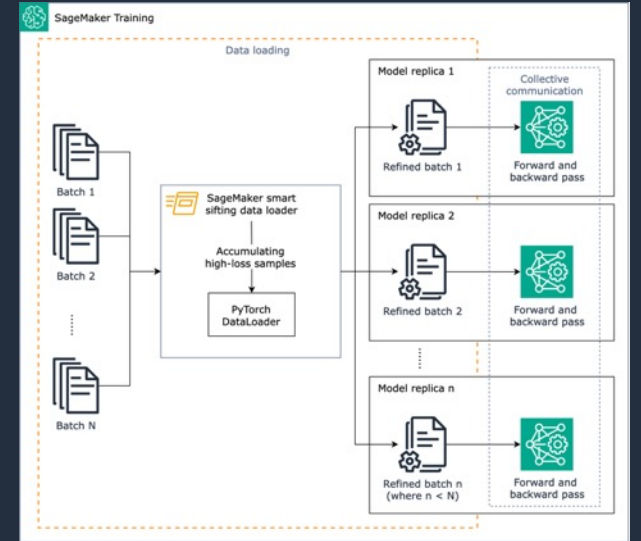
SageMaker PipelinesのPython SDKが開発体験を改善

- 機械学習の開発者が慣れ親しんだPythonの文法やデコレーターを用いて迅速にワークフローを開発できる
- SageMakerが関数の依存関係を解釈してパイプラインDAG(有向非巡回グラフ)に自動的に変換
- 開発環境から本番に向けてパイプラインに移行する際のコード変更を低減する
- 一般提供開始。GitHubでサンプルノートブックを公開



Amazon SageMakerの機能アップデート

- Smart data shiftingを発表
 - 学習用データの中身を精査して学習に寄与しそうな部分のみを自動的に選択し使用する
 - 既存スクリプトの変更は不要で学習の時間とコストを最大35%削減
 - プレビューでの提供開始
- SageMaker notebookをjobとして利用可能に
 - Notebookで定義した処理をパイプライン上のjobとしても実行可能になり、開発や管理の負荷を低減
 - SageMaker Studioをサポートする全てのリージョンで利用可能



Amazon SageMakerがUI改善によるユーザ体験を向上

- Amazon SageMakerでドメインのセットアップと管理・利用を簡単にするためのUI改善を実施
 - ひとりで使うための環境をセットアップする場合は、デフォルトの設定を利用して数クリックでドメインをセットアップ可能に
 - 組織で使う場合、認証方式やIdPとの接続、グループやユーザに対するアクセス権限設定、ネットワークとセキュリティの構成、利用可能なSageMakerのアプリケーションなどを容易に設定できる
- 中国とGovCloud(US)を除くAmazon SageMakerが利用可能な全てのリージョンで一般利用開始



Amazon SageMaker



Amazon SageMakerのユーザ体験に3つのアップデート

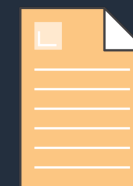
- Amazon SageMaker Distributionが2つのIDEに対応
 - Amazon SageMaker StudioのWeb-basedインタフェースが利用可能になりCode EditorとJupyterLabから選択可能に
 - これらのIDEからSageMaker Distributionが利用できるようになった
- SageMaker Studioで最新のJupyterLab 4が利用可能に
 - Web-basedでないSageMaker StudioのUIで、最新のJupyterLab 4が利用可能に。起動が高速で、CodeWhispererによるコーディング支援も利用できる
- Code EditorとJupyterLabで任意のEFSボリュームを利用可能に
 - Amazon SageMaker Code EditorとJupyterLabで、既存のEFSボリュームを利用可能に。チーム共有のデータセット等を、コピーすることなく利用できる

Amazon Transcribeが基盤モデルにより100以上の言語に対応

- 音声の書き起こし(Speech-to-Text)のフルマネージドサービスであるAmazon Transcribeが100以上の言語に対応
 - 数十億パラメータの音声基盤モデルを利用
 - 認識精度の向上も期待できる
- Amazon Transcribeのバッチモードにおいて、設定変更なしに利用できる
- 東京リージョンをはじめ主要なリージョンにて



Amazon Transcribe



Amazon Transcribe Call Analyticsの生成AIによる要約機能

- Amazon Transcribe Call Analyticsで、Amazon Bedrockによる生成AIを組み込んだ通話要約機能が利用可能に
 - 顧客が電話をした理由、問題への対処、要アクションな項目などを抽出し、コンタクトセンターでのやりとりの概要を提示する
 - オペレータが通話ログを手動で作成する時間を省くとともに、管理者が問題に対処する際に現状把握にかかる時間短縮が期待できる
- 現時点では英語のみに対応。バージニアとオレゴンにてプレビューを開始



Amazon Transcribe

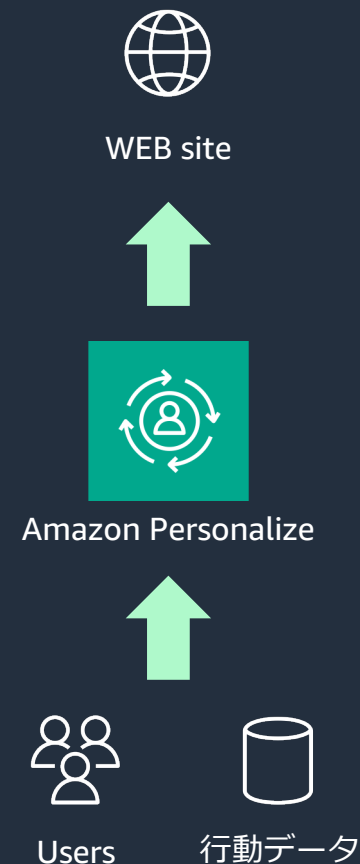


問題：10日たっても商品が届かない
対応：無償再発送と\$10クーポンの提供
フォローアップ：2日以内に連絡し再発送した商品が到着したか確認

※イメージです

Amazon PersonalizeのNext-Best-Actionレシピを発表

- 個々のユーザの好みや行動に基づいて、ユーザを引きつける可能性が高いアクションを提示するNext-Best-Actionレシピが利用可能に
 - 例えば会員プログラムへの登録や、ニュースレターの購読、アプリダウンロードなど、属性の違うアクションを推奨することができる
 - ユーザの好みに近いアクションを提案することで、エンゲージメントの強化が期待できる
- ユーザ群の過去の行動データを元に予測を行うため、ワークロードに適した予測が期待できる



Amazon PersonalizeのContent Generatorを発表


- レコメンデーションを生成する際に、大規模言語モデルによるキャッチコピーを生成するContent Generator機能を発表
 - 例えば、朝食向けの食品をレコメンドする際に、“Rise and Shine”といったコピーを生成する
 - 「この商品を買った人は、これも買っている」といった固定文言ではなく、個々に最適化したコピーを生成することがポイント

Create batch inference job

Batch inference job type [Info](#)
Choose from two distinct types of batch inference jobs tailored to your specific needs. To learn more about the different pricing structures and service limits about the two types, see [Batch inference job type FAQs](#)


<input type="radio"/> Item recommendations Choose this type for only item recommendation results based on different solution versions. <i>Supported use cases - user personalization, popular items, related items, personalized ranking, etc.</i>	<input checked="" type="radio"/> Themed recommendations with Content Generator - new Choose this type to get item recommendations with themes created by Generative AI. <i>Supported use case - related items</i>
---	--

More like Something from Tiffany's



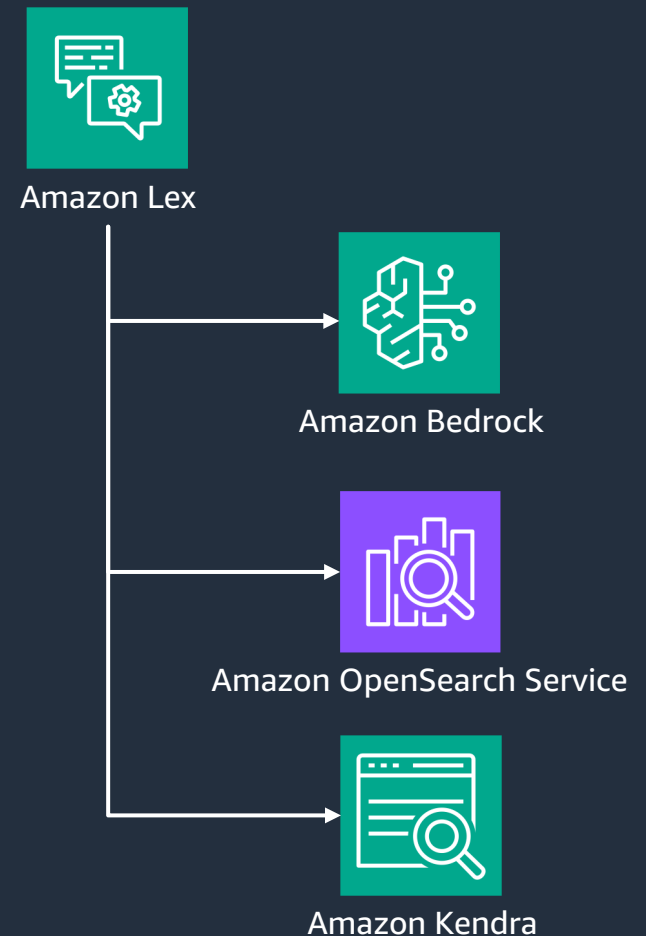
↓

Love, laughter, and hijinks



Amazon Lexの対話型Q&A対応機能を発表

- Amazon LexでQnAIntentのプレビューを開始
 - 組織内のデータと基盤モデルを安全に連携、拡張検索生成(RAG)による精度の高い応答を行うことができる
 - Amazon Bedrock、Amazon OpenSearch、Amazon Kendraとの連携に対応
- 旧来のChatbotは開発者が想定される質問を幅広く用意する必要があったが、汎用的に応答可能になることが期待できる
- プレビューは英語に対応。バージニアとオレゴンにて



Amazon Lexで生成AIを活用した3つのアップデート

- Amazon Lexを生成AIで機能強化（現時点では英語に対応）
 - Assisted slot resolution with Generative AI: 発話の中のスロット値をより正確に解決可能に。例えばレストラン予約で「友人と、その子供が2人。あと自分自身」と言われた場合に、席数は4になる。基盤モデルを利用して、4席必要という結論を出すことが可能に
 - Descriptive Bot Builder: Amazon Bedrockの基盤モデルを利用して数分でボットを作成。ボットが目的とするタスクとクエリを自然言語で記述すると、Lexがサンプルを構成する
 - Utterance generation: Amazon Lexに入力する学習用の発話サンプルの生成にAmazon Bedrockの基盤モデルを活用。生成された発話を実際に利用する前に編集・削除も可能

Amazon CodeWhispererのアップデート

- Amazon CodeWhispererの機能強化を発表
 - Infrastructure as Code(IaC)サポート強化: AWS CloudFormation(YAML, JSON)、AWS CDK(TypeScript, Python)、Terraform(HCL)のコード提案に対応
 - セキュリティスキャンの言語サポート強化: Java, Python, JavaScript, TypeScript, C#に対応。上記IaC対応の言語群でも利用可能に。脆弱性修正のためのコード提案はJava, Python, JavaScriptに対応
 - Visual Studioサポート(プレビュー): Visual Studio 2022に対応。C#のコードに対してリアルタイムのコード提案を受け取ることができる

AWS AI Service Cardが対応サービスを追加

- AWS AI Service Cardは責任あるAIの実現に向けて想定ユースケースや制約、ベストプラクティスなどを詳細に記載したドキュメント
- 以下に関するカードが追加された
 - Amazon Titan Text
 - Amazon Comprehend Detect PII
 - Amazon Transcribe Toxicity Detection
 - Amazon Rekognition Face Liveness
 - AWS HealthScribe.

Overview

Intended use cases and limitations

Design of Amazon Titan Text

Deployment and performance optimization best practices

Further information

Glossary



AWS HealthScribeが一般利用開始に

- 医師と患者の会話から、要点のメモを生成できる機能を提供するHIPAA適合サービス、AWS HealthScribeが一般利用開始に
 - 生成AIの技術を応用したサービスで、ヘルスケアアプリケーションの開発者が簡単に音声書き下しと要点の抽出機能を組み込むことを可能にする
 - 高度なAI機能を維持するために、機械学習インフラの維持管理や、ヘルスケア分野に向けた大規模言語モデルのトレーニングなしに、すぐ利用できる
- バージニアリージョンで一般利用開始



Compute & Container Storage Networking



Compute & Container, Storage, Networking

1. Amazon EC2のハイメモリインスタンスU7iを発表
2. NVIDIAのGPUを搭載した3つのインスタンスをアナウンス
3. Amazon Qのインスタンス選定支援機能を発表
4. ENA Expressが58のインスタンスタイプに対応
5. Amazon BraketでBraket Directプログラムを発表
6. Application Load BalancerがATWによる流量制御に対応
7. Application Load BalancerがmTLS認証をサポート
8. Amazon EKS Pod Identityを発表
9. Amazon S3からのトレーニングデータ転送が高速化
10. 新しいアクセス制御方式Amazon S3 Access Grantsを発表
11. Mountpoint for Amazon S3がS3 Express One Zoneに対応
12. Mountpoint for Amazon S3 CSI driverが一般利用開始に
13. Amazon EFSのアーカイブクラスを発表
14. Amazon EFSでファイルシステム単位でのIOPS性能上限が向
15. Amazon EFS Replicationがフェイルバックをサポート
16. Amazon FSx for ONTAPがスケールアウトに対応
17. Amazon FSx for ONTAPで2つの機能強化
18. Amazon FSx for OpenZFSがOn-demand replicationに対応
19. AWS Backupの2つのアップデート
20. AWS Elastic Disaster Recoveryのアップデート
21. Route 53 ARCの自動ゾーンシフト機能を発表



Amazon EC2のハイメモリインスタンスU7iを発表

- 次世代のハイメモリインスタンス、Amazon EC2 U7iインスタンスを発表。最大32TiBのDDR5メモリを搭載、SAP HANAやOracle、SQL Serverなどインメモリデータベースに最適
- 第4世代のIntel Xeon Scalable Processor(Sapphire Rapids)を搭載し、現行のU-1インスタンスと比較し最大125%高い処理性能を発揮する

Instance Name	vCPUs	Memory (DDR5)	EBS Bandwidth	Network Bandwidth
u7in-16tb.224xlarge	896	16,384 GiB	100 Gbps	100 Gbps
u7in-24tb.224xlarge	896	24,576 GiB	100 Gbps	100 Gbps
u7in-32tb.224xlarge	896	32,768 GiB	100 Gbps	100 Gbps

NVIDIAのGPUを搭載した3つのインスタンスをアナウンス

- NVIDIAの最新GPUを搭載した3種類のEC2インスタンスの登場をアナウンス。2024年に登場予定、乞うご期待
 - Amazon EC2 P5e instance
NVIDIA H200 GPUを搭載。141GBのHBM3e GPUメモリを搭載し、H100と比較して1.7倍大容量で1.4倍高速。AWS Nitro Systemによる3,200GbpsのEFAネットワークで最新モデルの開発・学習に適する
 - Amazon EC2 G6e instance
NVIDIA L40S GPUを搭載。公開されているLLMや小規模言語モデルの学習・推論に。NVIDIA Omniverseを用いるデジタルツインアプリケーションにも
 - Amazon EC2 G6 instance
NVIDIA L4 GPUを搭載。自然言語処理や翻訳、動画解析、音声認識、グラフィクス処理などに最適な低コストでエネルギー効率の高い選択肢

Amazon QによるEC2インスタンス選定支援機能を発表

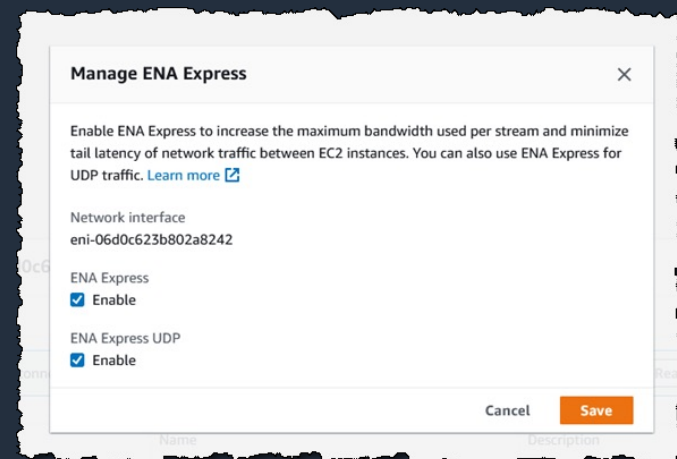
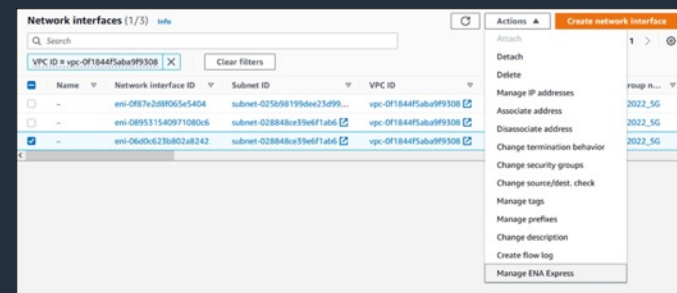
- 750以上のEC2インスタンスタイプから最適な選択を行うための支援を提供
- Amazon QがAWSドキュメントと管理コンソール内の情報を元にパーソナライズされた推奨情報を提示する
- 自然言語で追加質問を行うことで更に詳細なガイドを得ることもできる
- EC2管理コンソールからプレビュー利用可能

The screenshot shows a dialog box titled "Get advice on instance type selection from Amazon Q". It contains the following text and controls:

- Close button (X) in the top right corner.
- Text: "Tell us more about your requirements to generate instance type suggestions"
- Text: "We will use Amazon Q, a generative AI assistant, to generate instance type suggestions"
- Form fields:
 - Use Case: Web Hosting (dropdown menu)
 - Workload type: Web/App Server (dropdown menu)
 - Priority: Low cost (dropdown menu)
 - CPU Manufacturers: No preference (dropdown menu)
- Buttons: "Cancel" and "Get instance type advice" (highlighted in orange).

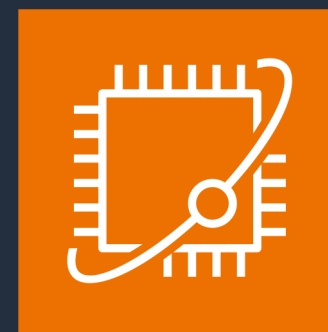
ENA Expressが58のEC2インスタンスタイプで利用可能に

- AWSのSRDプロトコルを使用してネットワークパフォーマンスを向上させるENA Expressが新たに58種類のインスタンスタイプで利用可能に
 - 新しい世代のインスタンスタイプで、16vCPUから192vCPUの範囲のものが対象
- ENA ExpressはSRDを利用するが、OSやアプリケーションから意識する必要はない。普通にTCPやUDPで通信すれば、裏側でSRDが適用される
- 全リージョンで、追加費用なしで利用可能



Amazon BraketでBraket Directプログラムを発表

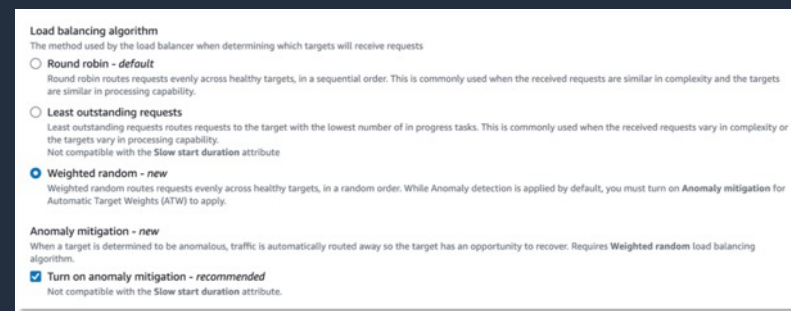
- AWSで量子コンピューティングについての研究とイノベーションを加速するプログラム、Braket Directを発表
 - 様々な量子デバイスの容量を確保。量子コンピューティングの専門家と直接連携する機会を得られる
 - IonQの新しいイオントラップ型デバイスであるForte等、新世代のデバイスへのアクセスもリクエストできる
- Braket Directはキャパシティを確保するため、利用可否の予測可能性向上にもつながる
- Braketが利用可能な全てのリージョンにて



Amazon Braket

Application Load BalancerがATWによる流量制御に対応

- Automatic Target Weight(ATW)の異常検知と緩和機能によりターゲットに送信されるトラフィック量を最適化
 - HTTPステータスコードやTLSエラー率に基づいて異常なターゲットを検出し、ターゲットに送信するトラフィック量を徐々に減少させる
 - 回復検知時は徐々に増加させる
- アプリに障害があってもヘルスチェックが成功し続けるようなグレー障害に対応
- 追加費用なし。全てのAWSリージョンにて



Target group: alb-tg1

Details | **Targets** | Monitoring | Health checks | Attributes | Tags

Registered targets (12) [Info](#) Anomaly mitigation: On De-register Register targets

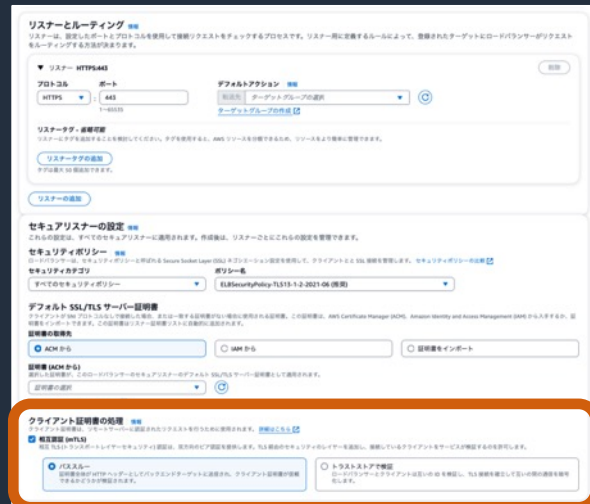
Target groups route requests to individual registered targets using the protocol and port number specified. Health checks are performed on all registered targets according to the target group's health check settings. Anomaly detection is automatically applied to HTTP/HTTPS target groups with at least 3 healthy targets.

Filter targets

<input type="checkbox"/>	Instance ID	Port	Zone	Health status	Anomaly detect...	Mitigation in effect
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Anomalous	Yes
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Anomalous	Yes
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Anomalous	Yes
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Anomalous	Yes
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No
<input type="checkbox"/>	i-01234567890123456	80	us-east-1b	Healthy	Normal	No

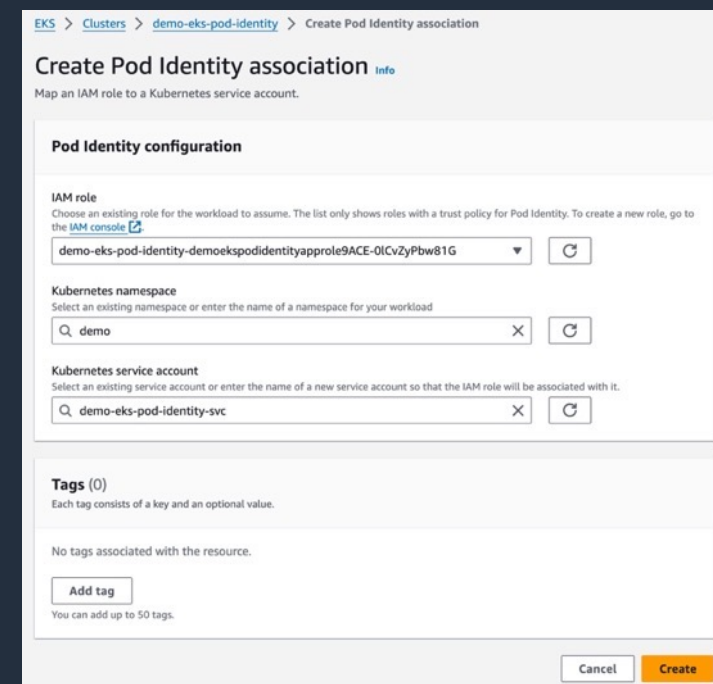
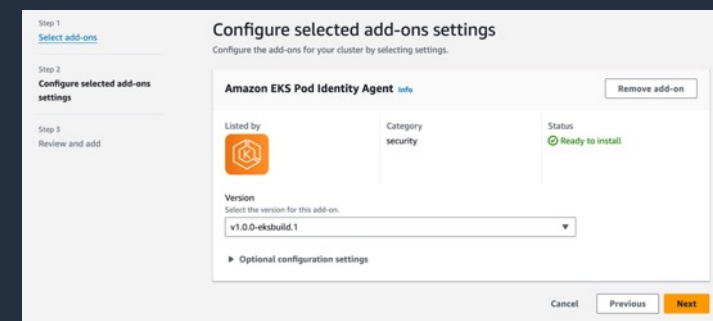
Application Load BalancerがmTLS認証をサポート

- ALBがX.509証明書を利用したmTLS(相互TLS)認証をサポートし、暗号化通信路の確立とともにクライアント認証を実行可能に
- 2つの動作モードを提供
 - Passthrough mode: クライアント証明書チェーンをターゲットに転送し、認証・認可をそちらに任せる
 - Verify mode: ALBでX.509クライアント証明書の認証を実行する
- 全てのAWS商用リージョンとAWS GovCloud(US)でご利用可能に



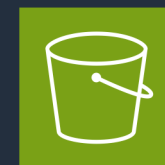
Amazon EKS Pod Identityを発表

- IAMロールをKubernetesサービスアカウントに紐付けることがより容易になった
 - EKSクラスターにEKS Pod Identity Agent add-onをインストールすることで設定可能に
 - アプリケーションに対する権限付与をEKSコンソールおよびAPIから実行できる
 - Role session tagのサポートにより複数クラスターでポリシーを再利用でき運用負荷を削減
- GovCloudと中国を除き、Amazon EKSをサポートする全てのリージョンで利用可能



Amazon S3からのトレーニングデータ転送が高速化

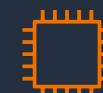
- Amazon S3からAmazon EC2 Trn1, P4d, P5インスタンスに対するデータ転送を高速化
 - 機械学習のトレーニングジョブ実行に必要なデータのダウンロードが最大3倍高速に。モデルのチェックポイントデータのアップロードは最大5倍高速に
- 最新版のAWS CLI, Python SDKで自動的に有効に
 - AWS Common Runtime(CRT)によるリクエストの並列化、自動再試行、DNSロードバランシングなどのベストプラクティスが活用される
 - AWS CLI, Python SDKを利用するアプリケーションであれば、CRTのメリットが有効になる



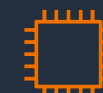
Amazon Simple Storage Service (Amazon S3)



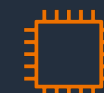
Bucket with objects



Trn1 Instance



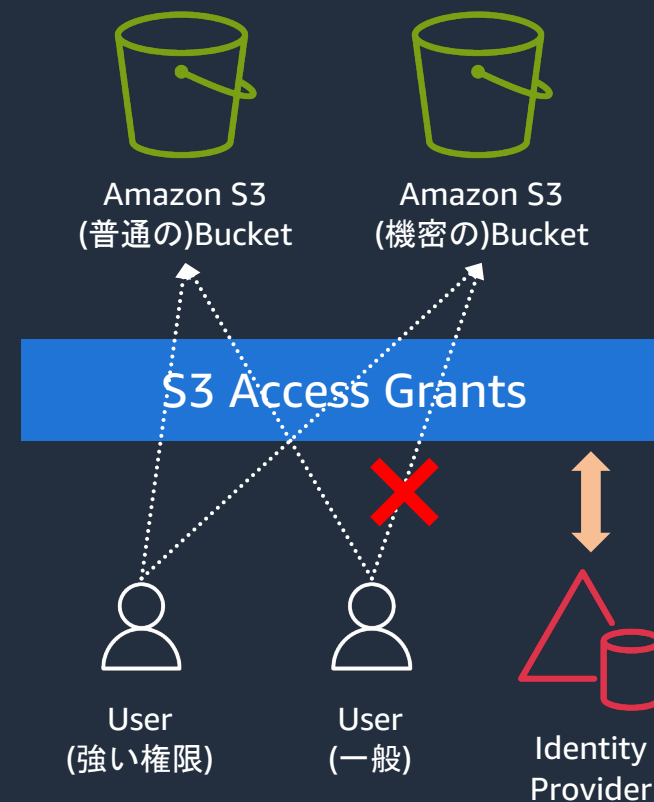
P4d Instance



P5 Instance

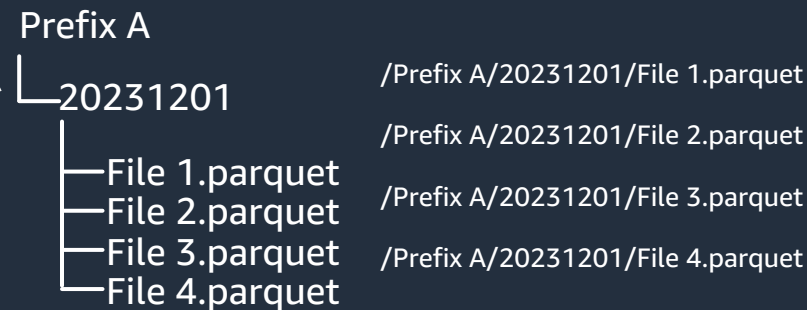
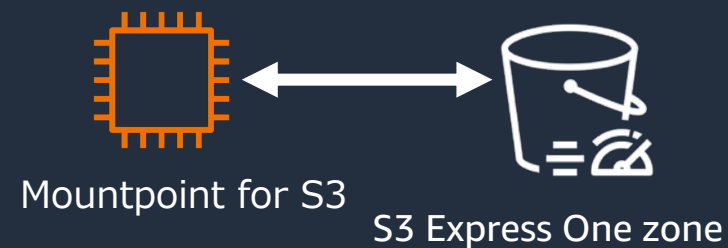
新しいアクセス制御方式Amazon S3 Access Grantsを発表

- 企業内ディレクトリ等のIdentity Provider(IdP)と連携し、S3へのアクセス権を付与できるようにするAmazon S3 Access Grantsを発表
 - Active DirectoryやAWS IAMのIDに基づいて、ユーザーに対してS3へのアクセス権を付与できるようになる
 - 多数のユーザーがデータに触る場合の権限管理が容易になる
- S3へのデータアクセスについて、ユーザーIDとアプリケーションが記録されるため監査にも対応
- AWS IAM Identity Centerが利用可能な全てのリージョンにて利用できる



Mountpoint for Amazon S3がS3 Express One Zoneに対応

- AWS Common Runtime(CRT)ベースで実装されている Mountpoint for Amazon S3 が S3 Express One Zone にも対応
- S3 Express One Zone を利用したいが最新の SDK 対応が難しいアプリケーションについて、S3 バケットにあるデータを「ローカルにあるファイル」として利用できる
- 東京リージョンを含む S3 Express One Zone が対応するリージョンで利用可能



Mountpoint for Amazon S3 CSI driverが一般利用開始に

- Kubernetesベースのアプリケーションが、ファイルシステムのインタフェースを介してAmazon S3のオブジェクトにアクセスできる
 - Container Storage Interface(CSI)ドライバが、Amazon EKSまたは自己管理型のKubernetesで、Amazon S3をコンテナからアクセス可能なボリュームとして見せる
- シーケンシャル・ランダムな読み込みと、シーケンシャルな新規ファイル作成をサポート
 - サポートされるファイルシステム操作については、[ドキュメント](#)を参照。S3はあくまでもオブジェクトストレージであることに注意

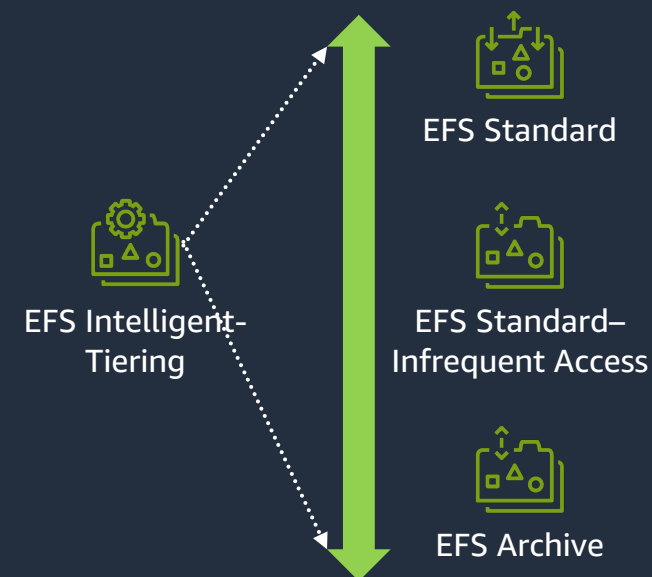


Amazon EFSの「アーカイブ」ストレージクラスを発表

- 長期間の保存が必要だが、ほとんどアクセスすることがないデータを安価かつ安全に保存できる「アーカイブ」ストレージクラスを発表
 - 低頻度アクセスのストレージ費用が36%値下げ
 - アーカイブは低頻度アクセスからさらに50%安価
- Intelligent Tieringをサポート。同一ファイルシステムの中でアクセス頻度に応じた最適化を自動的に実行できる
- スループットモードとしてElasticが設定できる全てのリージョンに対応



Amazon Elastic File System
(Amazon EFS)



Amazon EFSでファイルシステム単位でのIOPS性能上限が向上

- Amazon EFSでファイルシステム単位の読み取り・書き込みIOPS上限の向上を発表
 - 読み取り：最大 250,000 IOPS (従来の4.5倍)
 - 書き込み：最大 50,000 IOPS (従来の2倍)
- 機械学習ワークロードや、データサイエンス、SaaSアプリケーション、メディア処理など高い性能が求められるケースにも対応可能に
- スループットモードとしてElasticが設定できる全てのリージョンに対応



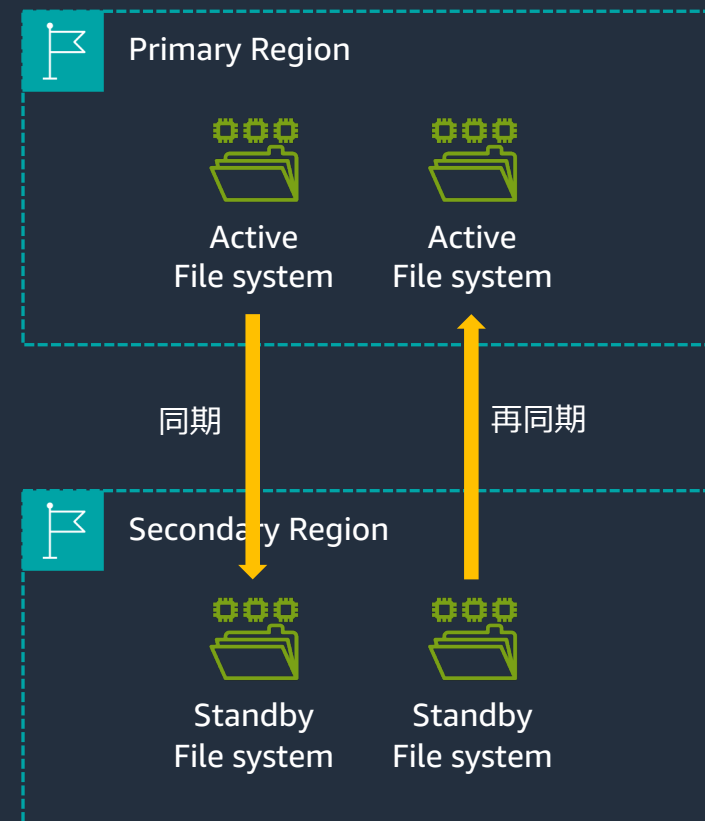
Amazon Elastic File System
(Amazon EFS)



Amazon Elastic File System
(Amazon EFS)

Amazon EFS Replicationがフェイルバックをサポート

- Amazon EFS Replicationでフェイルバックがサポートされ、後の対応が容易に
 - 災害発生時など、フェイルオーバーが発生するとあらかじめ指定されたセカンダリのリージョンで業務を継続することとなる
 - 今回のリリースで、レプリケーション再構築時の増分更新が可能に
 - セカンダリからプライマリに戻すときは、向き先を変えることでフルコピーなしに再同期が行われる
 - 全てのAWS商用リージョンとGovCloudにて



Amazon FSx for NetApp ONTAPがスケールアウト構成に対応

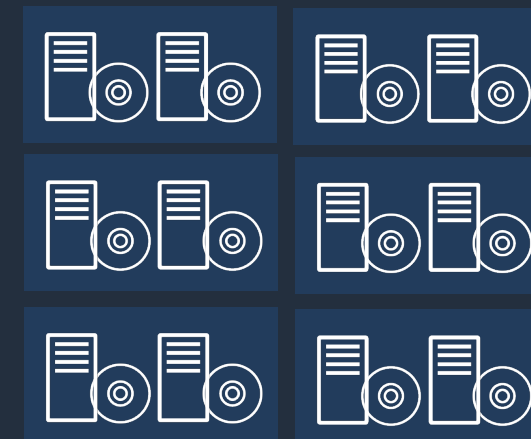
- FSx for NetApp ONTAPがスケールアウト構成をサポートし、より高い性能要求に対応可能に
 - 36GB/sのスループット、1.2M IOPS
 - 最大6つの高可用性ペア(ファイルサーバ)に分散することで高性能を実現。単一ペアは6GB/s、200K IOPSを提供する
- バージニア、オレゴン、オハイオ、アイルランド、シドニーのリージョンにて利用可能に



Amazon FSx for NetApp ONTAP



File system



Amazon FSx for NetApp ONTAPで2つの機能強化

- Multi-AZ構成のFSx for NetApp ONTAPがShared VPCに対応
 - 共有されたVPCに対して、Multi-AZのファイルシステムを作成可能に。高い可用性が必要な要件に対応しやすくなった
- Amazon FSxのバックアップ機能がFlexGroupボリュームに対応
 - 従来から対応していたFlexVolに加え、FlexGroupボリュームについてもAmazon FSxでバックアップできるようになった
 - 同時にFlexGroupの作成や管理もManagement ConsoleやAWS SDK等から実行可能に

Amazon FSx for OpenZFSがOn-demand replicationに対応

- Amazon FSx for OpenZFSでsnapshotをレプリケーションする、send/recv機能が利用可能に
- 複数のFSx for OpenZFSファイルシステムの間でデータ複製を行う必要があるときに効果的
 - 開発や実験、分析、検証などの目的で、実稼働データをテスト環境に移植して作業したい場合に便利
 - 定期的に複製したい場合は、その仕組みを用意する必要がある。サンプルはドキュメントを参照
- FSx for OpenZFSが利用可能な全てのリージョンにて

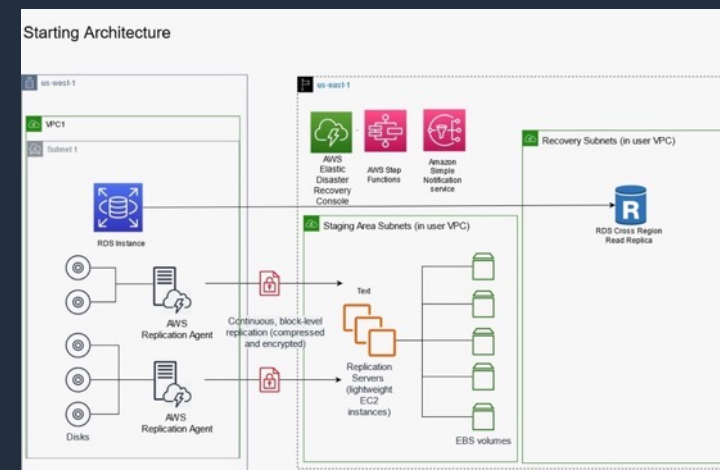


AWS Backupの2つのアップデート

- リストアテスト機能
 - AWS Backupで実行したバックアップが、きちんと復元できることを確認するリストアテスト機能が一般利用開始に
 - あらかじめ作成したリストアテスト計画に沿って実行される。その結果をEventBridge(CloudWatch Events)を介して自動的に検証し、所要時間や正常性の確認を定期的に行うことが可能
- EBS Snapshot Archiveのサポート
 - AWS BackupがEBS Snapshot Archiveに対応
 - アクセスする可能性が低く、高速に復元する必要もないタイプのバックアップを最大75%安価なコストで保持できる

AWS Elastic Disaster Recoveryのアップデート

- AWS Elastic Disaster RecoveryはAWS上のアプリケーションのレジリエンスを向上するサービス
 - ポイントインタイムリカバリーの機能と、最小限のコンピュート・ストレージリソースを利用し、迅速に復旧。ダウンタイムとデータロスを最小化する
 - アプリケーションの回復先として異なるリージョンを選択することが可能
- 回復先としてGovCloudを指定可能になった
- 回復や検証時、EC2インスタンスを事前定義に基づいて自動検証することが可能になった



Amazon Route 53 ARCの自動ゾーンシフト機能を発表

- Amazon Route 53 ARC(Application Recovery Controller)が自動ゾーンシフト機能を発表
- AWSがAZに影響を与えうる問題を特定したとき、アプリケーションのトラフィックを当該AZから安全かつ自動的にシフトする機能
 - ALB/NLBのクロスゾーンロードバランシング機能を無効にした上で、自動ゾーンシフト機能を有効に設定
 - 事前テスト機能を提供。ゾーンシフト時にアプリケーションが正常に稼働するか事前検証を推奨
- 中国とGovCloud(US)を除いたリージョンにて



Amazon Route 53

Availability Zone

Availability Zone

Database Analytics



Database, Analytics

1. Amazon RDS for Db2の一般利用開始を発表
2. Amazon RedshiftがMulti-data warehouse writeに対応
3. Amazon RedshiftのCTASクエリサポートを強化
4. Redshift Serverlessの管理機能が強化
5. Redshiftのセキュリティ機能の強化
6. Amazon Redshiftで3つのアップデート(プレビュー)
7. RedshiftがApache Icebergをサポート
8. Amazon Redshift MLで大規模言語モデル(LLM)を活用可能に
9. Amazon Athena が S3 Express One Zone に対応
11. Amazon EMR が S3 Express One Zone に対応
12. OpenSearch Serviceに新しいインスタンスファミリーが追加
13. Amazon MSKがM7gインスタンスをサポート
14. AWS Glue Data Qualityが機械学習ベースの異常検知に対応
15. Glue Data CatalogがマルチエンジンSQLビューをサポート
16. AWS Clean Rooms Differential Privacyを発表

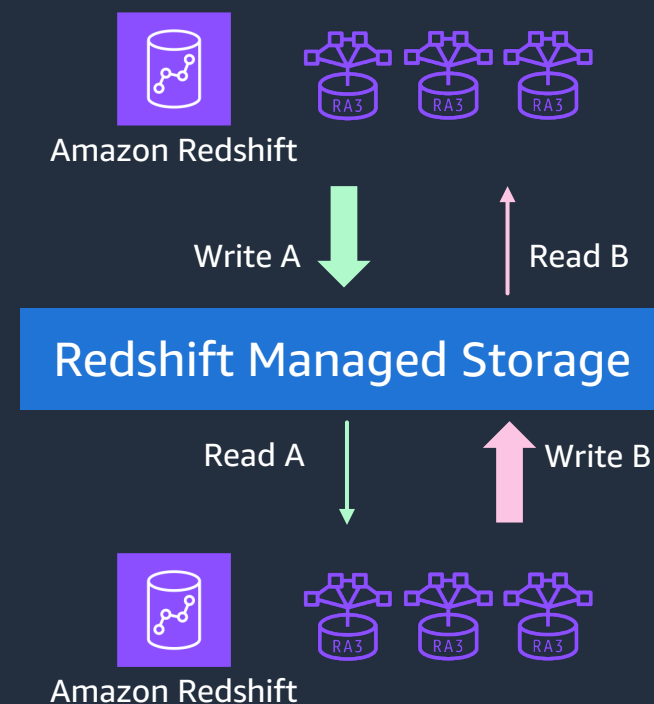
Amazon RDS for Db2の一般利用開始を発表

- Amazon RDS for Db2を発表。Db2のデータベースを数分でデプロイし、運用・拡張も容易に
 - Db2 Standard EditionとDb2 Advanced Editionに対応
 - バージョンはDb2 11.5がサポートされる
 - Multi-AZデプロイメントも利用できる
 - 最大128vCPU,4TiB RAM まで拡張可能
- Db2のライセンスは持ち込み(BYOL)が必須。IBM Customer IDとSite numberを提供する必要あり
- 中国とGovCloud以外の全てのリージョンにて

The screenshot shows the 'Create database' page in the AWS RDS console. It is titled 'RDS > Create database' and 'Create database'. Under 'Choose a database creation method', there are two options: 'Standard create' (selected) and 'Easy create'. The 'Engine options' section shows three engine types: 'PostgreSQL', 'Oracle', and 'IBM Db2' (selected). The 'Edition' section shows 'IBM Db2 Standard' (selected) and 'IBM Db2 Advanced'. The 'Engine Version' dropdown is set to '11.5.9.0.sb00000000.r1'. The 'Templates' section shows 'Production' (selected) and 'Dev/Test'.

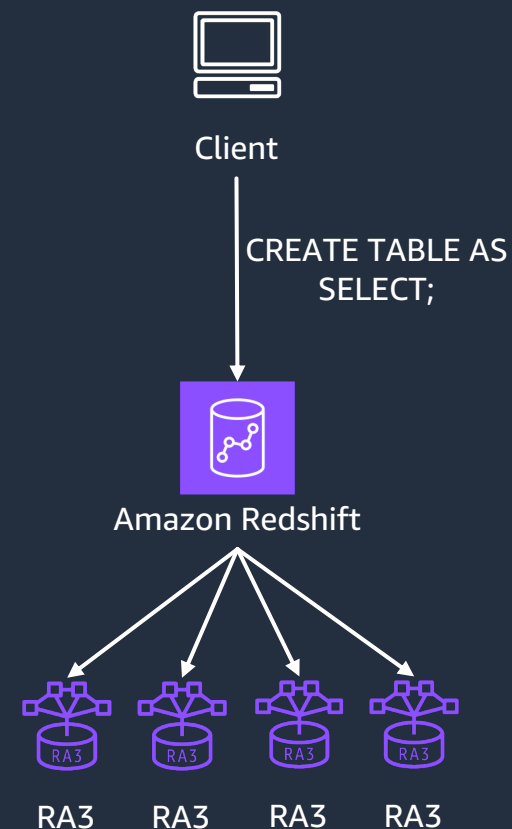
Amazon RedshiftがMulti-data warehouse writeに対応

- Amazon Redshiftのデータ共有機能を介して共有されるデータに対して、それを利用する全てのクラスタから書き込み・共有できる機能を発表
 - COMMITを発行し完了すれば、全てのクラスタからそのデータを利用できる
- コンピューティングリソースとストレージの分離度を高め、チーム毎に異なる性能要件やコスト要件に柔軟に対応できる
- テストや評価を目的としたプレビューとして提供。本番環境では利用しないよう注意



Amazon RedshiftのCTASクエリサポートを強化

- Amazon RedshiftにおけるCTAS(CREATE TABLE AS SELECT)クエリへの対応が強化され、以下の場合にCTAS処理のスケーリングが可能に
 - プロビジョニングされたクラスターで、同時実行スケーリングを有効にしている場合
 - Redshift ServerlessでAuto Scalingが可能なように設定されている場合
- RA3インスタンスと同時実行スケーリングをサポートする全てのリージョンで一般利用開始



Redshift Serverlessの管理機能が強化

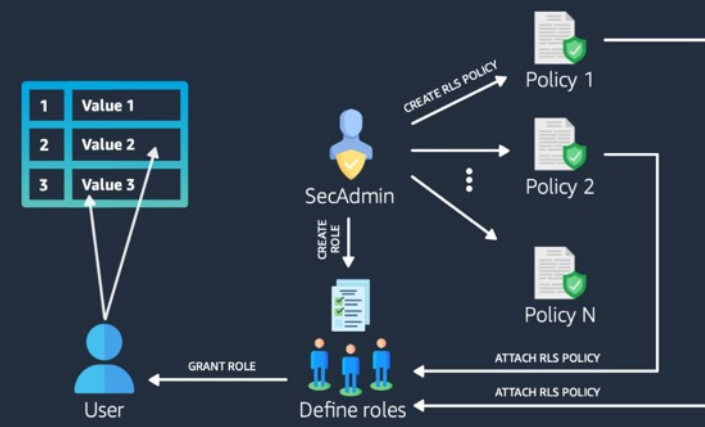
- 柔軟性の向上につながる機能強化
 - AWSアカウントおよびVPCを跨いだアクセスの設定
 - カスタムドメイン名の設定
 - スナップショット取得スケジュールと保持期間の設定
 - バックアップのクロスリージョンコピー(CRC)の設定
 - Redshift Processing Unit(RPU)の消費状況の可視化
 - Redshift Serverless Versionの可視化
- Redshift Serverlessを利用可能なすべてのリージョンで一般提供開始



Amazon Redshift

Redshiftのセキュリティ機能の強化

- Row-level Security(RLS)機能の強化
 - 標準ビューとlate bindingビューをサポートし、ローカルデータと共有されたリモートデータの双方に対応
 - CONJUNCTION TYPEを用いることでテーブル単位で複数のRLSポリシーを統合して適用可能
- メタデータセキュリティに対応
 - ユーザーのroleやpermissionでメタデータへのアクセスを制御可能に
 - マルチテナントアプリケーションにおいて有用
- Redshiftをサポートする全部リージョンで提供

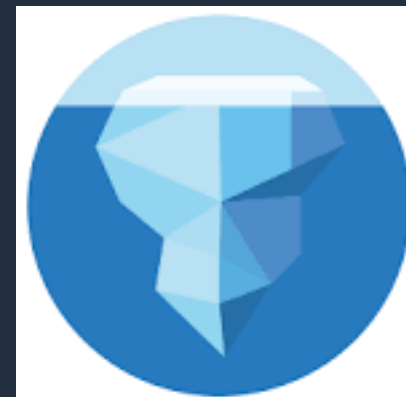


Amazon Redshiftで3つのアップデート(プレビュー)

- Multidimensional Data Layoutを発表
 - 反復的なクエリ性能の向上が期待できるMultidimensional Data Layoutを発表。受信クエリフィルターに基づいてデータをソートすることで性能向上を実現
- データレイクテーブル上のマテリアライズドビューの増分更新機能
 - Apache IcebergとAWS Glue table上に作成したマテリアライズドビューについて、増分リフレッシュをサポート
- ネストされたオブジェクトに対する詳細なアクセス制御に対応
 - Amazon Redshiftのデータレイク分析機能において、ネストされたオブジェクトに対してLake Formationのきめ細かいアクセス制御を適用することによってクエリを実行可能に

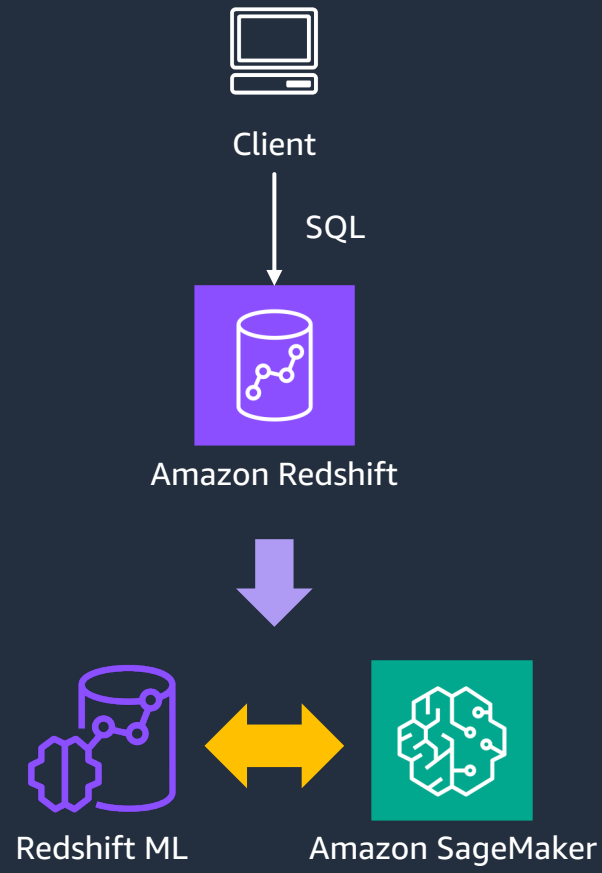
RedshiftがApache Icebergをサポート

- データレイク上のIcebergテーブルにRedshiftからアクセスし、データを結合して分析できるようになった
 - Apache Hudi, Delta Lakeに続くオープンテーブルフォーマットサポートの追加
 - ParquetデータおよびIcebergテーブルのZstandard圧縮もサポート。高い圧縮効率とパフォーマンスを実現
- 中国を除くRedshiftをサポートするすべてのリージョンで一般提供開始



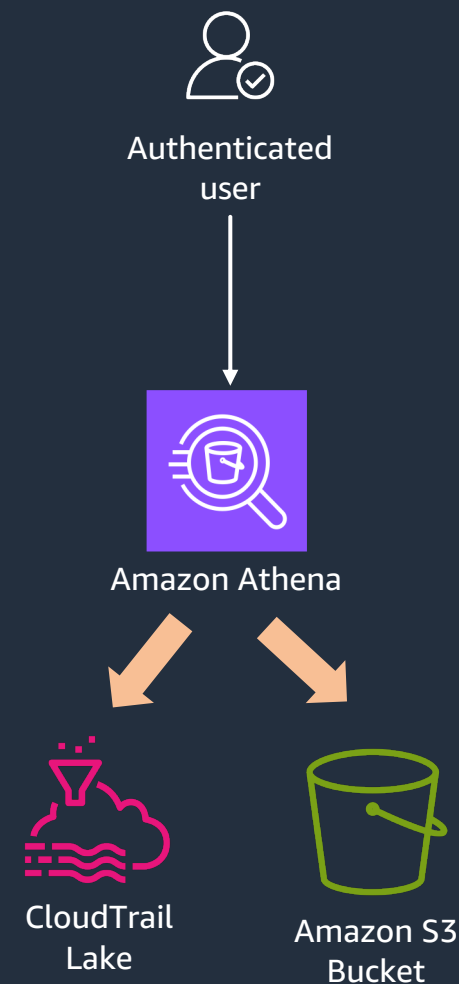
Amazon Redshift MLで大規模言語モデル(LLM)を活用可能に

- Amazon Redshift MLで大規模言語モデル(LLM)がサポートされ、より高度な処理を実現可能に
 - Redshiftで抽出したフィードバックに対する要約・分類といった処理をSQLで実行できる
- Redshift MLから利用するLLMのエンドポイントを、SageMakerで作成しておく必要がある
 - SageMaker JumpStartで利用できる事前定義済みのものを利用したり、カスタムモデルをデプロイして利用することもできる
- 東京ほか5リージョンでプレビューを開始



Amazon AthenaがCloudTrail LakeのZero-ETL分析に対応

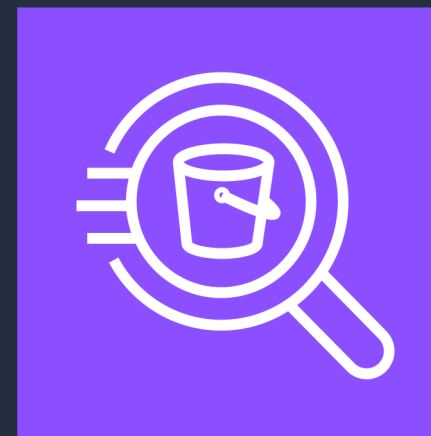
- Amazon Athenaを利用して、AWS CloudTrail LakeのデータをZero-ETLで分析可能に
- データの移動や、データ処理パイプラインの構築と行ったETL処理の複雑さに直面することなく、CloudTrail Lakeのログを分析できる
 - AWS APIのログとS3に保存されたアプリケーションログを関連付けて分析する、といった調査が容易に
- AWS CloudTrail Lakeが利用可能な全てのリージョンで利用可能。Athenaの費用が発生する



Amazon Athena が S3 Express One Zone に対応

- Amazon Athena において、Athena version 3 を利用して、Amazon S3 Express One Zone ストレージクラスを活用可能
 - CREATE TABLE または AWS Glue カタログで指定
- S3 Express One Zone 上のデータをクエリする Athena SQL が S3 Standard クラスを利用した場合と比べて、最大 2.1 倍性能向上
- 東京リージョンを含む S3 Express One Zone が対応するリージョンで利用可能

Amazon Athena (SQL)



Up to **2.1x** performance
Improvement

Amazon EMR が S3 Express One Zone に対応

- Amazon EMR release 6.15.0 以降において Apache Spark と S3A connector を利用して Amazon S3 Express One Zone を活用可能
 - EC2 Cluster の Amazon EMR の対応で、Amazon EMR Serverless, Amazon EMR on EKS では利用できない
- S3 Express One Zone を利用したある Apache Spark アプリケーションが S3 Standard クラスを利用した場合と比べて、最大4 倍性能向上
- 東京リージョンを含む S3 Express One Zone が対応するリージョンで利用可能

Amazon EMR on EC2 (Spark)



Up to **4.0x** performance
Improvement

OpenSearch Serviceに新しいインスタンスファミリーが追加

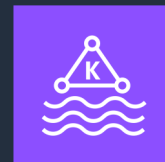
- OpenSearchに最適化されたインスタンスファミリーOR1を発表
 - マネージドサービス内部でストレージシステムのアーキテクチャを見直して実現
 - ベンチマーク結果では30%のコスト効率向上
 - インデクシング処理負荷が重いワークロード向き
- mediumから16xlargeまでのサイズを提供。GravitonベースのマスターノードおよびOpenSearchバージョン2.11以降をサポート
- 東京を含む12リージョンで一般提供開始

Instance type	Instances
OR1	or1.medium.search
	or1.large.search
	or1.xlarge.search
	or1.2xlarge.search
	or1.4xlarge.search
	or1.8xlarge.search
	or1.16xlarge.search



Amazon MSKがM7gインスタンスをサポート

- Amazon Managed Streaming for Apache Kafka(MSK)がM7gインスタンスをサポート。新規クラスタで利用できる
- M7gインスタンスはAWS Graviton 3プロセッサを搭載しており、同等サイズのM5と比較してコストパフォーマンスが向上し、Kafkaに適する
 - ストレージスループットが最大25%向上
 - ネットワークスループットが最大88%向上
- 東京リージョンほか10のリージョンにて

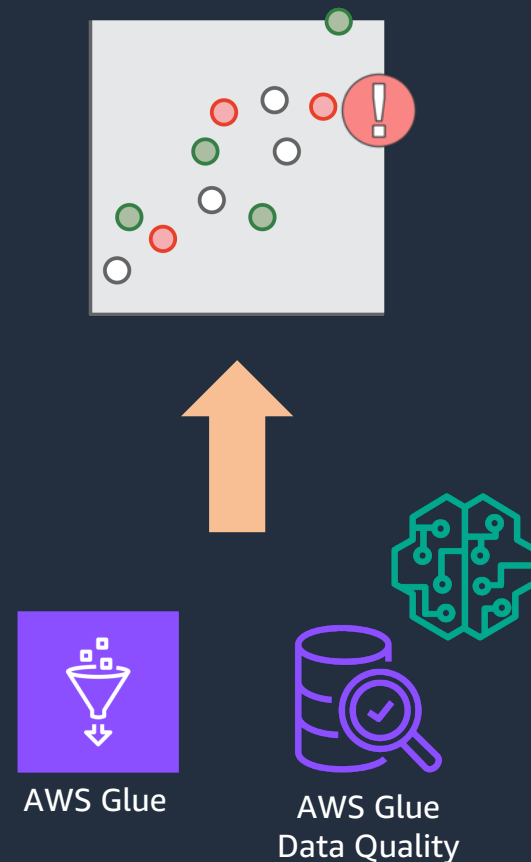


Amazon Managed Streaming
for Apache Kafka
(Amazon MSK)



AWS Glue Data Qualityが機械学習ベースの異常検知に対応

- AWS Glue Data Qualityで機械学習の技術を活用したアルゴリズムによるデータ品質の問題や異常を検知できるようになった
 - ルールベースのアプローチでは「何が正常か」「何が異常か」がわかっている場合は効果的だが、突然の欠損値の増加やレコード数の減少といった異常パターンには対処しづらい
 - 機械学習ベースのアプローチで有意なインサイトが得られることが期待できる
- 東京ほか4つのリージョンでプレビュー開始



Glue Data CatalogがマルチエンジンSQLビューをサポート

- AWS Glue Data Catalogが複数のAWSのアナリティクスサービスからアクセスできるSQLビューをサポート
 - 単一のビューでAmazon Athena, Amazon Redshift, Amazon EMR on EC2からのクエリをサポート
 - Lake Formation上で他のリソースと同様にアクセス権限の管理が可能
 - アクセス権限は元データに設定する必要はなくビューへの設定のみ
- 東京を含む5リージョンでプレビュー提供開始

Amazon CodeCatalyst irshad-generative-ai Projects Search code, issues, projects, and users

Create blueprint

Blueprint name
Name your blueprint.
Add a name for your new blueprint.
Default Lambda Handler
Blueprint names must be unique within a space. Names must be between 3 and 63 characters.

Blueprint details
These details will be visible to the space users once the blueprint is published. You can change these details in the code repository of the project at a later time.

Blueprint Display Name
What do you want to call your new blueprint?
Default Lambda Handler

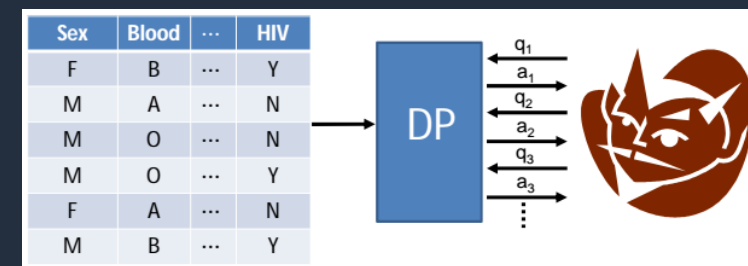
Description
Add a description for your new blueprint.
This creates a default lambda handler, a CDK stack, and a deployment.

Author name
Who is the author of the blueprint?
irshad-generative-ai

► Advanced settings

AWS Clean Rooms Differential Privacyを発表

- Differential Privacy(差分プライバシー)は個人データの統計を取得する際に乱数を加えることで正確な値を秘匿するデータ保護手法
- 差分プライバシーの実装経験がなくとも数クリックで適用可能
- 個人データの秘匿性を高めることで安心してマーケティングキャンペーンや医療情報の分析を実行できる
- 東京を含む11リージョンでプレビュー提供開始



図の出典 <https://privacytools.seas.harvard.edu/differential-privacy>



Security & Compliance



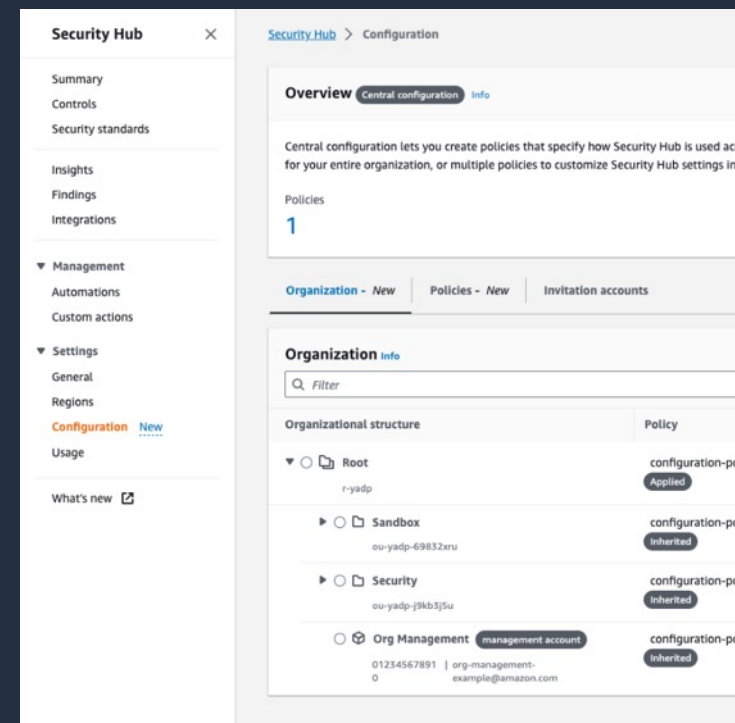
Security & Compliance

1. AWS Security Hubコントロールをカスタマイズ可能に
2. AWS Security Hubのアップデート
3. AWS Control TowerのランディングゾーンがAPIで管理可能に
4. Control Towerがデジタル統制(digital sovereignty)対応を強化
5. AWS IAM Identity Centerと分析サービスとの連携機能を発表
6. IAM Access Analyzerのアップデート
7. Amazon GuardDutyが脅威検知の対象範囲を拡大
8. Amazon Detectiveで3つのアップデート
9. InspectorがEC2のエージェントレス診断に対応
10. Amazon InspectorのLambda code scanning機能が強化
11. AWS Secrets Managerで値の一括取得が可能に
12. Amazon One Enterpriseを発表



AWS Security Hubのアップデート

- Findingに新たなメタデータを追加し、対応の優先度付けやコンテキストの理解を支援
 - AWSアカウント名やリソースタグに加えアプリケーションタグを付与可能
- ダッシュボードにフィルターを追加
 - AWSアカウント名やデータ送信元サービス、リージョンなどでフィルターした情報を可能に
- 委任管理者アカウントからの一括設定を可能に
 - マルチリージョンおよびマルチアカウントでの運用が容易に



AWS Control TowerのランディングゾーンがAPIで管理可能に

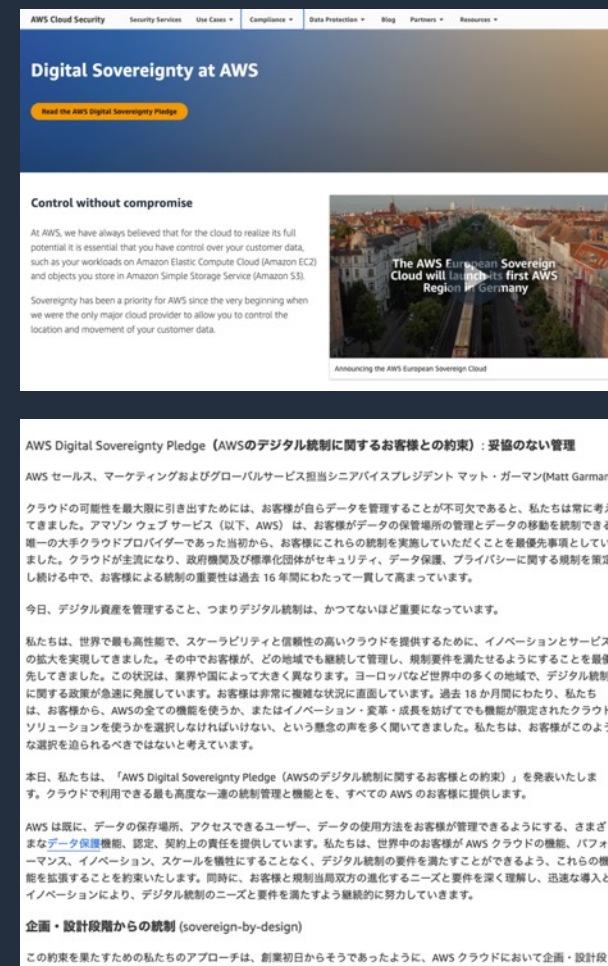
- AWS Control TowerのAPIが追加され、ランディングゾーン(Control Tower環境)の作成やバージョンアップ等を操作可能に
- マルチアカウント環境の管理者が行う、ランディングゾーンの立ち上げや、アップデートといった管理業務を自動化可能に
 - Management Consoleでの作業を不要にできるため、作業効率の向上とミスリスクを軽減
- Control Towerが利用可能なすべてのリージョンで一般利用開始



- `GetLandingZone/ListLandingZones` - discover your landing zone configuration options
- `CreateLandingZone/UpdateLandingZone/DeleteLandingZone` - manage your landing zone resources
- `ResetLandingZone` - repair landing zone drift
- `GetLandingZoneOperation` - monitor in-progress changes

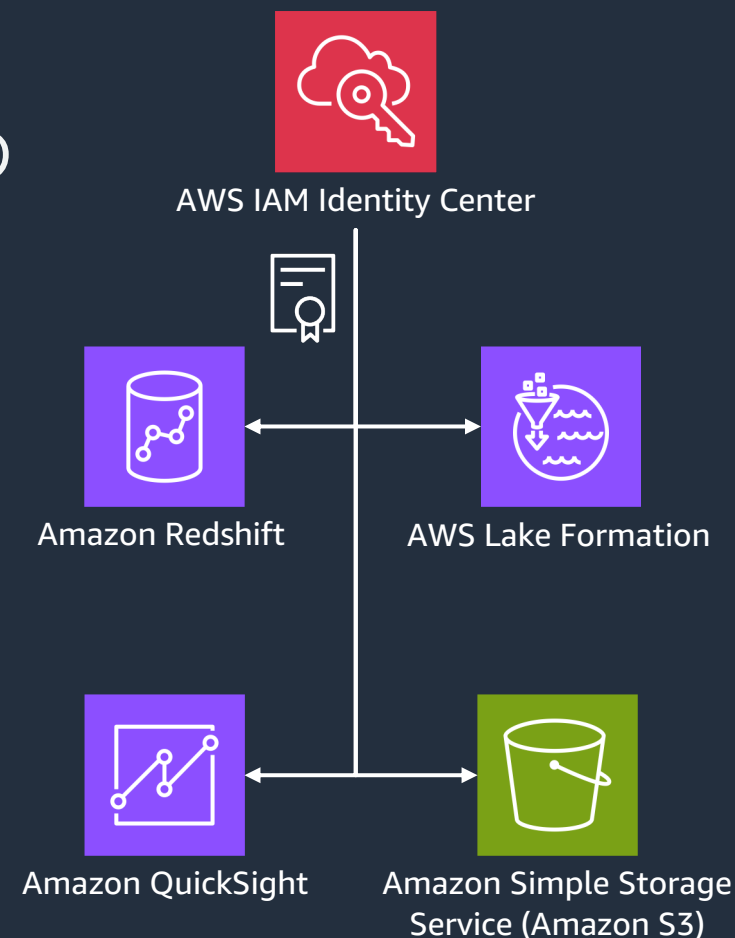
Control Towerがデジタル統制(digital sovereignty)対応を強化

- デジタル統制(digital sovereignty)を実現するためのマネージドコントロールが65個追加された
 - 高度なリージョン利用制御などを含む
 - コンソール上で新たにdigital sovereigntyというグループが定義され、既存を含め245個以上のコントロールを配置
 - アクションの制御、設定の適用、データレジデンシーに関わる設定変更の検知などを実施可能



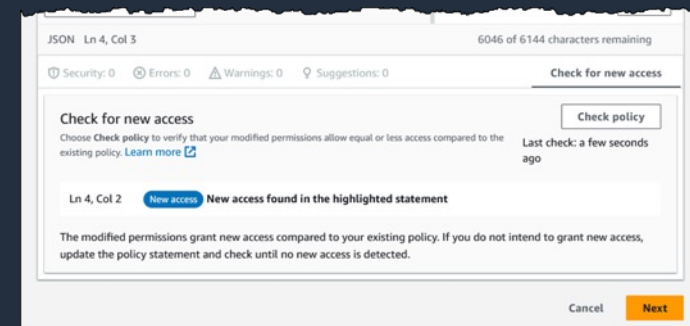
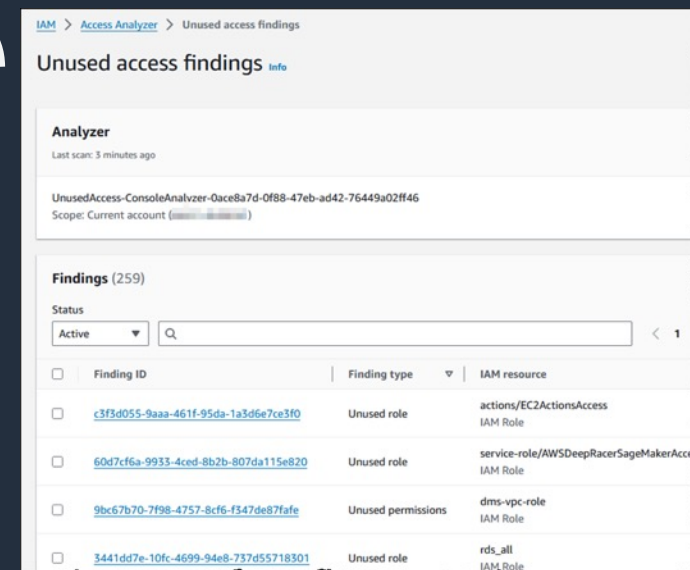
AWS IAM Identity Centerと分析サービスとの連携機能を発表

- AWSのAnalytics(分析)サービス群で、AWS IAM Identity Centerを利用したデータとリソースへのアクセス管理・監査が可能に
 - Quicksight, Redshift, Lake Formation, S3(S3 Access Grants経由)が対応
 - IAM Identity CenterがTrusted identity propagationという機能でID情報を連携。管理者はユーザやグループに基づいて権限を定義する
- サービス毎にTrusted identity propagationが利用できるリージョンは異なるため要確認



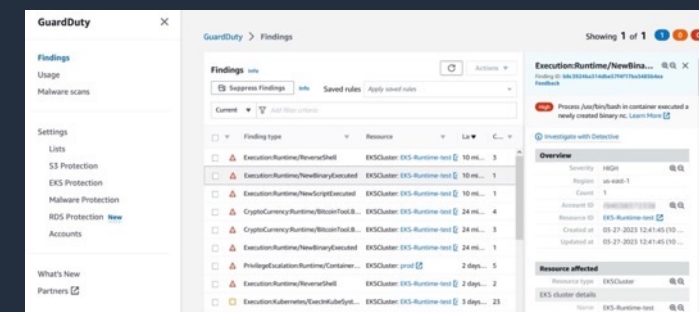
IAM Access Analyzerのアップデート

- IAMユーザーおよびロールにおいて使用されていないアクセス権限を検出
 - アクセスキー、パスワード、IAMロールが対象
 - 最小権限の原則に基づいた運用を支援
- 自動推論に基づくカスタムポリシーチェックをサポート
 - IAMポリシーを編集した際、新しく与えたアクセス権限を特定して表示
 - 組織のセキュリティ基準に準拠しているかをポリシーの有効化前にチェックできる



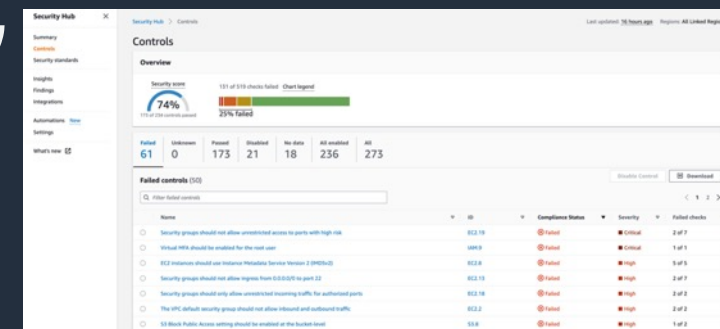
Amazon GuardDutyが脅威検知の対象範囲を拡大

- ECS Runtime Monitoringの一般利用を開始
 - 既存のEKSに続いてECSをサポート
 - Fargateも対応
- EC2 Runtime Monitoringを提供開始(プレビュー)
 - 暗号通貨のマイニングや不審なネットワーク接続などOSレベルの活動を検知可能になった
 - 現時点ではLinuxに対応。GuardDuty Agentのインストールが必要になる
- GovCloud、中国を除いてGuardDutyをサポートする全てのリージョンで利用可能



AWS Security Hubコントロールをカスタマイズ可能に

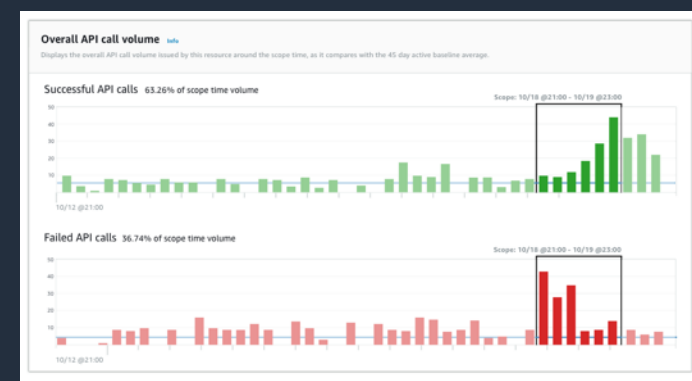
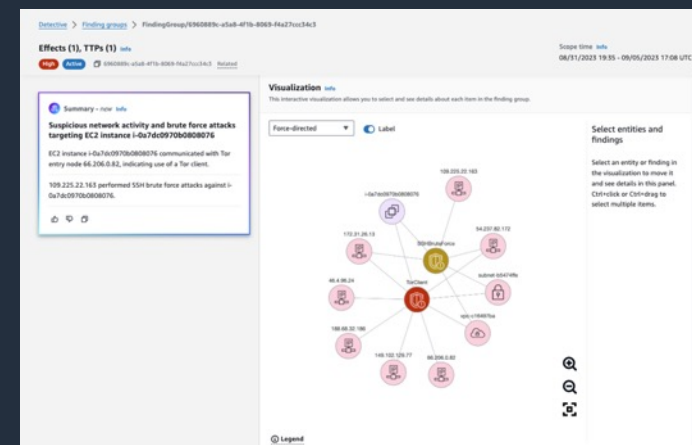
- Security Hubのマネージドコントロールをカスタマイズすることが可能になった
 - 例えばACMで発行された証明書の更新間隔に関するコントロールで間隔の日数を変更できる
 - 自身でカスタムコントロールを作成してメンテナンスするのとは比べ運用負荷を低減できる
 - 現時点で30以上のコントロールでカスタマイズをサポート
- GovCloudと中国を除き、Security Hubをサポートする全てのリージョンで利用可能



```
{  
  "SecurityControlId": "ACM.1",  
  "Parameters": {  
    "daysToExpiration": {  
      "ValueType": "CUSTOM",  
      "Value": {  
        "Integer": 30  
      }  
    }  
  }  
}
```

Amazon Detectiveで3つのアップデート

- Security Investigationの対象が追加
 - Fargateを含むECS Runtime Monitoring
 - AWS IAM
- Amazon Security LakeからのCloudTrailログおよびVPC Flow Logsの取り込みをサポート
 - 分析を進めるためのAthenaクエリも提供
- 生成AIによるFinding Groupサマリーを提供
 - 複数のFindingを分析した洞察を自然言語で提供する
 - 脅威分析の加速と効率化に貢献



InspectorがEC2のエージェントレス診断をサポート

- Amazon InspectorでエージェントをインストールすることなくEC2の脆弱性診断を行うことが可能になった
 - これまではAWS Systems Managerエージェントが必要だった
 - EBSスナップショットを利用してソフトウェアインベントリ情報を取得することで実現
 - 管理コンソールからhybrid scan modeを有効にすると自動的にエージェント有無を判断し実行
- バージニア、オレゴン、アイルランドでプレビュー提供

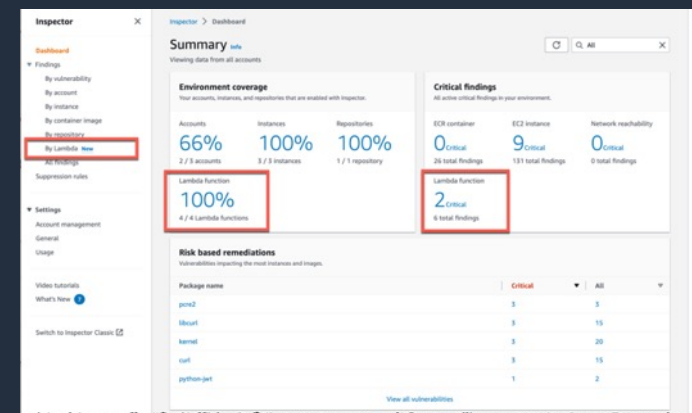


Amazon Inspector



Amazon InspectorのLambda code scanning機能が強化

- 生成AIと自動推論の技術により、スキャン結果に基づいたコード修正支援機能を提供
 - 検出された脆弱性を修正するためのコードスニペットを生成
 - Lambda関数コードにおいてSQLインジェクションやデータリーク、暗号化の欠如や強度不足などの脆弱性を発見し、迅速に修正できる
- 東京を含む10リージョンで提供開始



AWS Secrets Managerで値の一括取得が可能に

- AWS Secrets ManagerがSecretsの値を一括取得できるAPIをサポート
 - BatchGetSecretValue API
 - 名前やARNで対象を指定した上でタグなどによりフィルターすることが可能
 - アプリケーションにおいて複数のSecretsを取得したいケースでイテレーターが不要になり実装がシンプルに
- 中国を除き、AWS Secrets Managerをサポートする全てのリージョンで利用可能

```
{  
  "Filters": [  
    {  
      "Key": "string",  
      "Values": [ "string" ]  
    }  
  ],  
  "MaxResults": number,  
  "NextToken": "string",  
  "SecretIdList": [ "string" ]  
}
```

Amazon One Enterpriseを発表

- エンタープライズ企業のアクセスコントロールで利用することを意図した、手のひらベースの認証サービスを発表
 - 使いやすい生体認証デバイスを利用し、手のひらと静脈の画像によって精度99.9999%の生体認証を行う
 - IDカードやPINによる認証方法における管理の手間を削減。従業員は手のひらを使って物理空間やデジタル資産にアクセスする
- 米国内で限定的なプレビューを開始。



Management & Governance



Management & Governance

1. AWS Configで自然言語クエリプロセッサが利用可能に
2. AWS Configが24時間ごとに情報を記録するモードを提供
3. Amazon CloudWatch Logs が低頻度アクセスログクラスを提供
4. Amazon CloudWatch LogsでMLベースのログ分析機能を発表
5. Amazon CloudWatchが複数ソースのデータへのクエリに対応
6. Amazon CloudWatchが自然言語によるクエリ生成に対応
7. Amazon EKS向けのPrometheusメトリクスコレクターを発表
8. AWS CloudFormationがGitとの同期をサポート
11. SSM Automation にビジュアルデザイナーが導入
12. AWS Fault Injection Serviceがマルチアカウントに対応
13. AWS Fault Injection Serviceで2つのイベントシナリオを公開
14. AWS ChatbotがAmazon Q conversationをサポート



AWS Configで自然言語クエリプロセッサが利用可能に

- リソースの設定、コンプライアンス状況を SQL で照会可能な「高度なクエリ」機能において、自然言語を利用したSQL生成が可能に
- SQLの経験が無くてもクエリを生成し、高度な調査を実行できるようになる
 - より多くの人々がインシデント調査や非標準リソースの修正を担当できるように
 - その結果、改善が加速されることを期待できる
- プレビューを開始。バージニアとオレゴンにて追加費用なしで利用できる



AWS Configが24時間ごとに情報を記録するモードを提供

- AWS ConfigでAWSリソースの構成変更記録を24時間ごとに記録することが可能になった
 - 従来は構成変更があると即時に記録されていた
 - リソースタイプごとに即時記録と定期記録を選択可能
- EC2やECSのオートスケーリングなど、変更頻度が高いリソースの構成変更記録コストを抑えることが可能に
- AWS ConfigをサポートするすべてのリージョンでAPIまたはCLIから利用可能



```
$ aws configservice \
  put-configuration-recorder \
  --configuration-recorder
  name=default, \
  roleARN=arn:aws:iam::123456789012:role/config-role \
  --recording-group file://recordingGroup.json \
  --recording-mode file://recordingMode.json
```

```
{
  "recordingFrequency": CONTINUOUS or DAILY,
  "recordingModeOverrides": [
    {
      "description": "Description you provide for
      "recordingFrequency": CONTINUOUS or DAILY,
      "resourceTypes": [ Comma-separated list of r
    }
  ]
}
```

Amazon CloudWatch Logs が低頻度アクセスログクラスを提供

- CloudWatch Logs に低頻度アクセスクラスが導入され、データ投入が従来の半額で可能に
- 既存のクラスと使い分けることでコスト効率よく CloudWatch Logs によるログ集約管理が可能
 - リアルタイムな可視化や高度な分析など、頻繁なアクセスを要する場合は「スタンダードクラス」が推奨
 - フォレンジックのような必要が生まれたら分析する、という場合は「定頻度アクセスクラス」を使用
- CloudWatch Logs が利用可能なすべての商用リージョンで一般提供開始

Create log group

Log group details - new [Info](#)

CloudWatch Logs offers two log classes: Standard and Infrequent Access. [Learn more about the features offered by each log class.](#)

Log group name

Retention setting
Never expire

Log class - new [Info](#)

Infrequent Access

Standard

Infrequent Access

Amazon CloudWatch LogsでMLベースのログ分析機能を発表

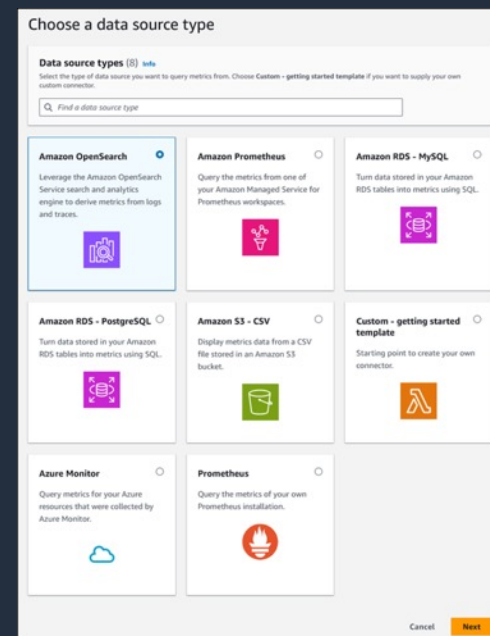
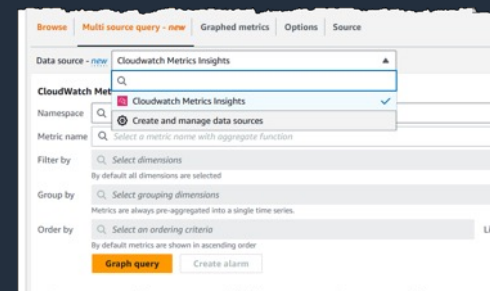
- Amazon CloudWatch Logsで機械学習技術を活用したログ分析機能を提供開始
 - Patterns view: クエリにおいて繰り返し発生するログパターンを検知・可視化する
 - Log Insights - compare mode: 過去のある期間と、現在の期間を比較して、何が変化したかを発見
 - Log Anomaly Detection: 新たに収集されたログを過去のベースラインと比較し、潜在的な問題を検知
- 中国とイスラエルを除く、CloudWatch Logsが利用できる全リージョンで利用可能

Inspect	Pattern	Event count	Event ratio (%)	Severity type
<input type="checkbox"/>	[INFO] All good in loop <*> / <*> after waiting for <*> ms	2,520	92%	INFO
<input type="checkbox"/>	END Requested: <*>	60	2%	NONE
<input type="checkbox"/>	START Requested: <*> Version: SLATEST	59	2%	NONE
<input type="checkbox"/>	REPORT Requested: <*> Duration: <*> ms Billed Duration: <*> ms Memory Size: <*> MB Max Memory Used: <*> MB	59	2%	NONE
<input checked="" type="checkbox"/>	[ERROR] Something happened in loop <*> / <*> after waiting for <*> ms	27	1%	ERROR
<input type="checkbox"/>	INIT_START Runtime Version: python:<*> Runtime Version ARN: arn:aws:lambda:<*>:<*>:runtime:<*>	1	< 1%	NONE
<input type="checkbox"/>	REPORT Requested: <*> Duration: <*> ms Billed Duration: <*> ms Memory Size: <*> MB Max Memory Used: <*> MB Init Duration: <*> ms	1	< 1%	NONE

Anomaly	Priority	Log pattern	Anomaly log trend
47.6% increase in log event count	Low	[INFO] All good in loop <*> / <*> after waiting for <*> ms	
3863.5% increase in log event count	High	REPORT Requested: <*> Duration: <*> ms Billed Duration: <*> ms Memory Size: <*> MB Max Memory Used: <*> MB Init Duration: <*> ms	
Unexpected pattern detected	High	[ERROR] Something happened in loop <*> / <*> after waiting for <*> ms	
Unexpected pattern detected	High	START Requested: <*> Version: SLATEST	
Unexpected pattern detected	High	REPORT Requested: <*> Duration: <*> ms Billed Duration: <*> ms Memory Size: <*> MB Max Memory Used: <*> MB	
Unexpected pattern detected	High	END Requested: <*>	

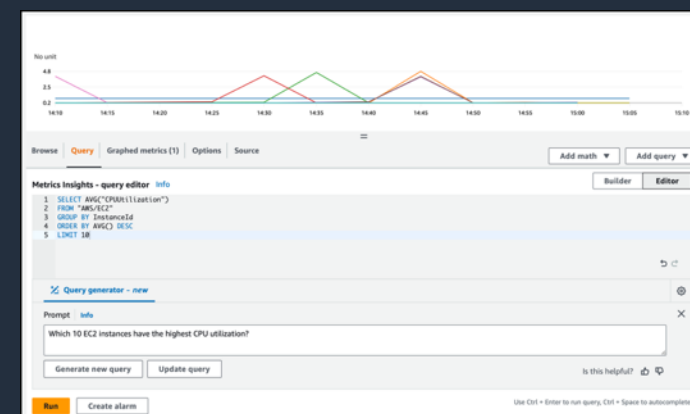
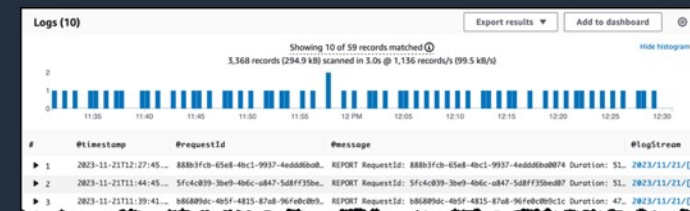
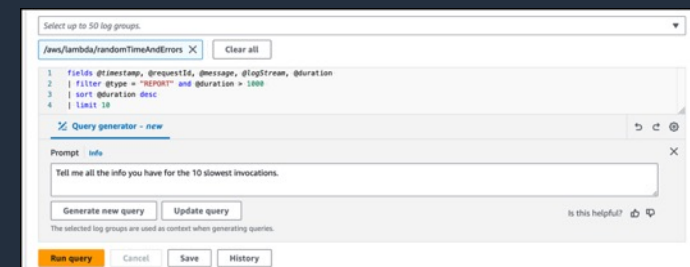
Amazon CloudWatchが複数ソースのデータへのクエリに対応

- Amazon CloudWatchが複数のソースからのデータのクエリとアラーム通知をサポート
 - AWSとオンプレミスや、他クラウドなどを併用している場合に、様々なデータソースからのメトリクスを統合し、統一的な手法で処理できるようになる
 - RDSやS3のデータを追加して、メトリクスに対してさらなる情報を付加することも可能
- 中国リージョンとAWS GovCloudを除く全てのリージョンで利用可能。利用したリソースについてのみ料金が発生する



Amazon CloudWatchが自然言語によるクエリ生成に対応

- ログとメトリクスインサイトにて、生成AIにより自然言語でクエリを生成する機能を提供
 - 自然言語で質問することでクエリを生成。簡単に始めることができる
 - 自動生成したクエリについて解説を付与。クエリ構文を書くための学習を支援する
 - 自然言語を利用して既存のクエリを改善できる。繰り返し実行するものを、継続的な改善に有益
- バージニアとオレゴンのリージョンにて。プレビュー中は無料で利用できる

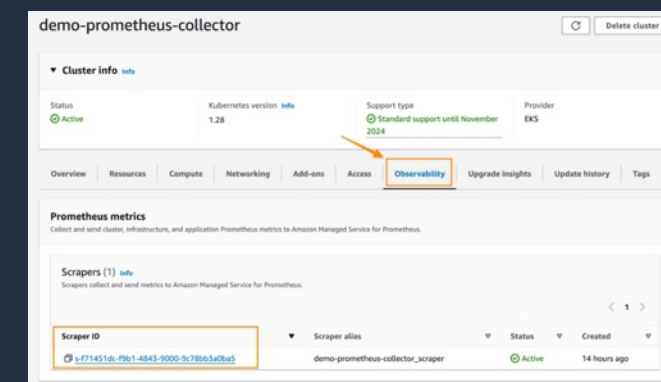
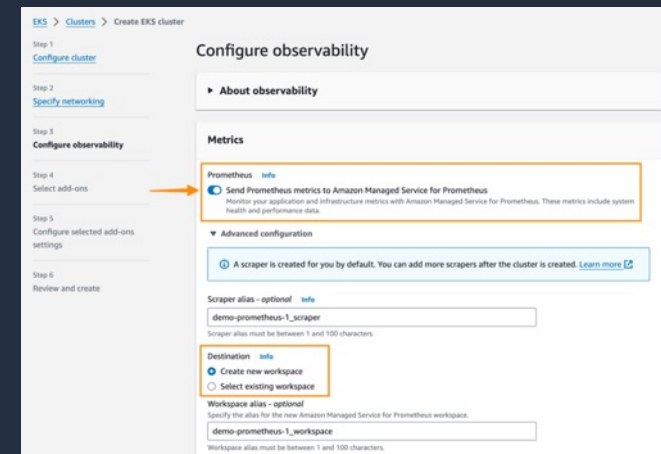


Amazon EKS向けのPrometheusメトリクスコレクターを発表

- Amazon Managed Service for Prometheus collectorを発表

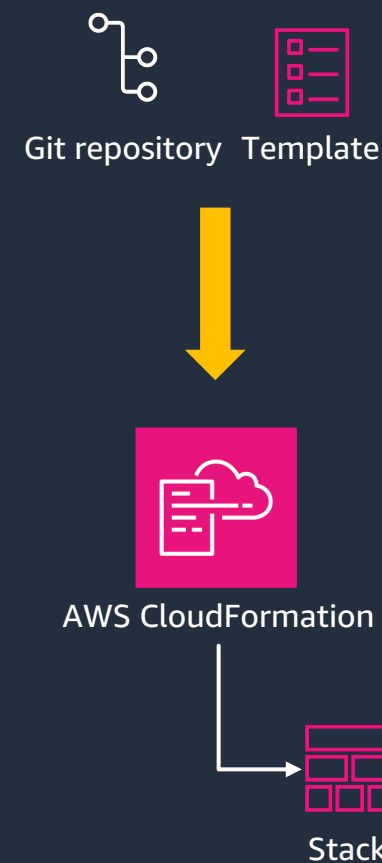
- Amazon EKSで稼働するシステムのPrometheusメトリクスを収集できるエージェントレスのデータコレクター
- EKS上のアプリケーションや、インフラストラクチャ、Kubernetes APIサーバなどからPrometheusメトリクスを自動的に検出し、収集する
- エージェントレスが故に、インストールやパッチ適用、バージョンアップといった管理作業から解放される

- Amazon Managed Service for Prometheusが利用可能な全てのリージョンで利用できる



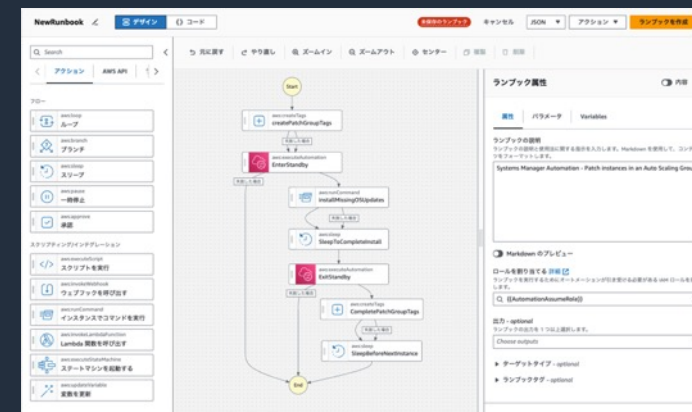
AWS CloudFormationがGitとの同期をサポート

- Gitリポジトリに保存されているCloudFormationテンプレートの内容に基づいてスタックの現状を同期させることが可能に
 - スタックのパラメータなどの動的な値はYAMLのDeployment fileで指定できる
 - リポジトリでコミットが行われると、その内容に応じてスタックが更新される
 - Gitリポジトリを利用することで変更履歴の追跡が容易に。本番への適用前に試験する場合はブランチを分割して対応する
- 東京をはじめ各リージョンで利用可能



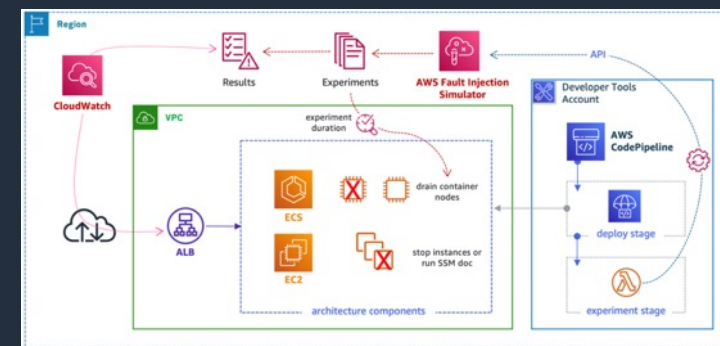
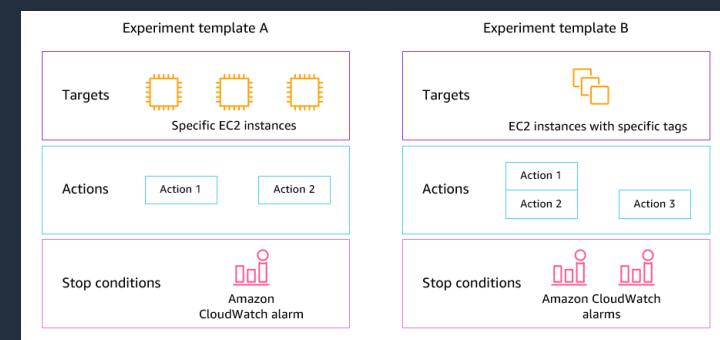
SSM Automation にビジュアルデザイナーが導入

- AWS Systems Manager Automationでランブックの作成・編集にビジュアルデザイナーが使用できるようになった
- ローコードでランブックを作成できるため、運用担当者がAutomationによる運用の自動化をやりやすくなる
 - 既存ランブックをインポートして編集するのを推奨
 - 作成したランブックやグラフのエクスポートが可能
- AWS Systems Manager が提供されているすべてのリージョンで利用可能



AWS Fault Injection Serviceがマルチアカウントに対応

- 複数のAWSアカウントに跨るアプリケーションに対して障害シナリオを実行可能に
 - オークストレーターアカウントからマルチアカウント用Experimentテンプレートを用いて容易に実行可能
 - リソースタグで対象を指定
 - IAMロールで詳細な権限管理が可能
- AWS Fault Injection Serviceをサポートする全てのリージョンで利用可能



※Fault Injection Simulatorから名前が変わりました

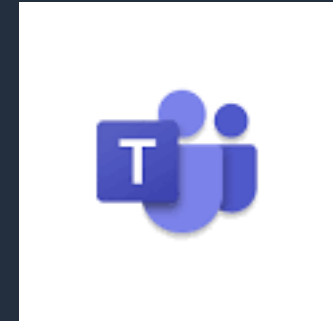
AWS Fault Injection Serviceで2つのイベントシナリオを公開

- AWS Fault Injection Service(FIS)で多くの要望を頂いていた2つイベントシナリオを公開
- The AZ Availability: Power Interruption
 - ひとつのAZで完全に電源を喪失した場合を想定。マルチAZのアプリケーションの振る舞いを試験できる
- Cross-Region: Connectivity
 - リージョン間の接続が切断され他リージョンのリソースにアクセスできない場合を想定。マルチリージョンアプリケーションの振る舞いを試験できる
- FISが利用可能な全てのリージョンにて



AWS ChatbotがAmazon Q conversationをサポート

- Amazon Q in AWS ChatbotによりMicrosoft Teams, Slack上での対話型エクスペリエンスを提供
 - 使い慣れたチャットツール上でAWSに関する質問を行い、簡潔で信頼できる回答を得ることができる
 - 問題発生時や仕様の調査時、ドキュメントやブログなどの情報を精査する作業を削減できる
- プレビュー提供開始。Teams marketplace, Slack App DirectoryからAWS Chatbot Appを入手可能



Internet of Things



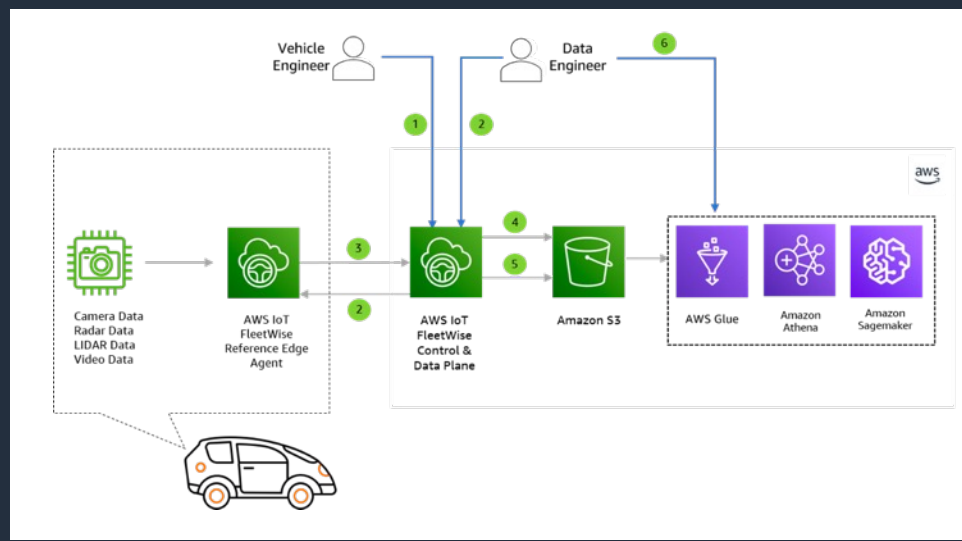
Internet of Things

1. IoT FleetWiseが視覚システムのデータをサポート
2. IoT SiteWise EdgeをSiemens Industrial Edgeに展開可能に
3. FreeRTOSのロードマップと機能開発状況の確認が容易に



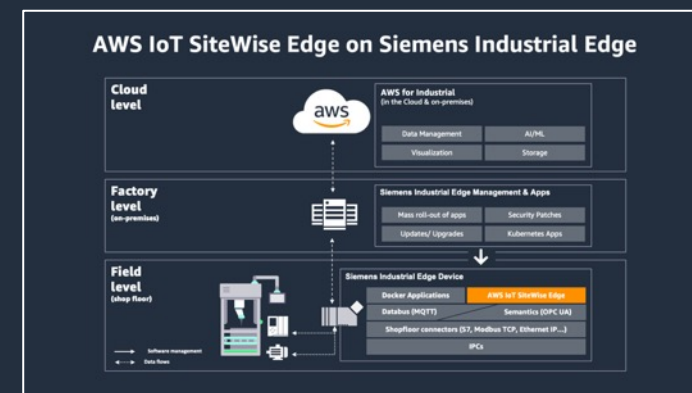
IoT FleetWiseが視覚システムのデータをサポート

- AWS IoT FleetWiseでカメラ、レーダー、LIDARで取得した視覚システム(vision system)データの収集と管理が可能に
 - 自動運転、ドライバー向けパーソナライズ機能などの開発に活用できる
 - バージニア、フランクフルトでプレビュー提供開始



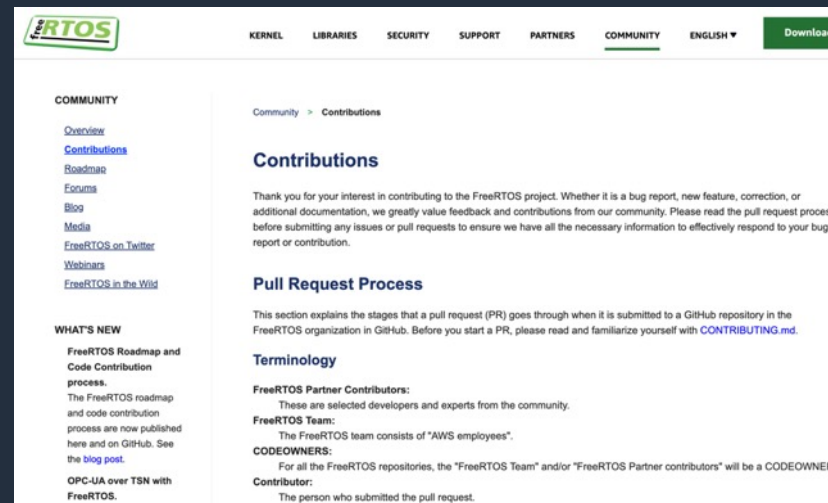
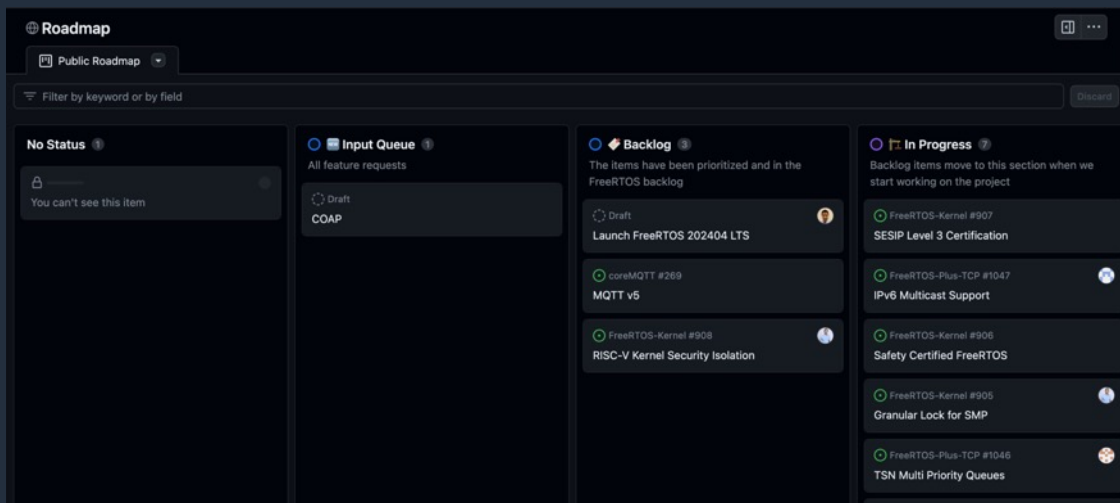
IoT SiteWise EdgeをSiemens Industrial Edgeに展開可能に

- Siemens Industrial EdgeはIT/OTを統合し製造現場でのデータ活用を加速するソリューション
- AWS IoT SiteWise EdgeをSiemens Industrial Edgeデバイス上に展開できるようになった
 - Siemens Industrial Edge Marketplaceから入手可能に
 - 製造設備やプラントから収集したデータをクラウドに連携し、メンテナンス、故障予兆検知、電力消費やKPIのモニタリングに活用
- AWS IoT SiteWise Edgeは東京を含む11リージョンで利用可能



FreeRTOSのロードマップと機能開発状況の確認が容易に

- FreeRTOSはオープンソースで提供されるリアルタイムOS
- FreeRTOSの開発に関する情報をfreertos.orgおよびGitHubで公開
 - 使いたい機能や要望した機能の実装状況を単一のビューから確認可能に
 - 開発コントリビューションの方法も明確化



Application Integration Developer tools

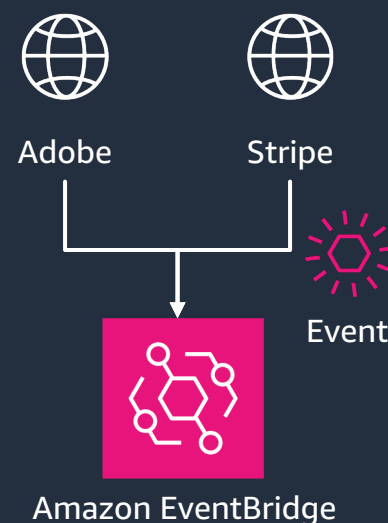


Application Integration, Developer Tools

1. Amazon EventBridgeがパートナー製品との統合をサポート
2. AWS Step FunctionsとAmazon Bedrockの統合を発表
3. AWS Step FunctionsがHTTPSエンドポイントをサポート
4. Amazon SQSで2つのアップデート
5. AWS AppFabric for productivityを発表
6. AWS AppSyncがAmazon AuroraのData API対応を強化
7. Amazon Managed Blockchain Access Polygonを発表
8. Amazon CodeCatalystのアップデート
11. Application ComposerでStep Functionsの詳細設定が可能に
12. AWS SDK for Kotlin, AWS SDK for Rustの一般提供開始

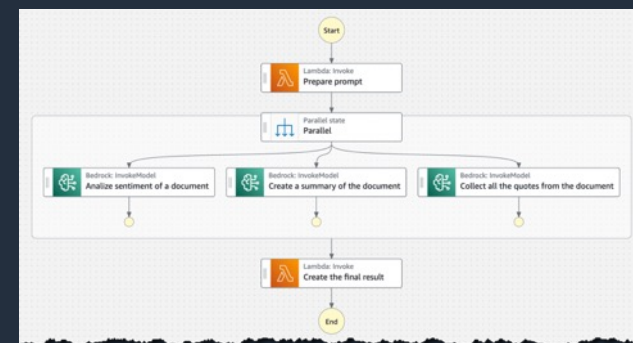
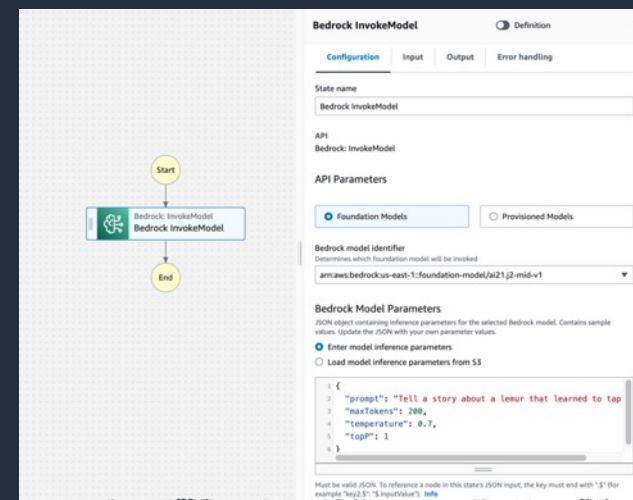
Amazon EventBridgeがパートナー製品との統合をサポート

- Amazon EventBridgeがパートナーソリューションと統合可能になり、これらのサービスで発生するイベントをAWSにルーティング可能に
 - Adobe: Adobe Experience cloud, Creative cloud, Document cloud, Custom I/O Events from Adobe App Builderに対応
 - Stripe: Stripe Billing, Checkout, Connect, Invoicing, Treasuryなど利用可能な全てのイベントに対応
- 中国とAWS GovCloud(US)を除く全てのAWSリージョンで利用可能に



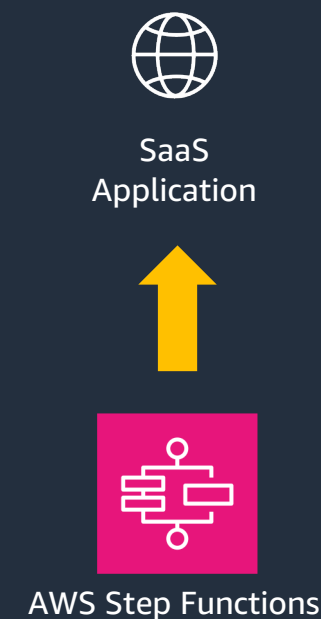
AWS Step FunctionsとAmazon Bedrockの統合を発表

- AWS Step FunctionsのワークフローにAmazon Bedrockによる生成AIを組み込む機能を提供。カスタムコードの実装が不要になった
- 2つのBedrock APIとの統合が可能
 - InvokeModel API統合: S3からの情報を基盤モデルに渡したり、出力をS3に書き込むといったインタラクションを可能にする
 - CreateModelCustomizationJob API統合: モデルのファインチューニングが必要なワークフローで、その完了をまって次のステップの処理に移ることが可能



AWS Step FunctionsがHTTPSエンドポイントをサポート

- AWS Step FunctionsがHTTPSエンドポイントをサポート。様々なSaaSアプリケーションなどをワークフローに統合できるように
 - 220+のAWSサービスと、HTTPSエンドポイントを用意しているSaaSなどを組み込んだワークフローをカスタムコードなしで実現
- ワークフローのひとつのステップをテストするためのTestState APIも提供開始。部分的なテストが簡単に
- 東京ほか8つのリージョンで利用可能

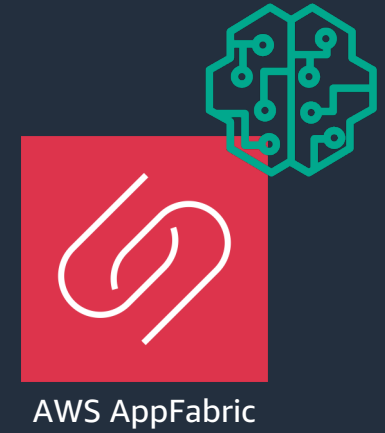


Amazon SQSで2つのアップデート

- FIFOキューにおける配信不能キューの再配信に対応
 - FIFOキューを利用している際に、配信不能でDead-letter queueに格納されたアイテムを再配信(redrive)できるようになった
 - コンシューマとなるシステム側の一時的な問題に起因する場合、単に再配信することで問題が解消することもあるため、リトライさせたい場合に便利
- FIFOキューの高スループットモードの上限を引き上げ
 - FIFOキューの高スループットモードで処理可能なAPIアクション数上限が引き上げられた
 - バージニア、オレゴン、アイルランドで70,000件/秒に。他のリージョンは従来通りで、東京は9,000件/秒が上限となる

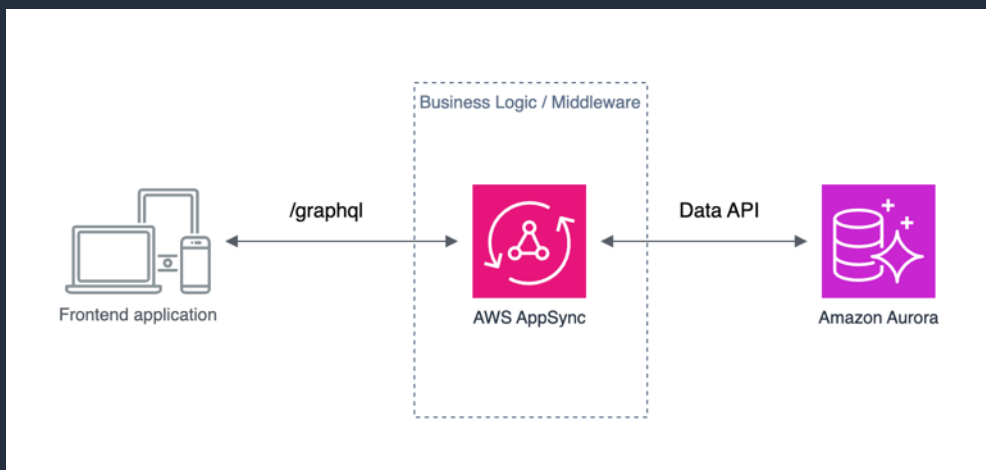
AWS AppFabric for productivityを発表

- 複数のアプリケーションからのコンテキストを元に生成AIによるインサイトが提示され、UX改善に活用できる機能を提供開始
 - Asana, Atlassian Jira Suite, Miro, Slack, Smartsheet, Microsoft 365, Google Workspaceのデータを統合
 - Asana, Miro, Smartsheetなどのアプリはユーザが優先順位を付けてタスクに取り組むことを支援するために、AppFabricの機能をすでに利用している
- バージニアリージョンでプレビューを開始



AWS AppSyncがAmazon AuroraのData API対応を強化

- Data APIが有効に設定されたAmazon AuroraにアクセスするGraphQLのAPI開発が容易に
 - AppSyncがデータベースをチェックし、検出されたテーブルに対応するGraphQLの型を生成。インタフェースを作る手間とミスを削減する
- JavaScriptリゾルバでSQL記述を容易にするツールも提供開始



<input type="checkbox"/>	Type name ↗	Table	Primary key	Columns
<input type="checkbox"/>	Conversation_participants	conversation_participants	conversation_id, sub	3
<input type="checkbox"/>	Conversations	conversations	id	3
<input type="checkbox"/>	Messages	messages	id	5

Amazon Managed Blockchain Access Polygonを発表

- Polygonブロックチェーン上で、高耐久性をもったWeb3アプリケーションを開発するためのフルマネージドサービス
 - Amazon Managed Blockchain Access Polygonは Polygon PoSのMainnetとMumbai Testnetのアーカイブノードに対してサーバレスでアクセスする機能を提供する
- 独自のノード管理やスケーリングの手間なく、Web3ユースケースを構築することが可能に
- バージニアリージョンで利用可能



Amazon Managed Blockchain



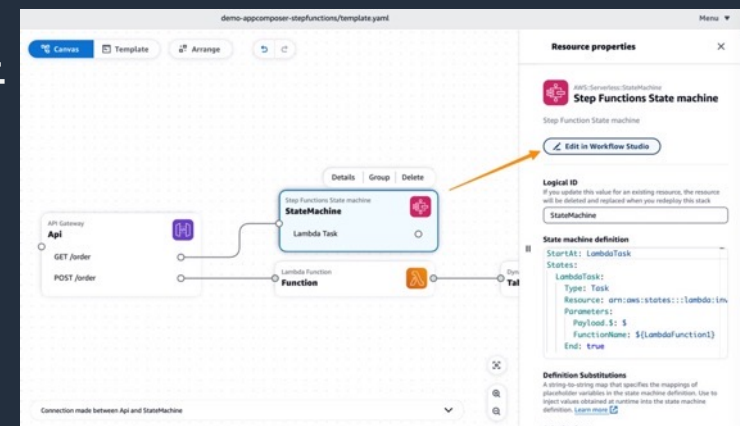
Amazon CodeCatalystのアップデート

- カスタムブループリントをサポート
 - CodeCatalystプロジェクトにおけるアプリケーションコードやワークフロー、インフラの構成を定義
 - 変更はPull Requestとして展開後も伝播される
 - チームのベストプラクティスを定義して推進可能に
- 新しい料金モデルとしてEnterprise Tierを発表
 - カスタムブループリントが利用可能になる
 - スペース毎に1,500コンピュート時間、160開発環境時間、ユーザー毎に64GB開発環境ストレージを提供
 - ユーザーあたり月額20ドル

The screenshot shows the 'Create blueprint' page in the Amazon CodeCatalyst console. The page has a dark header with the Amazon CodeCatalyst logo, the user 'irshad-generative-ai', and a 'Projects' dropdown. A search bar is also present. The main content area is white and contains several sections: 'Blueprint name' with a text input field containing 'Default Lambda Handler' and a note that names must be unique and between 3 and 63 characters; 'Blueprint details' which includes 'Blueprint Display Name' (also 'Default Lambda Handler'), 'Description' (a text area with 'This creates a default lambda handler, a CDK stack, and a deployment'), and 'Author name' (a text input field with 'irshad-generative-ai'). There is a link for 'Advanced settings' at the bottom of the form.

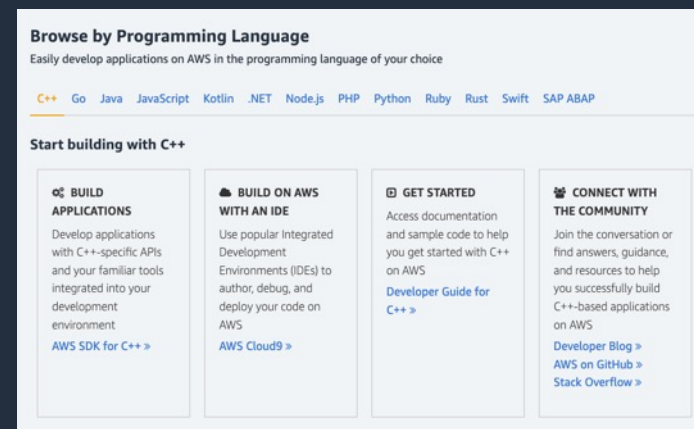
Application ComposerでStep Functionsの詳細設定が可能に

- AWS Application ComposerにStep Functions Workflow Studioが統合された
 - 単一のInfrastructure as Codeビルダーで全体アーキテクチャからワークフローまでデザイン可能に
 - Edit in Workflow Studioボタンを押下するとApplication Composer内でWorkflow Studioを使用できる
- AWS Application Composerは東京、大阪を含む15リージョンで利用可能



AWS SDK for Kotlin, AWS SDK for Rustの一般提供開始

- AWS SDK for Kotlinはリリース時点でJVMプラットフォームまたはAndroid APIレベル24+をサポートしコルーチンによるAWSサービスへの非同期アクセスに対応
- AWS SDK for Rustはasync/await, ノンブロッキングI/Oなど最新の言語機能をサポートしており、必要なクレートだけをコンパイルして利用できるモジュラーアーキテクチャを採用



Migration & Modernization



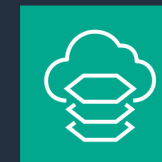
Migration & Modernization

1. AWS Mainframe Modernization Application Testingを発表
2. AWS Mainframe Modernizationの2つの新機能



AWS Mainframe Modernization Application Testingを発表

- AWSに移行したメインフレームアプリケーションの機能テストを自動化するAWS Mainframe Modernization Application Testingを発表
 - テスト作業のキャプチャ、自動テストリプレイ、比較、回帰テストなどのテスト機能を提供
- 作業量の大きいテストの効率化により、プロジェクトの複雑さや投資効率の改善につながる
- AWS Mainframe Modernizationの一部として、追加料金なしでプレビュー可能



AWS Mainframe
Modernization



AWS Mainframe Modernizationの2つの新機能

- AWS Mainframe Modernization Data Replication with Precisely for IBM iを発表
 - IBM I, iSeries, System I, AS/400などのミッドレンジシステムでもPrecisely社が提供するデータレプリケーション機能を利用可能に。異種データベースの同期を実現する
- AWS Mainframe Modernization File Transfer with BMCを発表
 - BMC社が提供するデータ転送テクノロジーにより、データをAWSで使用できるようにするために検出・転送・変換する
 - AWS Mainframe Modernizationのコンソールから操作可能。圧縮、エンコーディング変換などを適用し、Amazon S3にデータを転送できる

Business Applications

End user computing

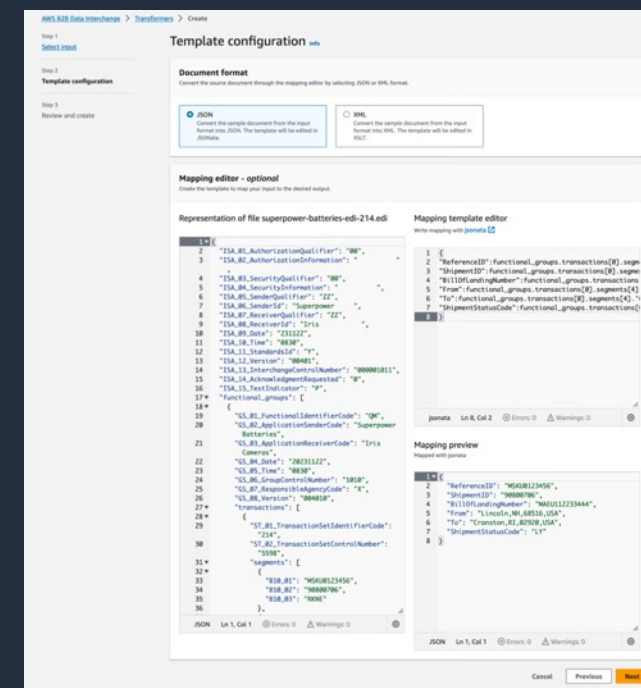


Business Applications, End user computing

1. AWS B2B Data Interchangeを発表
2. Amazon Connectがチャネルの柔軟性を強化
3. Amazon Connect analytics data lakeを発表
4. Amazon Connect Contact Lensのアップデート
5. Amazon Connectのアップデート
6. Amazon WorkSpacesのリージョン間冗長化機能を強化
7. Amazon WorkSpaces Thin Clientを一般提供開始

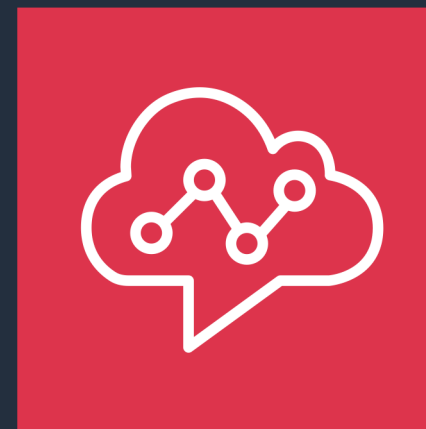
AWS B2B Data Interchangeを発表

- EDI(Electronic Data Interchange)ドキュメントをJSONやXMLフォーマットに変換する
 - マッピングテンプレートを定義することで、受信したEDIドキュメントをJSON/XMLに自動変換する
 - AWS Transfer Familyで転送されたファイルを利用可能
 - 変換後のデータはAmazon S3に保存される
- EDIの仕組みでやりとりされるデータをデータレイクやビジネスアプリケーションに取り込む作業を簡素化し、時間やコストを削減する
- バージニア、オハイオ、オレゴンにて



Amazon Connectがチャネルの柔軟性を強化

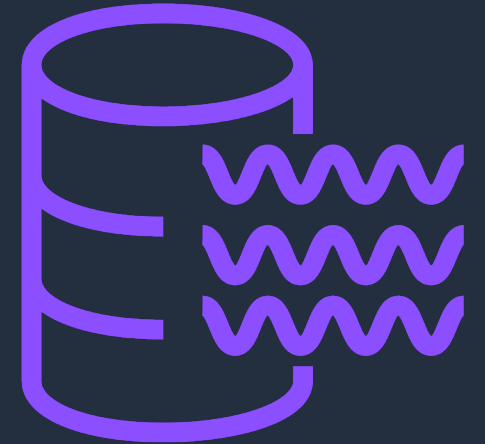
- 双方向SMSをサポート
 - お客様は使い慣れた手段でより手軽にコンタクトして素早く問題を解決することができる
 - Amazon Pinpointから双方向SMSの番号を取得し、Amazon Connectインスタンスに紐付けを行う
- Webやアプリへの通話機能の埋込みをサポート
 - ウィジェットの活用で最小限の開発で実現可能
- いずれもConnectの他のチャネルと同様のルーティングや設定、分析が可能
- 東京を含む複数のリージョンで提供開始



Amazon Connect

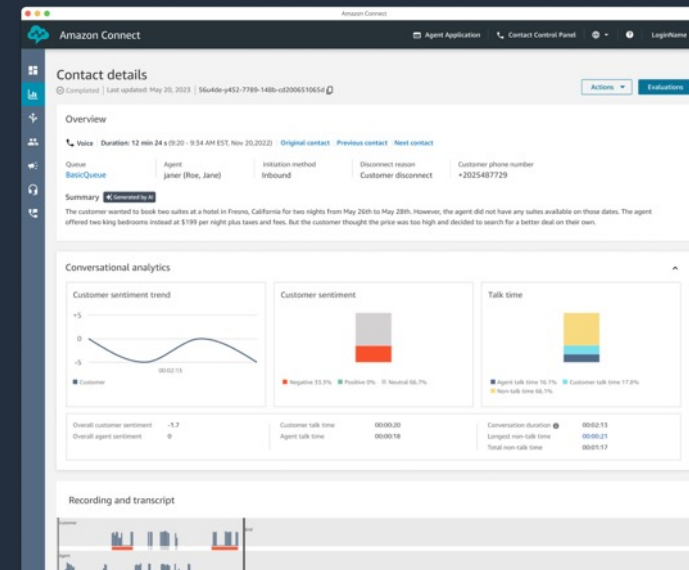
Amazon Connect analytics data lakeを発表

- Amazon ConnectがZero-ETLで利用できるデータレイクを提供
 - 複雑なパイプラインの構築なしにコールセンターの統合的なデータレイクを構成できる
 - 顧客満足度やエージェント毎のパフォーマンスなどのコールセンターの主要なメトリクスを使い慣れたBIツールやクエリツールを選んで分析できる
- 東京を含む10リージョンでプレビュー提供開始



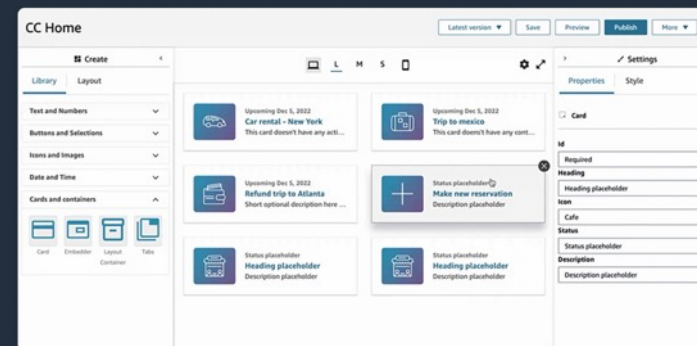
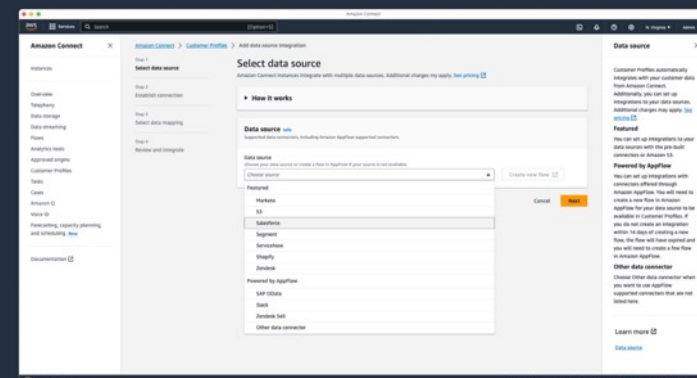
Amazon Connect Contact Lensのアップデート

- チャットのリアルタイム会話分析をサポート
 - これまでは完了済みの会話が対象だった
 - スーパーバイザーが重要な場面を素早く検出し支援に入ることができ、お客様の体験を向上できる
 - 音声のリアルタイム分析をサポートしているリージョンで一般利用開始
- Bedrockによる会話サマリーをサポート
 - 音声、チャットの双方に対応
 - スーパーバイザーの負荷を低減し品質向上を加速
 - バージニア、オレゴンでプレビュー提供開始



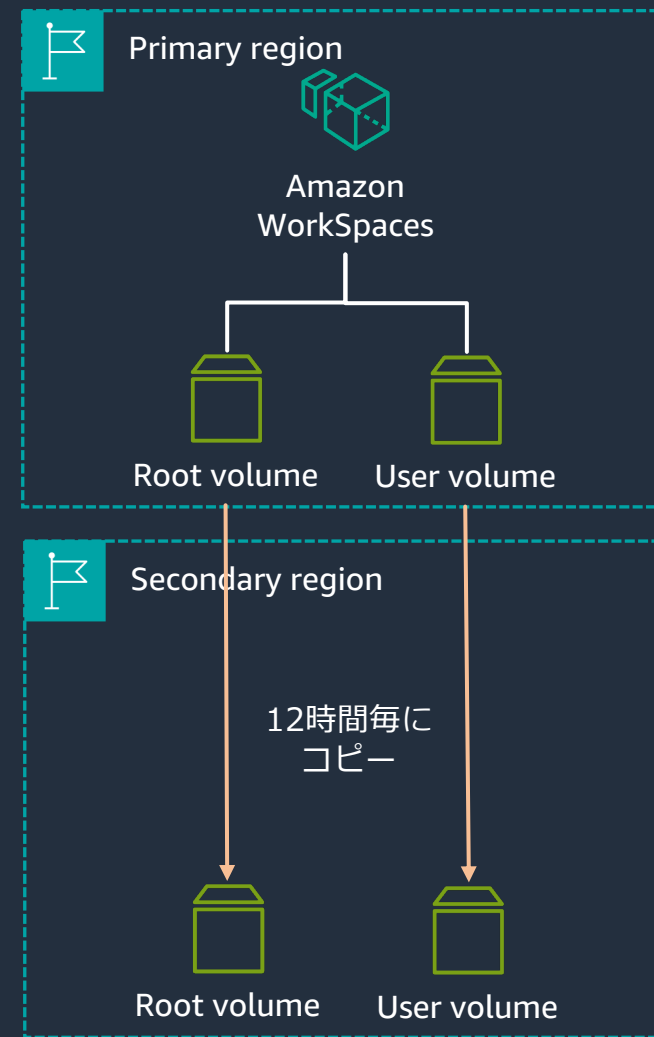
Amazon Connectのアップデート

- 生成AIによる顧客データマッピングを提供
 - SalesforceやS3などから顧客データを取り込む際、生成AIがフォーマットを読み取りConnect内のCustomer profileへの統合を提案する
 - 管理者はレビューのみを行えばよく、パーソナライズに向けた顧客データエンリッチメントを加速
- ノーコードUIビルダーを提供
 - コールセンターエージェント向けのステップバイステップガイドを簡単な操作で作成できる
 - エージェントがお客様との会話に応じて画面上で何をすれば良いかなどをガイドでき対応品質を高められる



Amazon WorkSpacesのリージョン間冗長化機能を強化

- Amazon WorkSpacesで異なるリージョンでの業務継続を可能にするMulti-Region Resilience機能が強化された
- 一方向のデータレプリケーションを定期的に行う。最近のデスクトップ環境の状態を維持する
 - ルートボリュームとユーザボリュームが12時間毎にコピーされ、プライマリリージョンが利用不可の場合にこのデータを利用し状態を復元できる
- Multi-Region Resilienceが利用可能なリージョンにて



Amazon WorkSpaces Thin Clientを一般提供開始

- Amazon WorkSpaces用のシンクライアントデバイスを提供開始
 - 仮想デスクトップのTCO削減、セキュリティの強化、展開の加速を支援
 - Amazon WorkSpaces, Amazon WorkSpaces Web, and Amazon AppStream 2.0 をサポート
- バージニア、オレゴンなど海外7リージョンでサービス提供開始。デバイスはAmazon Businessから購入可能となる予定



Others



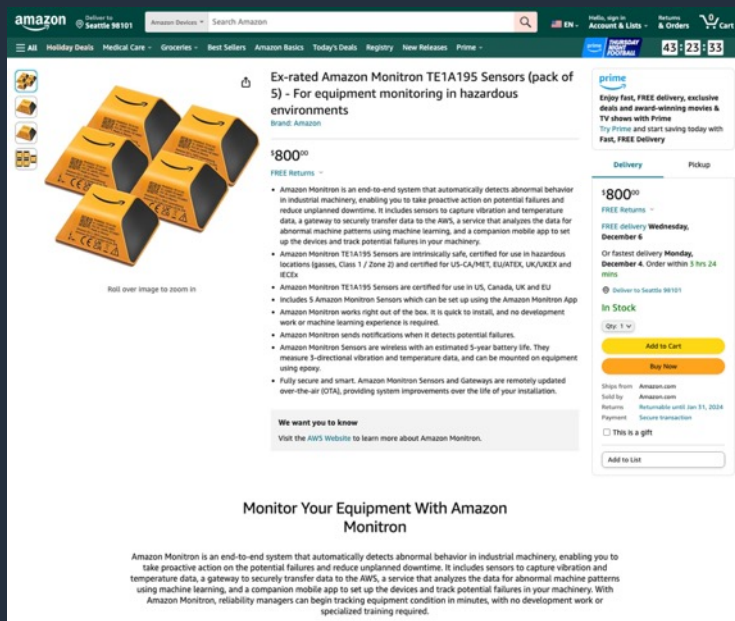
Others

1. 防爆構造の Amazon Monitronセンサーを発表
2. Amazon Monitronが他リージョンのIICに対応
3. AWS Console-to-Codeを発表
4. AWS SupportのAWS Countdownを発表
5. Data Exports for AWS Billing and Cost Managementを発表
6. Cost and Usage Dashboard powered by Amazon QuickSight
7. コスト最適化のための4つの新機能を発表
8. AWS re:Post Privateが一般利用開始に
9. AWS Well-Architected ToolのLens Catalogを発表
10. Amazon Q in the AWS Console Mobile Applicationを発表



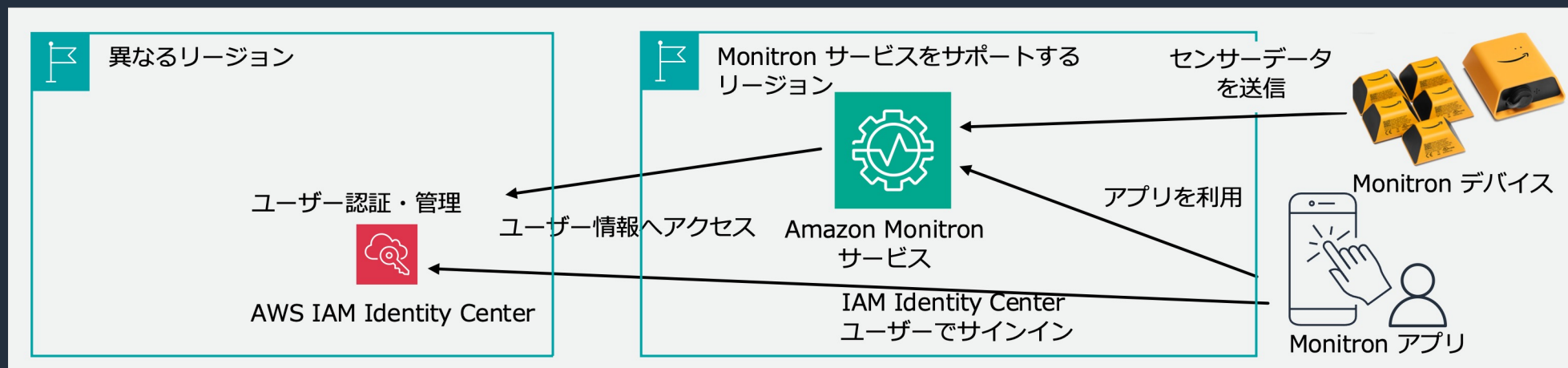
防爆構造の Amazon Monitronセンサーを発表

- 防爆規格に準拠した新たなセンサーを利用することで、危険場所 (Zone 2) に設置された設備の異常予兆検知が可能
 - IECExおよび米国・EU・英国の認定を取得済み
- Amazon.com(小売)とAmazon Business(米国)で購入することが可能



Amazon Monitronが他リージョンのIICに対応

- Monitronと異なるリージョンのIIC(IAM Identity Center)をサポート
 - 従来はMonitronサービスと同じリージョンで動くIICが必須であったが、異なるリージョンのIICを利用したユーザ管理に対応。オプトインリージョンとGovCloudを除く全てのIICリージョンで対応できる
 - Monitronサービスは海外リージョンで稼働させ、IICは東京・大阪の国内リージョンに構築済みのものを利用することが可能に



AWS Console-to-Codeを発表

- コンソールで実行されたアクションを記録し、再利用可能なコードに変換するAWS Console-to-Codeを発表
- インスタンス作成などのアクションをキャプチャし、選択した言語のコードを生成する
 - CDK – Java/Python/TypeScript
 - CloudFormation – JSON/YAML
 - AWS CLI への変換に対応
- EC2のみに対応し、無料で利用できる。バージニアでプレビューを開始



AWS
Management
Console



Authenticated
user



Review code Info

Console-to-Code generated the following code for your selected actions. Review it, and then copy or download it.

Code for selected actions

CDK TypeScript code

The generated code is a suggestion and might require changes to be usable in your environment. If you have suggested improvements, you can provide feedback.

Here is the generated CDK code:

```
```typescript
import * as ec2 from '@aws-cdk/aws-ec2';

const vpc = new ec2.Vpc(this, 'Vpc');

const securityGroup = new ec2.SecurityGroup(this, 'SecurityGroup', {
 vpc,
 securityGroupName: 'sg-0b31c4da0322a7a9d'
});
```



# AWS SupportのAWS Countdownを発表

- プロジェクトリリースなど重要な日に成功を納めるための支援を行うサービス
  - プロジェクト期間全体を通じて、運用準備状況評価やリスク特定と緩和を支援するプレイブックを提供
  - AWS Countdown Premiumでは、AWSのエキスパートがプロアクティブな支援・トラブルシューティングを提供
  - Infrastructure Event Management(IEM)を置き換える
- AWS Countdown Premiumは日本語を始め4言語に対応。ビジネスプラン以上で月額料金のサブスクリプションにてご提供



# Data Exports for AWS Billing and Cost Managementを発表

- 請求とコスト管理に関するデータをSQLで絞り込んで、データをエクスポートできる機能
  - Cost and Usage Report(CUR) 2.0で利用できる。従来のCURの情報に加えて支払者名と使用アカウント名が含まれている。CUR 2.0はクエリしやすいようなデータ構造で提供される
  - エクスポートしたデータはAmazon S3のバケットに定期的に配信される
  - 従来のCURを処理するツールがある場合は、CUR 2.0を元に従来通りのフォーマットでエクスポートすることで互換性を維持できる



AWS Cost & Usage Report



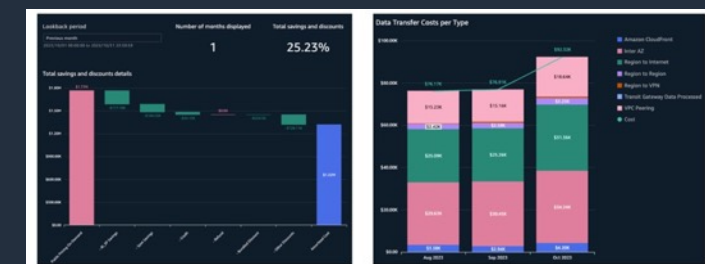
SQLで絞り込みや加工を施してエクスポート



Amazon Simple Storage Service (Amazon S3)

# Cost and Usage Dashboard powered by Amazon QuickSight

- Amazon QuickSightでコストと利用状況を可視化するダッシュボードをデプロイ可能に
  - CUR 2.0のエクスポート機能を利用して実装
  - Cost and Usage Report(CUR)のデータを分析するツールを独自に開発せずとも、対話型のUIで分析できる
  - QuickSightの埋め込み機能で、コストのダッシュボードをWebサイト等に埋め込み可能
- 中国リージョンを除く全てのAWS商用リージョンでご利用可能



# コスト最適化のための4つの新機能を発表

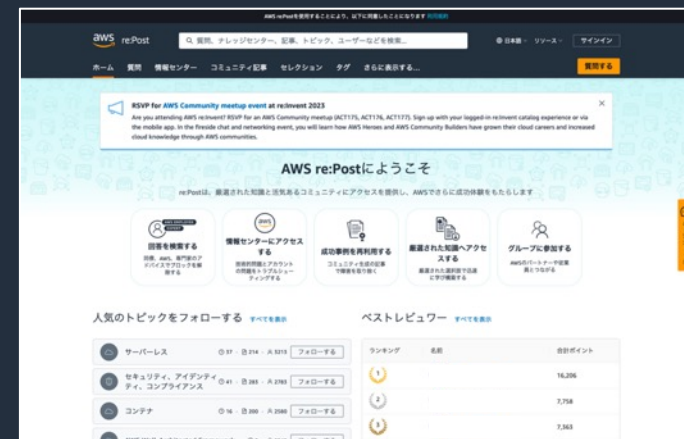
- Cost Optimization Hubの提供を開始
  - AWS Organizationsのメンバーアカウントについて、統一的にコスト最適化の推奨事項を表示・節約効果の見積もりを確認できる
- Unified Billing and Cost Management Consoleを提供開始
  - 現状把握・改善点の特定に役立つ統一されたコスト管理コンソールを提供
- AWS Compute Optimizerで推奨事項のカスタマイズが可能に
  - 推奨候補のインスタンスタイプを制限したり、32日間の実績に基づき判断するよう設定可能に。ワークロードに即した推奨事項の出力が期待できる
- GetFreeTierUsage APIの提供を開始



AWS SDKやCLIを利用して無料利用枠の使用状況を確認可能に

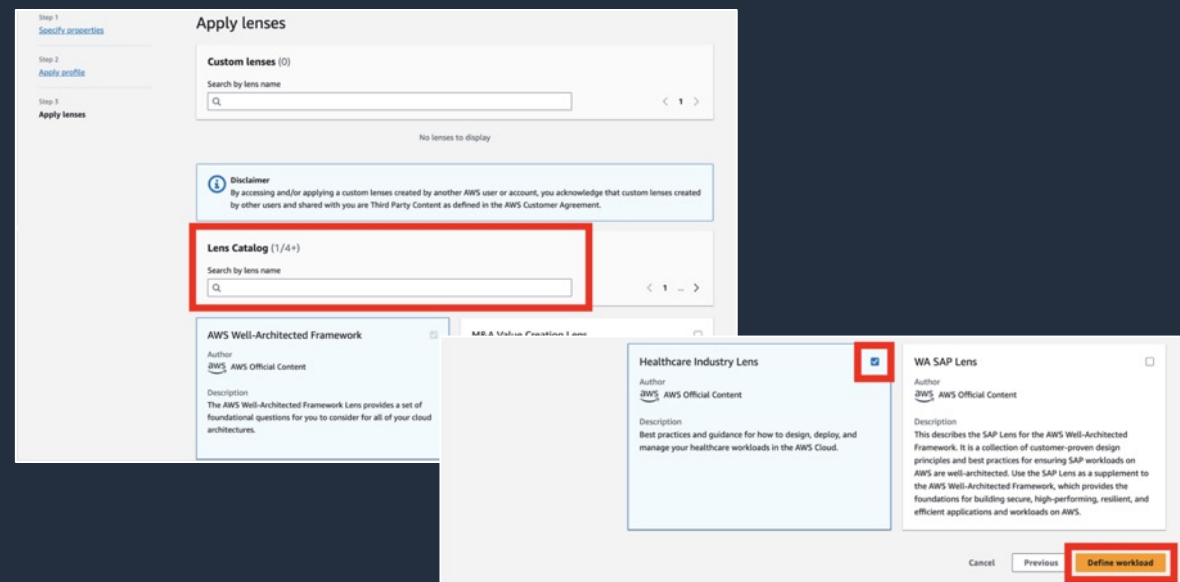
# AWS re:Post Privateが一般利用開始に

- AWS re:Postのプライベートバージョンを構築できるre:Post Privateが一般利用開始に
  - 技術情報を交換するための場を提供し、企業の従業員やAWSのお客様担当チームのコラボレーションを促進、イノベーションを加速する
  - AWSサポートセンターと統合されており、ディスカッションスレッドをサポートケースに変換できる
- Enterprise SupportまたはEnterprise On-Ramp Supportに加入している場合に利用できる



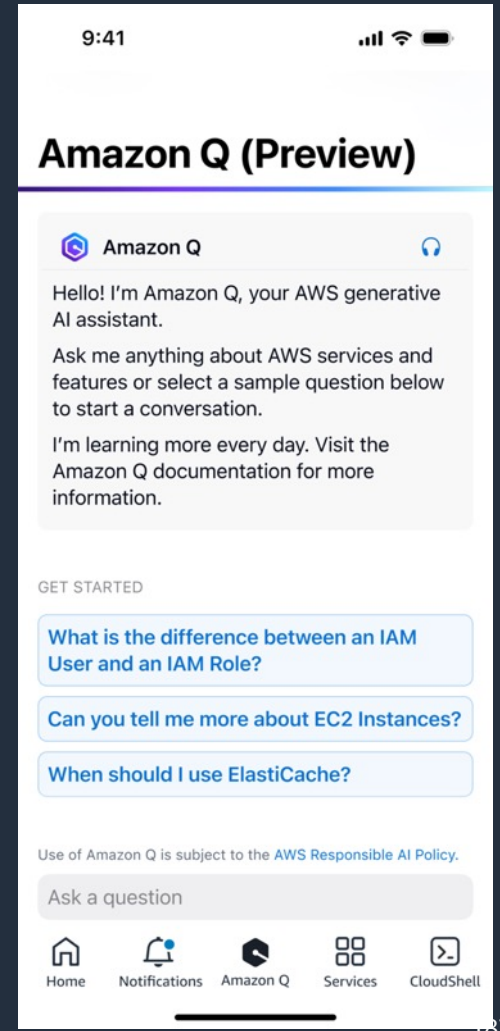
# AWS Well-Architected ToolのLens Catalogを発表

- AWS Well-Architected ToolでLens Catalogが利用可能に
  - Lensは業界やアーキテクチャ固有のチェックができるように構成された、チェック項目の追加セット
  - Lens Catalogを利用すると、業界・技術に特化した最新のベストプラクティスを探索、実装することができる



# Amazon Q in the AWS Console Mobile Applicationを発表

- AWS Console Mobile App for Androidから Amazon Qを利用可能に
  - AWSサービスの仕様や問題の調査をモバイル端末のアプリ上から実施可能
  - 回答は読み上げを行うことも可能
- AWS Console Mobile Appをインストール頂くことでプレビュー利用が可能



# お知らせ





# AWS re:Invent Recapを開催します！

- AWS re:Invent Recap – キーノートまとめ編
  - AWS Builders Online Seriesのクロージングセッションとしてお届け
  - <https://aws.amazon.com/jp/events/builders-online-series/>
- AWS re:Invent Recap – インダストリー編
  - 複数日にわけて、業界カットで振り返りをおこないます
  - <https://pages.awscloud.com/japan-reinvent-recap-industry-reg.html>
- AWS re:Invent Recap – ソリューション編
  - 複数日にわけて、テクノロジークットで振り返っていきます
  - <https://pages.awscloud.com/japan-reinvent-recap-solution-reg.html>



# Thank you!

